

平成22年度

確かな学力の育成に係る実践的調査研究

実践事例集

平成22年度

# 確かな学力の育成に係る実践的調査研究 実践事例集

○学力向上実践研究（平成20年度～22年度）

○全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究（平成22年度）

平成23年3月

秋田県教育庁義務教育課

平成23年3月

秋田県教育庁義務教育課

平成22年度

確かな学力の育成に係る実践的調査研究 実践事例集

発行月：平成23年3月

編集・発行：秋田県教育庁義務教育課

住所：秋田市山王三丁目一番一号

TEL：018-860-5144

FAX：018-860-5136

650冊作成で1部あたり単価270円

## はじめに

平成22年4月に実施された全国学力・学習状況調査で、本県の児童生徒は、4年連続してきわめて良好な状況にあるという結果を得ることができました。この要因としては、家庭・地域・学校・大学等が、それぞれの役割と責任の下で子どもを育てようとする教育環境が充実しているなど、本県の安定した教育的土壌の成果であると捉えております。

さて、今年度実施した文部科学省委託の「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」の趣旨は、「子どもたちの学力向上のための取組について、様々なテーマによるメニューを設定し、学校設置者等が学校や地域の実情等に応じたテーマを選択して調査研究を実施する。国は、その先導的な取組事例を収集し、成果の普及を図ることで教育委員会や学校における子どもたちの確かな学力の育成に係る取組を支援する。」ということであります。本県では、この趣旨の下、本県の課題を改善するために、次の4つのメニューにおいて小学校17校、中学校10校の推進校・研究校を中心として、その実践研究の推進と成果の普及に取り組んで参りました。

### 【本県の課題】

(1) 基礎学力の確実な定着 (2) 活用する力を一層伸ばす

(3) 中1ギャップへの対応及び小・中連携

< 4つのメニュー >

① 学力向上実践研究

② 全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究

③ 学校図書館の有効な活用方法に関する研究

④ 環境教育に関する取組を活用した調査研究

また、各メニューにおける取組の充実を図るため、確かな学力の育成に係る実践的調査研究支援委員会を設置し、各メニュー間の情報共有、実施内容の調整、運営についての指導・助言を行ってきました。

今年度は、メニュー①の全ての学力向上実践研究推進校が、公開研究会を開催するとともに、3教育事務所主催の成果発表会では、メニュー①と②の全ての研究校が全国学力・学習状況調査結果と県学習状況調査の結果を比較・分析するなど貴重な報告がなされました。

本実践事例集は、4つのメニューの中の①と②取組の中から、地域や学校の実態及び課題を踏まえた特色ある取組や特に効果のあった取組を「成果」と「成果に寄与したと考えられる取組」という形でまとめております。

各学校においては、本実践事例集で示された「成果に寄与したと考えられる取組」、別に示されている全国学力・学習状況調査報告書「学校改善支援プラン」を踏まえて、今後の学力向上に係る取組が一層効果的に推進されることを期待しております。

最後になりますが、今年度、実践研究に取り組まれた推進地区、推進校、研究校等及び関係各位に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

秋田県教育庁義務教育課

課長 橋田 裕

# 目 次

## はじめに

### 平成22年度確かな学力の育成に係る実践的調査研究

本県の取組概要及び状況	1
-------------	---

### 学力向上実践研究

美郷町教育委員会	5
美郷町立千屋小学校	7
美郷町立千畑南小学校	10
美郷町立千畑中学校	13

### 全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究

鹿角市立十和田中学校	18
北秋田市立米内沢小学校	20
北秋田市立前田小学校	22
北秋田市立森吉中学校	24
能代市立第五小学校	26
三種町立琴丘小学校	28
男鹿市立潟西中学校	30
潟上市立天王小学校	32
にかほ市立平沢小学校	34
にかほ市立院内小学校	36
にかほ市立小出小学校	38
にかほ市立仁賀保中学校	40
大仙市立中仙小学校	42
大仙市立清水小学校	44
大仙市立中仙中学校	46
仙北市立西明寺中学校	48
横手市立浅舞小学校	50
横手市立平鹿中学校	52
湯沢市立湯沢北中学校	54
羽後町立西馬音内小学校	56

# 平成22年度確かな学力の育成に係る実践的調査研究

## 本県の取組概要及び状況

- 1 推進地区・推進校等一覧
- 2 実施計画
- 3 成果と課題

# 平成22年度確かな学力の育成に係る実践的調査研究

## 本県の取組概要及び状況

### 1 推進地区・推進校等一覧

(1) 学力向上実践研究（平成20年度～22年度）

推進地区名		推進校名（3校）
美郷町	小学校2校	千屋小学校 千畑南小学校
	中学校1校	千畑中学校

(2) 全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究（平成22年度）

市町村名		調査研究校名（20校）
鹿角市	中学校1校	十和田中学校
北秋田市	小学校2校	米内沢小学校 前田小学校
	中学校1校	森吉中学校
能代市	小学校1校	第五小学校
三種町	小学校1校	琴丘小学校
男鹿市	中学校1校	潟西中学校
潟上市	小学校1校	天王小学校
にかほ市	小学校3校	平沢小学校 院内小学校 小出小学校
	中学校1校	仁賀保中学校
大仙市	小学校2校	中仙小学校 清水小学校
	中学校1校	中仙中学校
仙北市	中学校1校	西明寺中学校
横手市	小学校1校	浅舞小学校
	中学校1校	平鹿中学校
湯沢市	中学校1校	湯沢北中学校
羽後町	小学校1校	西馬音内小学校

### 2 平成22年度の実施計画について

(1) 研究のねらいと課題

<学力向上実践研究>

#### ① ねらい

新学習指導要領の円滑な実施に向け、県教育委員会との連携・協力の下、地域の実情や課題を踏まえ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うための実践研究を推進し、その成果の普及を図ることにより学力の向上に資する。

② 課題

- ・学習意欲の向上
- ・基礎学力の確実な定着を図る分かる授業の実現
- ・「活用」する力を伸ばす授業の創造
- ・理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導の充実（特に理解や習熟の程度の高い児童生徒への効果的な手立ての工夫や発展的な学習の在り方を含む）
- ・校種間の連携に基づいた授業の充実

<全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究>

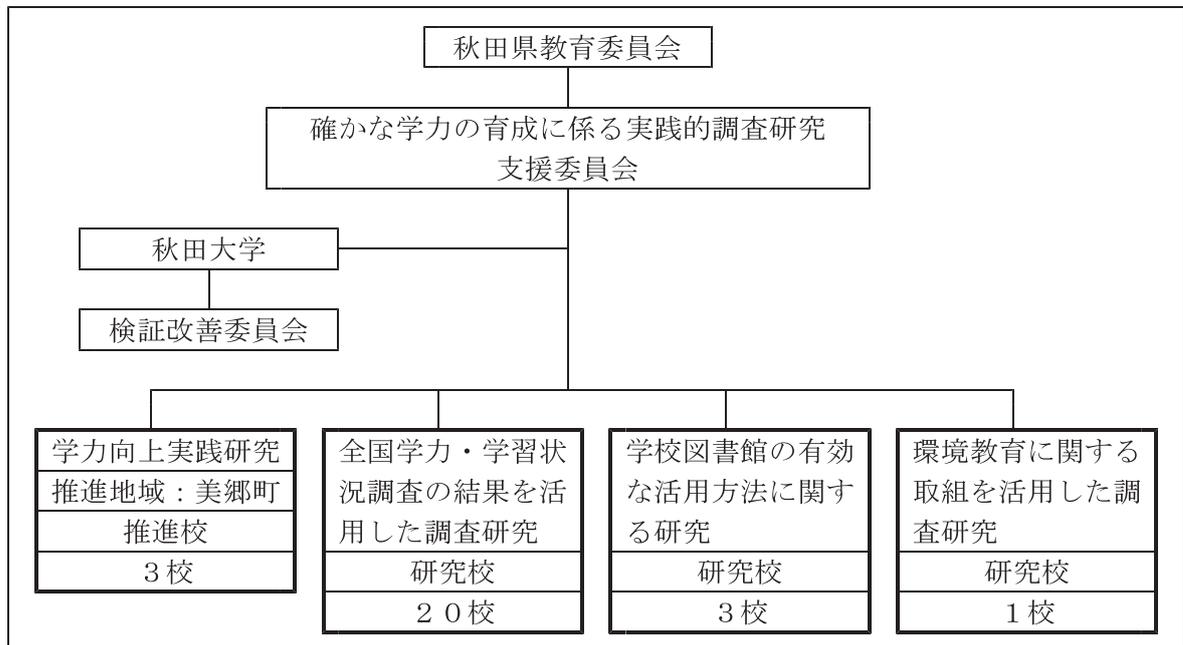
① ねらい

全国学力・学習状況調査の結果等を活用・分析して明らかになった課題のうち、地域内の学校が共通に有しており、地域的に解決が求められている課題や、地域的な事情等から個々の学校のみでは解決が困難な課題等の改善を図るため、アクションプランに基づき、教育委員会、学校等が連携しながら地域として学校の教育活動等の改善に取り組む調査研究を実施し、その成果を基に教育施策の改善を図るとともに、全国への成果の普及を図る。

② 課題

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究
- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携
- オ) 地域社会との連携

(2) 実施体制



### 3 平成22年度の成果と課題

#### (1) 成果

① 研究内容の焦点化，具体化によって特色ある研究が推進された。

学 校 名	主 な 特 色
鹿角市立十和田中学校	「活用する力」を付けるための工夫等
北秋田市立米内沢小学校	問題解決的学習における授業展開例の共通理解，学び合いの場の工夫等
北秋田市立前田小学校	かかわり合いの場を位置付けた授業構成の工夫，教科担任制の取組等
北秋田市立森吉中学校	各教科における「書くこと」を重視した取組等
能代市立第五小学校	「情報を選択する力」，「考えを数学的に説明する力」を育てる取組等
三種町立琴丘小学校	「読みの10の観点」を用いた単元構成の工夫，読書指導の取組等
男鹿市立潟西中学校	数学科における学習活動の工夫等
潟上市立天王小学校	読み取る力を育てる活用問題の教材化と授業づくり等
にかほ市立平沢小学校	読解力の向上，地域社会との連携等
にかほ市立院内小学校	学び合いの場の充実，学校間の教職員の連携等
にかほ市立小出小学校	読解の具体的なプロセスを意識した授業づくり等
にかほ市立仁賀保中学校	言語活動を学習過程に取り入れた授業等
大仙市立中仙小学校	(中仙地区共通実践事項) 継続的な検証改善サイクルの確立 小・中連携に基づく授業改善の推進 9年間のスパンで育てる「学び方」の指導 等
大仙市立清水小学校	
大仙市立中仙中学校	
仙北市立西明寺中学校	学習習慣の形成（学習連結表等），学び合う学習活動の工夫等
美郷町立千屋小学校	学習習慣の定着（家庭学習の手引き等），ノート作り指導の工夫等
美郷町立千畑南小学校	「学び合い」を生かした授業構成と読み取る力の育成等
美郷町立千畑中学校	学習過程の工夫，授業と家庭学習のリンク等

学 校 名	主 な 特 色
横手市立浅舞小学校	国語科における学習活動の工夫等
横手市立平鹿中学校	P D C A サイクルによる授業改善, 話し合い活動等
湯沢市立湯沢北中学校	話し合い活動, 教科の枠を超えた授業づくり等
羽後町立西馬音内小学校	まとめる手立ての工夫, 学び合いの場の工夫等

- ② 推進校・研究校では、全国学力・学習状況調査と県学習状況調査等の比較によって児童生徒の学習意欲や学習習慣、学力等に向上が見られるなど、取組の成果が現れた。
- ③ 全国学力・学習状況調査の課題が改善されているか県学習状況調査で比較できる集計・分析システムを各校で活用し、課題改善に役立てることができた。
- ④ 小・中連携について取り組んだ推進校・研究校では、地域の児童生徒の傾向を把握することができ、「家庭学習の手引き」や「学び方を育てる」資料を作成するなど、小・中学校9年間を見通した指導につなげることができた。
- ⑤ 「全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究」については、県内の教育事務所管内（三管内）で調査研究校連絡協議会を開催したが、管内における課題の指導改善方法を共有したり、より一層学校間のネットワークを広げたりすることができ、取組の充実を図ることができた。
- ⑥ 秋田大学の教員との連携により、理論的・専門的見地からの指導を得て、研究の方向性や検証方法を明確にし、研究をより一層推し進めることができた。
- ⑦ 「平成21年度学力向上推進事業 実践事例集」や秋田県検証改善委員会による「学校改善支援プラン（H19・20・21）」により、特に「活用」に関する授業改善が進んだ。
- ⑧ 学力向上実践研究推進校の公開研究会、各教育事務所単位での成果発表会、秋田県教育研究発表会等により、県内外への成果の普及に努めた。

## (2) 課題

- ① 県学習状況調査質問紙の「勉強が好きだ、分かる」などの回答結果から、小学校から中学校にかけて学習意欲が低下する傾向は過去3年間続いているが、各学年ごとにみると、年々改善されてきている。生活習慣や学習習慣、学習方法等について、小・中の連携をより一層強めて、さらなる改善を図っていく必要があると考える。
- ② 継続的な検証改善サイクルの確立の中で、特に評価と改善の部分については、計画の段階から具体的な方向性を示すなど一層検討していく必要がある。全国学力・学習状況調査や県学習状況調査を活用することはもちろん、取組に適した検証方法を考えていきたい。
- ③ 「活用」に関わる力に関しては、資料や情報を整理、解釈して、それを基に筋道立てて説明したり書いたりする力が十分ではない。学校訪問等を通して課題や授業研究会の在り方を含めた授業改善を一層推進する必要がある。

### ＜学校改善支援プラン（全国学力・学習状況調査報告書）と併せて活用してください＞

秋田県検証改善委員会では、平成19年度から「学校改善支援プラン」を発行しております。その中で、学力向上に係る特色ある取組を紹介しておりますので、本実践事例集と併せて活用してください。

なお、「学校改善支援プラン」は、「美の国あきたネット（<http://www.pref.akita.lg.jp>）」及び「学力向上支援Web」から、ダウンロードすることができます。

「学力向上実践研究」

美郷町教育委員会

美郷町立千屋小学校

美郷町立千畑南小学校

美郷町立千畑中学校

## I 推進地区の概要

推進校数	小学校	2校	中学校	1校	合計	3校
推進校名	千屋小学校, 千畑南小学校 千畑中学校					

## 1 研究のねらい

- ・当町は合併前の旧町村ごとに3つの地区（六郷・仙南・千畑）から形成されているが、本推進地区の研究推進を核として町内各校の連帯感を一層深める。
- ・児童生徒が学習に自信をもつことで町が目指す「人づくり」につなげる。
- ・研究推進を通して教職員の職能意識の維持向上に努め、教職員にとって働きがいのある町を目指す。

## 2 研究の概要

## (1) 教育委員会の主な取組

## ① 総合的な学習の時間における環境教育の充実（主として水環境）

当町の恵まれた「水環境」を、計画的、継続的に学習していくために、年次計画で「研究指定地区（校）」を定め、研究の成果を発表している。指定地域（校）に対しては、関係機関の指導、協力を要請し、学習環境の整備に努めている。なお、平成23年7月1日には、全国170市町村の自治体が参加している「全国水環境保全市町村連絡協議会（通称全国名水サミット）」の全国大会を当町で開催し、町の小中学生が研究発表する予定である。

## ② 幼保・小・中の連携

小1プロブレムの解消と、幼保・小・中の一貫した教育推進を目的とし、小学校就学前に幼保担当者と小1担当者がペアを組み、1年間相互に授業参観、TT、行事参加等の研修を行った。

## ③ 児童生徒の交流

学校統合を見据え、全町規模で児童生徒の交流に取り組んでいる。サイエンスショー・演劇鑑賞・音楽祭・学習交流等を実施し、連帯意識の向上に努めている。

## (2) 教職員の指導力向上のための方策

- ・研修視察を積極的に受け入れる（千屋小15回、千畑南小17回、千畑中15回、議会4回、教委7回＝以上平成22年度）ことで研究の振り返り、自己評価の機会とした。
- ・本研究推進を機会に夏季・冬季休業を活用し、全教職員を対象に外部講師による講演会を行っている。近隣の学校にも呼びかけ参加いただき、好評を得ている。
- ・全教職員・教育関係者で組織する「美郷町教育を語る会」を設立し、『まなび』『こころ』『からだ』プロジェクトに分かれて全員が研修してきている。

## (3) 実践研究の成果等の検証の方策

町民の声を町政に反映することを目的に行政サイド（町長等）が各園・学校のPTA等に出向き保護者と意見交換している。研究推進後の意見交換会では、保護者から「TT指導の継続」「特別支援学級の小から中への継続連携」「家庭学習マニュアルの有効性と活用」等の活発な意見が出され、研究推進の検証の機会となった。

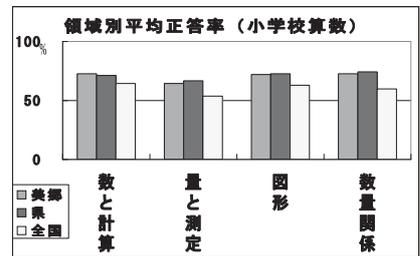
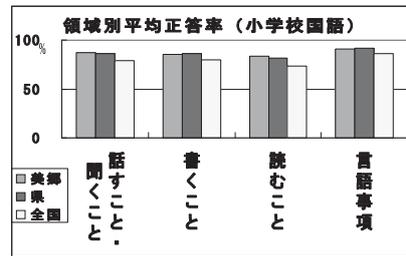
## II 学力調査等に見られる成果

町内の小・中学校は、国語A・B、算数・数学A・Bすべてにおいて、全国平均正答率を上回っている。また、知識に関するA問題は県の平均正答率と同じ程度であるが、活用に関するB問題の平均正答率は県の平均正答率よりも高い傾向にある。

### ◎小学校(資料-1)

領域別平均正答率において、国語は、「言語事項」90%台、その他は85%台と高い正答率である。算数は、県の平均正答率と比べて「数と計算」「図形」「数量関係」は同程度であるが、「量と測定」が2.5ポイント下回っている。

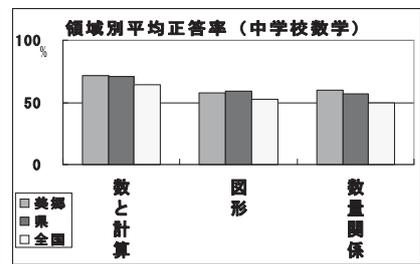
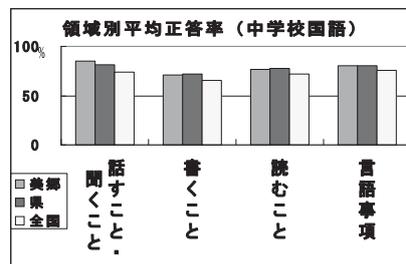
資料-1 小学校領域別平均正答率 (グラフはA問題・B問題の平均正答率の平均値)



### ◎中学校(資料-2)

領域別平均正答率において、国語は、県の平均正答率と比べて「話すこと・聞くこと」「言語活動」は上回っているが、「書くこと」「読むこと」については、1ポイント下回っている。数学は、県の平均正答率と比べて「図形」が1ポイント下回っている。

資料-2 中学校領域別平均正答率 (グラフはA問題・B問題の平均正答率の平均値)



## III 3年間のまとめと今後の取組

### 1 研究の成果と課題

[平成22年11月5日の 公開研究会での参観者の感想から]

- ・パネルディスカッションで保護者の話を聞くことができたのは出色。
- ・学校だけでなく、町全体が教育を大事に考えていかなければ、このような成果は望めない。
- ・学校、PTA、地域の協力体制がしっかりでき、同じ方向を向いていると感じた。
- ・朝、道案内しているPTAの方を発見し、地域をあげて取り組んでいることを感じた。

○以上のように、「町(地域)をあげて」という意識化は図られたようである。

○意識化という点では、「美郷町教育を語る会」の設立が大きかったと感じている。子どもたちが必要としている、あるいはこの先必要とするであろう「力」を付ける「場」、あるいは「職務」としての「学校」そのものを見直す機会となった。

- 当町は近々に学校統合を控えている。学校数が減るということは教職員数が減ることである。より一層の教職員個々の資質の向上が求められる。
- 町が配置している生活支援員の要請を希望する児童生徒の数が増加している。(平成20年度37名→平成22年度52名)生活習慣、しつけ等を含んだ教育について家庭、園、学校、行政がともに考えるべき課題である。

### 2 今後の取組

- (1) 「美郷町教育を語る会」で立ち上げた3つのプロジェクト『まなび』『こころ』『からだ』について町全体で実践研究を深めていく。
- (2) 小・中学校の統合を機に町立図書館と学校図書館を図書検索システムで結ぶとともに、学校間も可能とし、読書活動の充実を図る。
- (3) 外部講師の招聘を継続し教職員の研修に資する。

## I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	2	1	2	1	9	16
児童数	21	37	39	46	38	44	3	228	
学校のホームページアドレス					http://www.obako.or.jp/matunami/				

## II 学力調査等に見られる成果

## (1) 学習習慣、学習意欲について

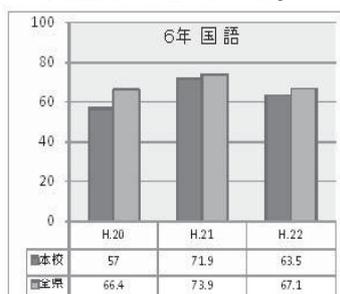
「学習用具を整えている」「計画的に家庭学習をしている」児童が年度を追うごとに増加してきている。また、国語や算数の授業について「好きだ」「分かる」と答えた児童が増加するとともに、自分の考えを分かりやすく書いたり自分の考え以外の解き方を求めたりするなど、学習に対しての意欲も向上してきている。(資料1)

項 目	H. 21. 2	H. 21. 12	H. 22. 12
学習用具を、前日か、その日の朝に確かめていますか。	88.1%	90.8%	94.1%
家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。	85.2%	88.2%	91.1%
テストで間違えたところを後で勉強していますか。	78.4%	85.1%	93.5%
国語の勉強は好きですか。	79.2%	84.2%	89.3%
国語の授業の内容はよく分かりますか。	86.0%	93.0%	96.4%
理由が分かるように自分の考えを書いていますか。	85.2%	88.2%	92.3%
算数の勉強は好きですか。	78.8%	80.3%	82.8%
算数の授業の内容はよく分かりますか。	88.6%	92.1%	92.3%
もっと簡単に解く方法がないか考えますか。	88.6%	89.0%	91.1%
解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか。	89.8%	95.2%	97.0%

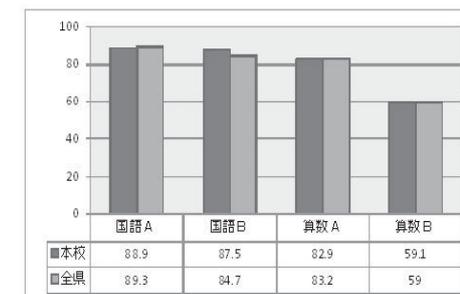
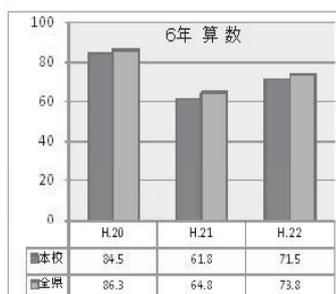
資料1 「生活や学習についてのアンケート(本校)」 「はい」「どちらかといえばはい」と答えた3～6年の児童の割合

## (2) 学力面について

資料2, 3に示すように、県学習状況調査では県の平均値を下回ってはいるが、徐々に差は縮まってきている。全国学力・学習状況調査では、国語A・国語B・算数A・算数Bのいずれにおいても県の平均とほぼ同レベルにあり、「基礎的・基本的な学力」「活用する力」とともに向上してきている。



資料2 平成22年度 秋田県学習状況調査



資料3 平成22年度 全国学力・学習状況調査

### Ⅲ 学力調査等の成果に寄与したと考えられる取組

#### 1 具体的な研究内容

重点課題を次の2点として取り組んだ。

- ・日常的な学習意欲の高揚と学習習慣の確実な定着のための工夫
- ・児童一人一人の考えを生かし、友達と関わり合いながら学びを深めたり課題を解決したりするための授業構成と指導方法の工夫

#### 2 具体的な取組

(1) 家庭との連携を密にした家庭学習の内容の充実とその習慣化

##### ① 「家庭学習の手引き」の発行

「保護者用の手引き」「児童用の手引き」を発行し、家庭学習の進め方を具体的に提示した。また、学級懇談会で話題にしたり日曜参観日に全校一斉に家庭学習についての学級活動を行ったりして共通理解を図った。



教室の例



全校へ発信

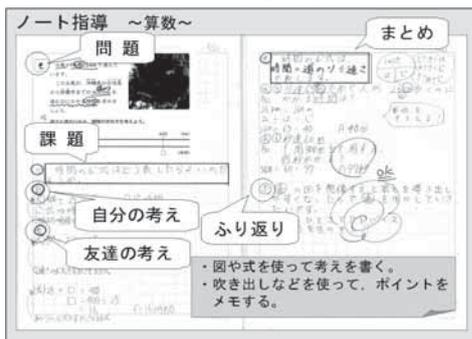
##### ② 家庭学習コーナーの設置

教室や図書室前に紹介コーナーを設けて、学習内容やノートの使い方のモデルを見られるようにし、よりよいやり方が分かるようにした。(資料4)

資料4 「家庭学習コーナー」

(2) 自分のノートを活用して新たな課題に取り組むことができるノート作り指導の工夫

学習の跡が分かるように、また、既習事項が活用できるように、ノート作りの約束を全校統一して取り組んだ。(資料5)



- ノート作りの約束
- ・課題、まとめは赤で囲む。
  - ・自分の考え、友達のかきは青で囲む。
  - ・具体的なふり返りを書く。
  - ・1時間を見開き2ページに書く。

資料5 ノート作り

(3) 「学びのスタイル」を基にした授業の継続実践

四つの過程における児童の姿や教師の支援の在り方を共通理解し、授業改善を行った。特に、自力思考を基に友達と関わり合うことによって、課題を解決し、学びを深めたり広げたりすることに力を注いできた。

(資料6)

(4) 有意義な話し合いや関わり合いにするための「プラスワンの話し合い」

「探る」過程での関わり合いを現状からもう一つ踏み出すことによって充実させるために、「プラスワンの話し合い」を進めてきた。(資料7)



資料7 プラスワンの話し合い

学びのスタイル		
過程	学習活動・児童の姿	教師の支援として
つかむ	○前時のより返り ○問題の願意をとらえる ○課題やめあてをつかむ	○問題提示の工夫 ・魅力ある問題を ○課題設定の工夫 ・明確な課題を
見通す	○解決(方法、見当)の見通しをもつ ・分かること、分からないことの区別 ・経験、体験、既習事項を生かして	○既習事項の抽出 ・どのように ・どのくらい ・何が分かれればいいか ・何を伝えるか
探る	○自力思考 → 表現 ↑ ↓ ○小集団思考 ・友達、教師と ・自分の考えの ・全体思考 ・よりよいものに ↑ ↓ ○思考力を高めるために □作業的、体系的な活動を □図や式にして □既習事項をもとにして □表を用いて ■比較して ■分類して ■帰納的に	○考える時間の保障 ○評価 ・解決 → どんな考えか ・未解決 → なぜ、どこで ○かかわり合う時間の設定 ※プラスワンの話し合い ○発問によって解決を支援 ・考えを掘り下げる ・掘さぶる ・関連づける ・発展させる ○批評する、認める
深める	○まとめ(論述) ・友達の自覚 ○適用問題 ○ふり返り	○発問段階に応じたまとめ方のパターン ・教師か ・キーワードをもとに自分で ・自分で ○学習事項の確認 ○次時に生きる具体的なふり返り

資料6 「学びのスタイル」

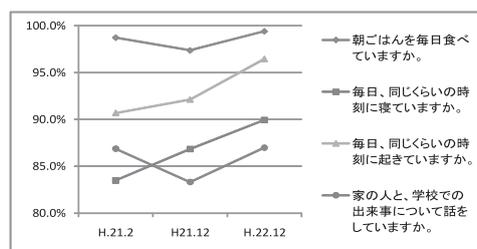
### 3 成果と検証

#### (1) 検証方法

- ① ノートやプリントなど日常の児童の記録
- ② アンケートや実態調査(児童・保護者・教師)
- ③ 全国学力・学習状況調査, 県学習状況調査の経年比較と分析

#### (2) 成果と課題

- 学習習慣とともに基本的な生活習慣についても調査を継続してきたことにより, 望ましい習慣が身に付いてきている。(資料8)
- 関わり合うことが課題解決に結び付き, 学びの喜びにつながっている。(資料9)
- 「校長室だより」「学校報」「学年報」等を通じて学校の様子を知り, 「学校とともに」という意識をもつ保護者が増加してきている。(資料10)
- 自己評価や大学教員の指導の下, 活性化させた校内研究会, 効果的だった手立てを共有すること等が教師の意識を変え, 授業改善につながった。(資料11)
- 「かかわり合い」をより有効に機能させるために, その在り方についての研究を重ねていく。
- 学習のベースとなる読解力を高めていく必要がある。



資料8 生活習慣の変化(本校アンケート)

- ・分からないところがある。
- ・よりよい意見にまとめることができる。
- ・新しい発見がある。
- ・友達の気持ちが変わるようになった。

資料9 「かかわり合い」についての3～6年の児童の感想

項目	H20	H21	H22
PTAや学校行事の機会に学校へ来ていますか。	94.9%	95.9%	96.9%
学校や職員は、子どもについて相談したり話し合ったりしやすい雰囲気になっていますか。	97.9%	98.9%	99.9%

資料10 保護者による「学校診断アンケート」「はい」「大体」と答えた割合

授業の様子	6月	9月
関心・意欲を高める工夫をしている。	3.1	3.1
学び合い(かかわり合い)を深める工夫をしている。	3.0	3.1
次時・生かすための評価を工夫している。	3.0	2.8
発問を工夫している。	3.0	3.1
ノートの書き方など学習のスキルを指導している。	3.8	3.3

資料11 教師アンケート  
4:いつも 3:ときどき 2:あまり 1:ほとんど

### IV 3年間のまとめと今後の取組

#### 1 研究の成果と課題

- 秋田型の学習過程を基にした「学びのスタイル」を継続実践することにより, 学び方が身に付き, 「勉強が楽しい」という児童が増えた。
- PDCAサイクルを機能させることにより, 個人や全体の取組を見直し, 研究の成果を共有するとともに, 課題について具体的な改善策を講じて次へと向かう体制ができた。
- 地域として取り組んだことにより, 地域の児童の傾向を把握することができた。結果として, それが「家庭学習の手引き」や「学習スキル表」等の作成につながり, 小・中学校9年間を見通した指導に結び付いた。
- 学び方をしっかりと身に付け, 意欲的に学び, 生涯にわたって豊かに学ぶ力, 生きる力を育んでいくために, さらに地域や家庭, 小・中学校と連携して取り組んでいく必要がある。

#### 2 研究成果の普及について

- ・本校の取組を県や自校のホームページに載せ, 情報発信する。
- ・学校報やPTA懇談会等で話題にするなどして, 保護者への啓発をしていく。

#### 3 今後の取組について

- ・今年度の取組から見えてきた課題について, 引き続き研究と実践を重ねていく。
- ・地域の現状や願い, 保護者の願いに沿った学校づくりと教育活動を進めていく。

### V 研究実践を振り返って

3年という長期にわたっての実践研究であったが, 多くの先生方から御指導と御協力をいただきながら取り組んできた。地域や家庭と連携すること, 教職員が同じ方向を目指し, 成果も課題も共有しながら取り組むことが, 大きな成果を生み出すことを実感している。この経験を今後の研究推進に生かし, 精進していきたい。

たがいに高め合う子どもの育成  
～思考力・表現力を高める指導方法の工夫～

美郷町立千畑南小学校 校長 高山 泰文

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
児童数	1	1	1	1	1	1	0	6	10
学級数	21	29	27	21	24	17	0	139	
学校のホームページアドレス						http://www.obako.or.jp/wanpaku/			

II 学力調査等に見られる成果

(1) 県学習状況調査と全国学力・学習状況調査の経年比較から

児童の『思考力・表現力』を見取るための客観的資料として、6年生の県学習状況調査と全国学力・学習状況調査について経年比較を行った。昨年度の県学習状況調査の結果では、国語、算数とも県平均を上回り、特に算数は大きく上回った。中でも算数の「表現・処理」と「知識・理解」に関する問題の正答率が高かった。しかし、国語は県平均を超えたものの、研究の重点の一つである「読むこと」の項目はわずかにプラスであり、「書くこと」の項目はマイナスの結果だった。そこで、「読むこと」と「書くこと」に指導の重点に置いてきた。

今年度4月の全国学力・学習状況調査を観点別に結果を分析し、県学習状況調査の結果と比較してみた。課題であった国語の「書くこと」に関する正答率は、県平均を上回ることができた。国語Aの「読むこと」に関する問題の正答率も県平均を大きく上回ることができた。算数はB問題の「表現・処理」が下がったものの、依然として全体的には正答率が高かった。

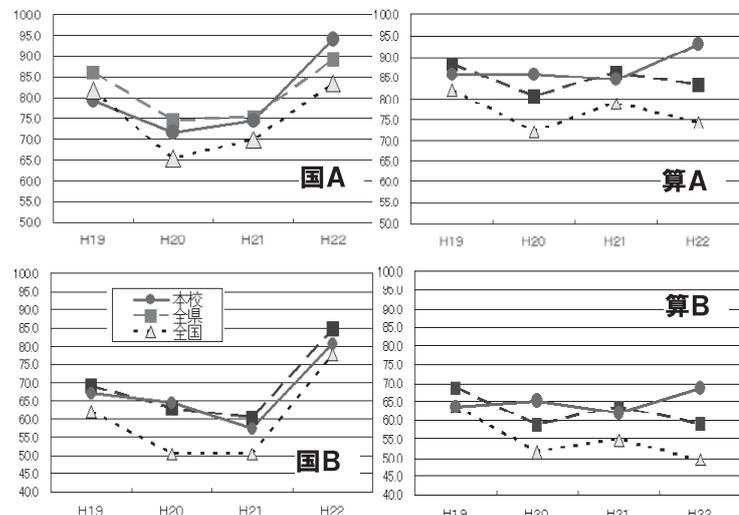
		県学習状況調査 (H21・12月)	全国学力・学習状況調査(H22・4月)		県学習状況調査 (H22・12月)
国語	全体	5.1	4.8	-4.2	10.0
	書くこと	-14.5	7.5	1.9	-5.9
	話す・書く	9.6	3.6	-5.8	24.8
	読むこと	0.6	6.9	-5.6	11.6
	言語事項	8.4	4.0		9.1
算数	全体	12.3	10.0	9.6	15.9
	考え方	9.7		8.4	14.7
	表現・処理	10.1	7.6	4.3	19.7
	知識・理解	15.1	12.2	19.7	12.4

今年度の県学習状況調査の結果においても、国語や算数の平均で県の平均を上回るばかりでなく、各教科の観点ごとの正答率も上げることができた。国語の「書くこと」については県平均よりマイナスになったが、昨年よりは正答率を上げることはできた。このことから、児童の『思考力・表現力』を高めることができたのではないかと判断している。(資料1)

(資料1) 現6年生の県学習状況調査と全国学力・学習状況調査の結果

(2) 過去4年間の全国学力・学習状況調査結果の推移から

調査対象の集団は違っているが、3年間の研究の成果を現6年生の結果でみると、国語B以外は3年前の結果より上回ることができた。県の平均を下回っていた教科もだんだんその差が縮まり、年々正答率の向上がみられた。このことから、研究によるいろいろな取組の成果が表れたと判断している。(資料2)



(資料2) 過去4年間の全国学力・学習状況調査の結果

### Ⅲ 学力調査等の成果に寄与したと考えられる取組

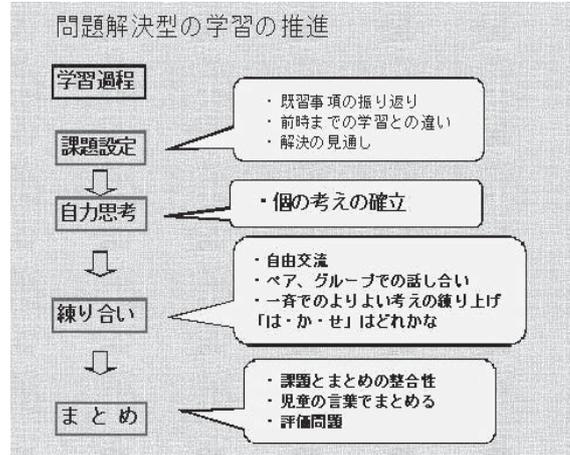
#### 1 具体的な研究内容

本校の児童の課題である思考力・表現力を身に付けるために、「(1)確かな学びにつながる『学び合い』を生かした授業構成の工夫」や、「(2)文章や資料などから必要な情報を読み取る力の育成を図るための指導の工夫」、「(3)学習した知識や技能を他の学習で活用できる力の育成を図るための指導の工夫」の3点を研究の重点として実践研究に取り組んだ。

#### 2 具体的な取組

##### (1) 確かな学びにつながる「学び合い」を生かした授業構成の工夫

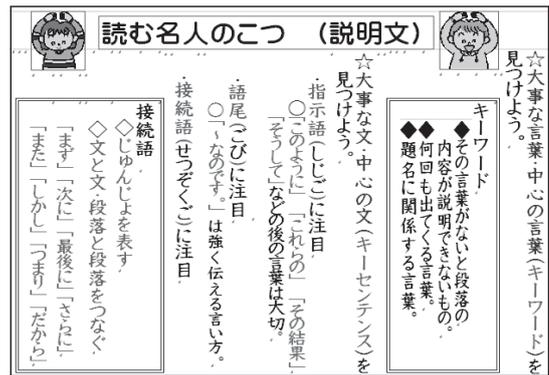
- ① 「自力解決の時間→小集団での話し合いの時間→全体での練り合いの時間」の各段階での取組の工夫(資料3)
  - ・意見発表の機会を増やし、発表力を高めるための小集団での話し合い
  - ・意見を練り上げる話し合いのポイント
  - ・練り合いの場面で、式や図だけを提示し、その意味を考えさせたり、友達の考えを読み取らせたりする場面の設定
- ② 話し合いの形態や取組の工夫
  - ・意見を伝え合う相手を自由に選んでの意見の交流(本校では、自由交流と名付ける)
  - ・学習班やペアでの意見の交流
- ③ グループでの話し合いのまとめや全体の練り合いのためのホワイトボードの使用



(資料3) 問題解決型の学習過程

##### (2) 読み取る力の育成を図るための指導改善

- ① 国語で学習した読みのポイントとなる既習事項を「読みの視点」として蓄積(資料4)
- ② 算数の文章問題での題意が確実につかめるように、絵や図をかくて考えることの習慣付け
- ③ キーセンテンスやキーワードにアンダーライン

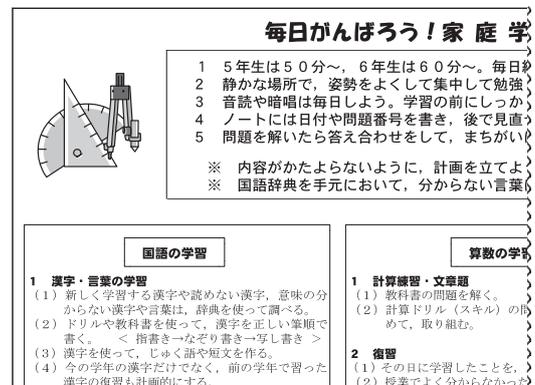


(資料4) 「読みのポイント」の表

- ① 「読むこと」と「書くこと」の連動と多様な表現様式をもつ言語活動の導入
  - ・単元のゴールにクイズ作りやパンフレット作り、新聞作り、討論会などを設定した実践
- ② 国語の学習と保健や社会の学習など他の教科と横断的に関連させた単元構成開発
- ③ 国語科と算数科の各単元で付けたい力の明確化と系統性を重視した指導の工夫
- ④ ノート指導の徹底(形式の統一と個の考えをかき残す指導)

##### (4) 家庭学習の習慣化と内容の充実に向けての取組

- ① 各学級での工夫した取組
  - ・学級担任からの励ましのコメント
  - ・学級通信でのよい学習内容の紹介
  - ・チェック表の活用や自作の表紙作り
- ② 「家庭学習の手引き」の作成と活用(資料5)



(資料5) 家庭学習の手引き

#### 3 成果と検証

##### (1) 確かな学びにつながる「学び合い」を生かした授業構成の工夫による成果

- 教師の指導改善の取組の状況や児童の変容を把握するために、教師に対するアンケートを4回行った。昨年度の10月と今年度の10月を比べると、全項目で確実な伸びがみられた。特に、児童の学習スキルの定着について、着実に力を付けてきていると実感している教師が多かった。また、児童が変容するために、教師は指導改善を行い、分かる授業にするため授業改善に積極的に取り組んだ。(資料6)
- 教師の指導改善が効果的だったか、また、児童自身が「表現力・思考力」の基礎となる「聞く力」

「話す力」「学び合う力」「かく力」「読む力」「読書」や「活用する力」を、どのくらい身に付けることができた意識しているか、アンケートによる児童の意識調査を行った。調査する時期(学年末や学年初め等)や学習内容、自己評価の慣れ等によって多少左右される感はあるが、昨年度の10月と今年度の10月を比較すると、全ての項目で児童の意識の向上がみられた。(資料7)

ほとんど…5 もう少し…2	だいたい…4 すくない…1	半分程度…3	H21.10月 平均	H22.2月 平均	H22.6月 平均	H22.10月 平均	
子どもたちは、しっかり話を聞こうとしている。			3.22	3.1	3.67	3.8	+0.58
子どもたちは、意欲的に発表している。			3.33	3.56	3.22	3.8	+0.47
子どもたちは、意欲的に学び合いをしている。			3.89	3.89	3.67	4.11	+0.22
子どもたちは、既習事項を活用して問題を解こうとする態度が身に付いている。			3.56	3.56	3.56	3.78	+0.22
子どもたちは、学ぶ楽しさを実感している。			3.33	3.67	3.56	3.8	+0.47
子どもたちは、学習スキル(聞く、話す、かく、音読)が定着している。			3.11	3.6	3.67	3.7	+0.59
子どもたちは、家庭学習の習慣が定着している。			3.56	4.11	4.78	4.89	+1.33
分かる授業にするために工夫している。			3.38	3.78	4	4	+0.65
個に応じた指導を工夫している。			3.38	3.67	3.56	3.67	+0.29
T.T、少人数学習の指導の仕方を工夫している。			3.38	3.67	3.33	3.67	+0.29
子どもたちの学び合いが活性化するように工夫している。			3.5	3.78	3.67	3.89	+0.39

6年生	H21年10月	2月	H22年6月	10月
聞く	82.4	80.9	85.3	85.3
話す	75.0	89.7	77.9	89.7
学び合い	70.6	73.5	69.1	80.9
かく	80.9	83.1	78.7	83.8
読む	79.4	82.4	83.1	83.1
読書	89.7	94.1	94.1	94.1
活用	85.3	86.8	86.8	86.8

(資料7)「学習力」に関する児童の意識調査

(資料6) 教師による児童の実態アンケート<一部抜粋>

## (2) ノート指導の成果

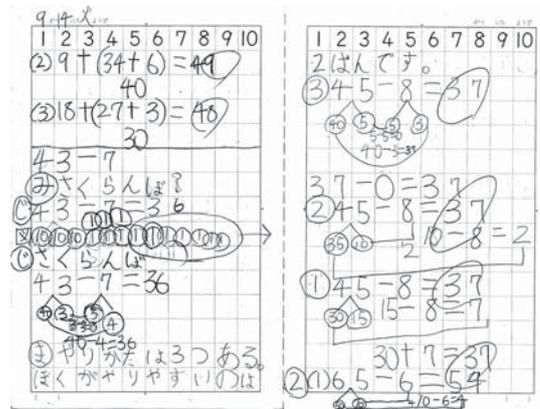
自力思考の段階で、自分の考えを言葉や図で表す指導を取り入れた。初めは、考えたことをどのように言葉や絵で表したらよいか分からなかった児童も、自分の考えと似た児童のやり方をまねたり、授業の中でかいたアレイ図やサクランボのかき方を使ったりして、自分の考えをだんだんかき表せるようになってきた。低学年でも一つの課題に対して、幾通りかの考えでかき表せるようになってきた。(資料8)

## (3) 家庭学習の習慣化と内容の充実の取組の成果

アンケートによると、全学年で家庭でも学習を自主的に行っている児童が増えた。家庭での学習時間は、低・中学年ともほとんどの児童が「学年×10分」の目安を超えていた。高学年になるほど1人当たりの平均の学習時間は増えていた。

[保護者の自由記述から] ※一部抜粋

- 一人勉強で先生から指定がない日は、自分で進んで取り組むようになりました。初めは「どこをやればいいのか」と聞いてくることがありましたが、今では自分の意思で「これをやる。」と決めてがんばっています。
- 低学年で家庭学習の習慣が身に付いているため、家に帰るとドリルとノートを広げています。
- 習慣付いていて、よく取り組んでいると思います。夏休み中に一人勉強ノートの展示があり、ノートの使い方や学習内容の工夫などを知るよい機会だったと思います。



(資料8) 2年生のノート例

## IV 3年間のまとめと今後の取組

### 1 研究の成果と課題

- PDCAサイクルの確立によって、教科部会が中心になって取組の改善や軌道修正などの案を立て、それに沿って全教職員で検討し共通理解を図って実践に当たるなど、教師の積極的な指導の改善が行われるようになった。
- 小・中の連携が密になり、9年間の系統性を踏まえた「家庭学習の手引き」や「学習スキル表」を作成することで、一貫性のある指導ができるようになった。
- 確かな学力を身に付けた児童の育成のために、さらに授業改善や家庭・地域との連携に努めていく必要がある。

### 2 研究成果の普及について

本校の取組を県と学校のホームページとに載せ、情報発信する。

### 3 今後の取組について

- ・各教科における言語活動の関連と充実した言語活動への取組
- ・確かな学びにつながる「学び合い」の工夫
- ・学校と家庭と地域の連携の在り方

## V 研究実践を振り返って

この3年間、秋田大学の先生方を始めいろいろな先生方から教をいただく機会を得、目指す子ども像に全教職員がベクトルをそろえて研修に励んできた。教師間の「学び合い」も積極的に行われるようになり、授業力の向上を図ることができた。とても貴重な3年間だった。

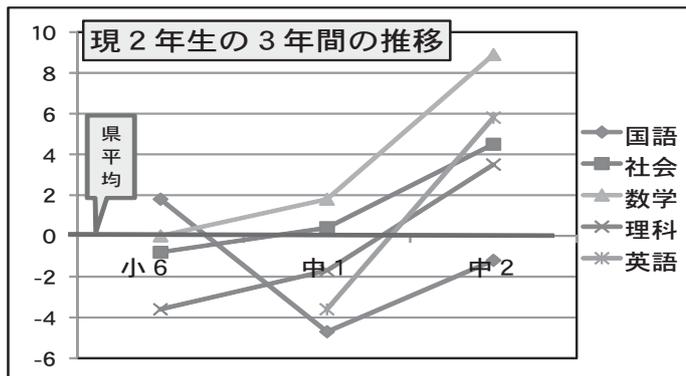
I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	2	2	2				1	7	16
生徒数	66	70	65				1	202	
学校のホームページアドレス							http://www.obako.or.jp/mahirune/		

II 学力調査等に見られる成果

(1) 学力面の状況について

現2年生の県学習状況調査における過去3年間の結果は資料1のとおりである。学習内容の定着状況が改善され、学力が向上してきている。



資料1 県学習状況調査結果

(2) 授業改善について

資料2に示すように、話し合い活動や発表の機会が保障されていると感じている生徒の割合が80%を超えていることから、学び合いの活動が充実し、授業改善が進んできていると判断している。

番号	質問内容	H21	H22	H21・県の差	H22・県の差
11(43)	学級では話し合って学級のきまりなどを決めている	96.9	82.3	6.8	10.9
13(47)	授業では自分の考えを発表する機会が与えられている	89.5	87.1	2.0	13.8
13(48)	授業では生徒間で話し合う活動をよく行っている	85.5	82.3	6.8	27.0

資料2 全国学力・学習状況調査生徒質問紙結果 I

(%)

(3) 学ぶ意欲について

本校では、9割以上の生徒が授業の復習を行い、苦手教科やテストで間違えたところも意識的に学習するなど、短時間でも内容を充実させて取り組めるようになってきている。また、家庭学習ノートの活用状況からも、めあてをもって計画的に取り組んでいる生徒が増えていることが分かる。(資料3参照)

番号	質問内容	H21	H22	H21・県の差	H22・県の差
3(16)	授業時間以外に、平日に2時間以上勉強をする	13.2	8.1	-18.5	-27.6
	授業時間以外に、平日に1時間以上勉強をする	69.8	83.9	13.2	17.7
6(25)	自分で計画を立てて勉強をしている	44.7	54.8	4.8	13.0
6(26)	学校の宿題をしている	92.1	93.5	3.9	8.9
6(28)	学校の授業の復習をしている	76.3	93.5	19.0	50.0
6(29)	苦手な教科の勉強をしている	73.7	72.6	6.5	28.8
6(30)	テストで間違えたところを後で勉強している	65.8	75.8	15.7	36.1
14(52)	国語の勉強は好きだ	67.2	82.3	19.7	25.1
14(55)	読書は好きだ	85.5	88.7	12.2	19.9
14(56)	国語の授業で学習したことは、社会に出たときに役立つ	89.5	91.9	5.8	11.0
14(62)	文章で書く問題で最後まで解答を書こうと努力した	98.7	83.9	5.5	18.7
15(63)	数学の勉強は大切だ	88.1	95.2	10.3	15.9
15(68)	数学で学習したことを生活で活用できないか考える	42.1	50.0	5.3	12.8

資料3 全国学力・学習状況調査生徒質問紙結果 II

(%)

### Ⅲ 学力調査等の成果に寄与したと考えられる取組

#### 1 具体的な研究内容

本校の重点課題を「基礎的・基本的な知識・技能の習得とその活用を図る指導の工夫」（習得と活用）、「生徒の学習に対する興味・関心を高め、学ぶ意欲が向上する指導の工夫」（学ぶ意欲の向上）、「言語活動の充実を図り、コミュニケーション能力を高め思考を深める指導の工夫」（言語活動の充実）の3点として実践研究に取り組んだ。本事例集では主に「習得と活用」と「学ぶ意欲の向上」について記載している。

#### 2 具体的な取組

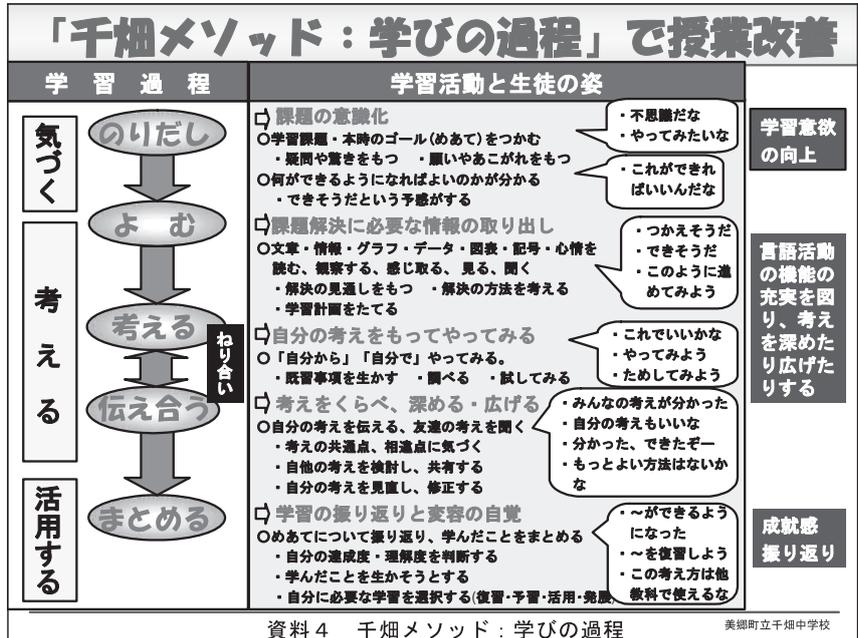
##### (1) 「千畑メソッド：学びの過程」で授業改善

生徒の学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識・技能の定着と、思考力・判断力・表現力等の向上を図ることを重点とした学習過程（資料4参照）を考え、全教科で取り組んだ。

なお、各教科では、各段階で教科の特色を生かした具体的な手立てを明確にし、一覧にまとめることで、効果的に学習が進められるようにした。

##### (2) 授業・自学の時間・家庭学習のリンク

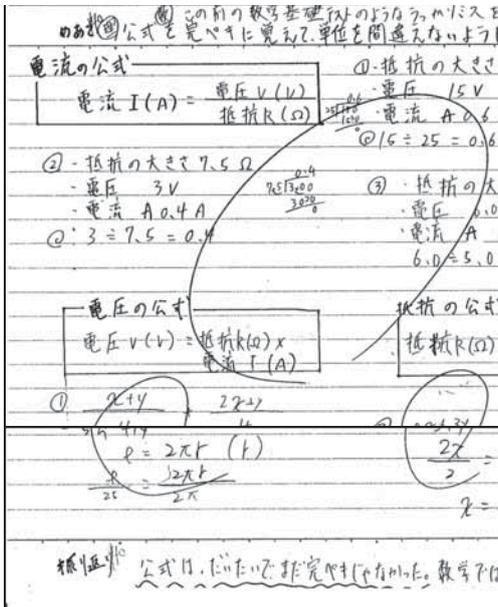
学習習慣の定着を主な目的として平成20年度から自学の時間を、帰りの会前に15分間設定している。



資料4 千畑メソッド：学びの過程

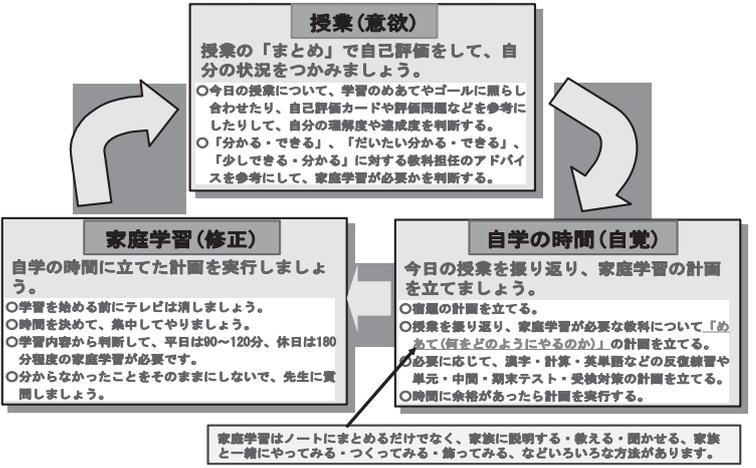
美郷町立千畑中学校

今年度からは、めあてをもった家庭学習の継続や主体的な学習者を育てるという視点から、授業との関わりにおいて予習や復習等の習慣を育て、自発的な学習態度を育てていくことを目指して、授業と自学の時間、家庭学習をリンクさせた取組を行っている。（資料5、6参照）



資料5 「めあて」から「振り返り」までがある生徒の家庭学習ノートの記入例

### 授業・自学の時間・家庭学習をつなげて学力アップ



資料6 授業・自学の時間・家庭学習をつなげて学力アップ

美郷町立千畑中学校

#### 3 成果と検証

##### (1) 検証方法

###### 授業改善

- 教科や授業に対する意識調査（授業改善に関する項目）（資料7）
- 教師アンケート

###### 習得と活用

- 全国学力・学習状況調査
- 県学習状況調査結果
- 校内基礎テスト

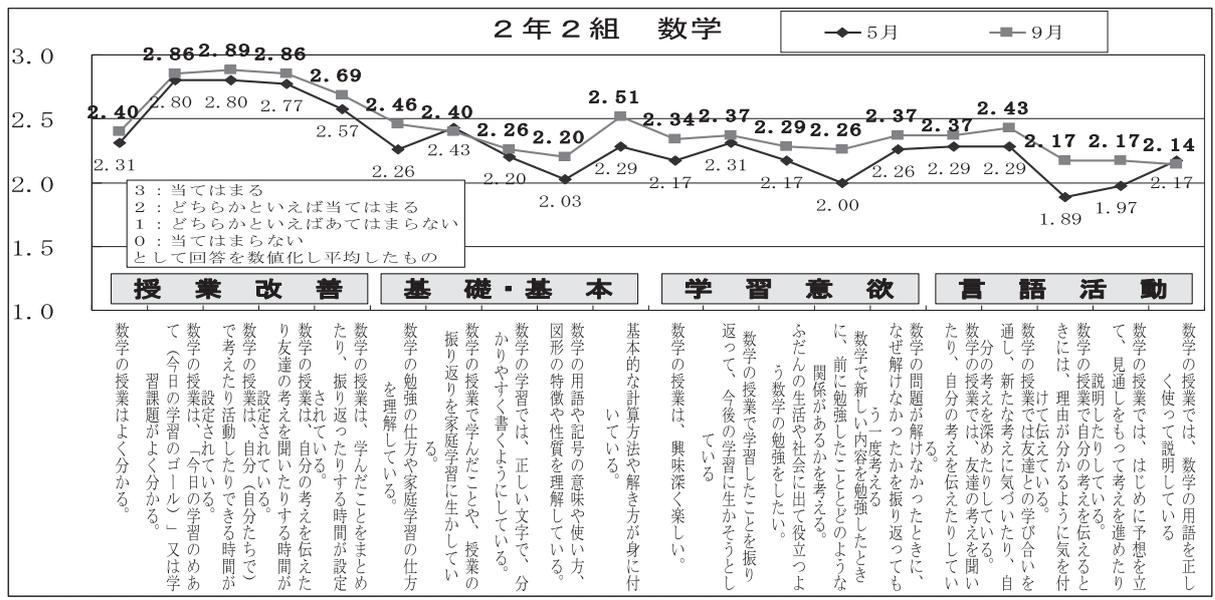
質問事項	当てはまる	当てはまらない
1 先生方の授業の進め方について質問します。		
(1) 理科の授業はよく分かる。	3	2 ... 1 ... 0
(2) 理科の授業は、「今日の学習のめあて(今日の習のゴール)又は課題がよく分かる。	3	2 ... 1 ... 0
(3) 理科の授業は、自分(自分たち)で考えたり活動したりできる時間が設定されている。	3	2 ... 1 ... 0
(4) 理科の授業は、自分の考えを伝えたり友達のを聞いたりする時間が設定されている。	3	2 ... 1 ... 0
(5) 理科の授業は、学んだことをまとめたり、振り返ったりする時間が設定されている。	3	2 ... 1 ... 0
2 あなた自身の授業や家庭学習に対する取り組みについて質問します。		
(1) 理科の勉強の仕方や家庭学習の仕方を理解している。	3	2 ... 1 ... 0
(2) 理科の授業で学んだことや、授業の振り返りを家庭学習に生かしている。	3	2 ... 1 ... 0

資料7 教科や授業に対する意識調査（調査表の一部）

- ・教科や授業に対する意識調査（基礎・基本に関する項目）
- 学ぶ意欲の向上
- ・家庭学習の取組状況
- 教科や授業に対する意識調査（意欲に関する項目）
- 言語活動の充実
- ・「学習スキル」状況調査
- 教科や授業に対する意識調査（言語活動の充実に関する項目）

(2) 成果と課題

- 「Ⅱ 学力調査等に見られる成果」で記載した他に、次のような成果と課題がある。
- 各教科で「学びの過程」を柱とした授業改善が進められ、生徒の基礎・基本、学習意欲、言語活動の各状況において改善が見られる。（資料8参照）
  - 自ら既習事項を生かして課題を解決する力をさらに高めさせる。
  - 友達の見解から自分の考えを練り直したり、互いに高め合ったりする学び合いがもっとできるように工夫する。



資料8 教科や授業に対する意識調査の結果の例

IV 3年間のまとめと今後の取組

1 研究の成果と課題

- 授業を互いに参観する期間（スキルアップウィーク）を設定して授業評価をしたり、付箋を用いた研究協議を行ったり、日頃の実践について研究部報で紹介し合ったりする取組により、教科の枠を超えた全教職員による研究体制が整ってきた。
- 研究の推進に当たり、PDCAサイクルを機能させ、各自が、実践による生徒の変容、成果や課題を明らかにして自己の取組を見直し、具体的な改善策を講じて、それを再度チェックするという取組が定着してきている。
- 小学校と連携して「家庭学習の手引き」や「学習スキル表」の作成等に取り組んだことにより、9年間の系統性を踏まえた、一貫性のある指導ができるようになった。
- 主体的な学習者の育成や学習習慣の形成に向けて、授業改善や家庭・地域との連携にさらに取り組んでいく必要がある。

2 研究成果の普及について

- ・本校の取組を県や自校のホームページに載せ、情報発信する。

3 今後の取組について

- (1) 授業で勝負（「学びの過程」の確立）
  - ・友達の見解から自分の考えを練り直したり互いに深め合ったりする「学び合い」の充実
  - ・学習の振り返りと変容の自覚を促す「まとめ」の工夫
- (2) 家庭の理解と協力（「学習習慣」の確立のために）
  - ・PTA開催の仕方の工夫
  - ・学校公開や授業公開の工夫
  - ・各種広報活動の工夫
- (3) 地域の教育力の活用（地域ぐるみで子どもを育てる体制）
  - ・地域の教育力を学習活動に生かす学校づくり
  - ・生涯学習の場としての学校づくり
  - ・地域の人々との触れ合いの場としての学校づくり

V 研究実践を振り返って

この3年間、秋田大学教員を始め多くの先生方から助言や協力をいただきながら、実践と改善を重ね、教職員が一丸となって研修に取り組んできた。そのことが教師の授業力向上、そして生徒の変容につながったことは私たちにとって大きな喜びである。これまでの研究で得たことを大きな財産として今後の実践に生かすとともに、さらなる改善に取り組んでいきたい。



「全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究」

鹿角市立十和田中学校

北秋田市立米内沢小学校

北秋田市立前田小学校

北秋田市立森吉中学校

能代市立第五小学校

三種町立琴丘小学校

男鹿市立潟西中学校

潟上市立天王小学校

にかほ市立平沢小学校

にかほ市立院内小学校

にかほ市立小出小学校

にかほ市立仁賀保中学校

大仙市立中仙小学校

大仙市立清水小学校

大仙市立中仙中学校

仙北市立西明寺中学校

横手市立浅舞小学校

横手市立平鹿中学校

湯沢市立湯沢北中学校

羽後町立西馬音内小学校

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	3	3	3				2	11	22
生徒数	94	100	106				2	302	
学校のホームページアドレス					http://www.ink.or.jp/~tochu/				

II 研究の重点

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究
- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

- ・自分の意見や考えを積極的に述べることを苦手とする生徒が多く、授業態度が受動的である。
  - ・学年によっては、基礎・基本の定着が不十分な生徒の割合が高く、一斉授業では学習内容の確実な定着が困難な状況である。
  - ・計算や漢字の分野で高い正答率を示すが、「活用する力」を問う問題に課題がある。
  - ・全国学力・学習状況調査のA問題は、国語・数学ともにわずかに本県平均正答率を下回っている。(国語A：本県79.8% 本校79.7% 数学A：本県70.8% 本校69.5%)
  - ・国語B問題では、表現の特徴を捉えて読み取ったり、説明したりする問題の正答率が低い。  
(3)(2)「文学的文章を読む」：全県39.8% 本校35.0%)
  - ・数学B問題では、事柄の特徴を捉え、数学的に説明する問題の正答率が著しく低い。  
(5)(2)「ものの機能を図形的に解釈すること」：全県11.1% 本校2.0%)
- これらの結果から、本校の生徒の課題は「活用する力」を伸ばすことであると判明した。

2 成果

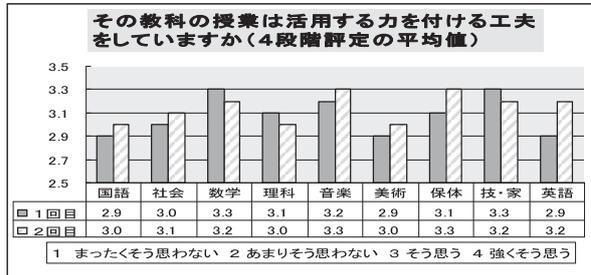
(1) 授業アンケートの結果から

(本校が独自に作成：7月と11月の2回実施)

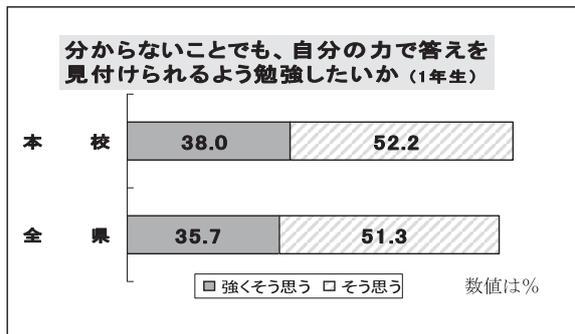
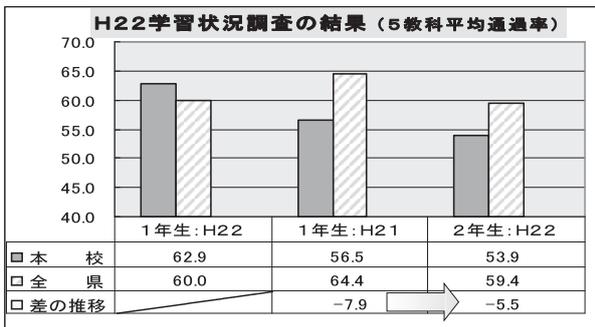
生徒に対して行った「活用する力」に関する質問では、右のグラフのように過半数の教科において数値が上昇し、活用を意識した授業改善が進んでいることがうかがえる。

「活用する力」を付ける工夫を問う質問例 (体育)

○練習方法を工夫したり、作戦を立てたりすることによって、技のレベルをより高めようとしていますか？



(2) 本県学習状況調査 (12月実施) の結果から



① 学力検査から

- ・1年生は5教科の平均通過率が全県平均通過率を上回った。(全県60.0% 本校62.9%)
- ・2年生は4教科で全県平均通過率を下回った。(全県59.4% 本校53.9%)しかし、同学年の昨年度の成績と比較すると、全県との差は少なくなっている。(H21全県比-7.9%, H22全県比-5.5%)

② 意欲調査から

- ・「分からないことでも自分の力で答えを見付けられるよう勉強したいか」という質問では、1年生は「強くそう思う」「そう思う」の合計値が全県を上回っており、情意面でも学んだことを活用しようとする意識が向上している。

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 「活用する力」を付けるための工夫（研究の重点ア）及びイ）に関連）

全国学力・学習状況調査等で明らかになった課題を受け、本校では、特に「読み取る力」「説明する力」を高めることが必要と考え、全教科でこれについて共通理解し、各教科の立場から授業改善に取り組んだ。

##### (1) 「伝え合う」活動による「活用する力」の育成

- ① 全教科でタイムプロットカード（授業の流れを段階的に提示したカード）を使用し、意見交換や表現する時間を意図的に設定するなど、「伝え合う力」の育成に努めた。
- ② 根拠に基づいて考えを説明させる機会を増やし、思考力・判断力・表現力等の育成を図った。
- ③ 実技や作品の提示など、視覚による「伝え合い」も積極的に取り入れた。

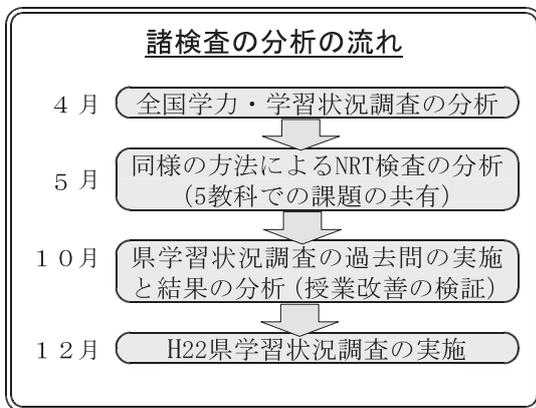


体育：チームミーティング



国語：交流読み

##### (2) 5教科におけるNRT検査と県学習状況調査（過去の問題）の分析



① 全国学力・学習状況調査の分析と同様の方法で、教科のNRT検査について「活用する力」に関する問題をピックアップし分析を行った。その際、誤答傾向や指導改善のポイントをまとめ、日々の授業改善に役立てた。

② 県学習状況調査の過去の問題から、「活用する力」を問う問題を選択し、授業に取り上げることで、普段の授業改善が「活用する力」の育成につながっているかについて確認した。

これらの分析により、全国学力・学習状況調査や各種調査の結果の活用が5教科に拡大された。また、各種調査が密接に関連していることや、「活用する力」が実際にどのような問題として出題されるのかということについて、理解を深めることができた。

##### 2 基礎・基本の確実な定着（研究の重点ウ）に関連）

日々の指導において、「内容」「方法」「レベル」「学び（変容）」の4要素を盛り込んでねらいを作成し、指導と評価の一体化を図った。

〈1年英語：Multi Plus 2 私の一日〉	〈3年数学：関数 $y=ax^2$ 〉
<p>whatやhowの疑問文を含む生活パターンを尋ねる表現を用いて、日課について対話をしたり、3回以上のやり取りのある自然な流れの対話文を書いたりすることができる。</p>	<p>車の速さと制動距離の関係が<math>y=ax^2</math>の関数になることを、表や式、グラフを利用して考察する活動を通して見だし、車の速さと制動距離に関する問題を解決することができる。</p>
<p><b>内 容</b>： whatやhowの疑問文による日課についての対話</p>	<p><b>内 容</b>： 車の速さと制動距離の関係</p>
<p><b>方 法</b>： 生活パターンを尋ねる表現を用いて</p>	<p><b>方 法</b>： 表や式、グラフを利用して</p>
<p><b>レ ベ ル</b>： 3回以上のやり取りのある自然な流れの</p>	<p><b>レ ベ ル</b>： <math>y=ax^2</math>の関係があることを見だし</p>
<p><b>学 び</b>： 対話をしたり対話文を書いたりすることができる</p>	<p><b>学 び</b>： 車の速さと制動距離に関する問題を解決することができる</p>

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 北管内学力向上実践研究発表会で、取組を紹介する。
- (2) 「4要素を盛り込んだねらいの作成」については、鹿角市全体で取り組むよう呼び掛ける。

## 研究主題

主体的な学び合いを通して、豊かな学力を身に付ける子どもの育成  
～算数科の授業改善を通して～

北秋田市立米内沢小学校 校長 佐藤 高義

### I 学校の概要（平成22年5月1日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	2	8	13
児童数	26	17	29	25	36	27	2	162	
学校のホームページアドレス					http://www.kumagera.ne.jp/yoneshou/				

### II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携



### III 自校の課題と取組による成果

#### 1 自校の課題

「ペアやグループで学び合い、考えをまとめる子どもたち」

下の表のように、本校は正答率は良好であるが、「学校の勉強がよく分かる」と回答した子どもの割合が低いということが分かった。このことから、「子どもにとって楽しく、分かる、児童主体の授業の構築」が本校の課題であると考えた。

#### 『学習の意欲等に関するアンケート』

「学校の勉強がよく分かるか」で「つよそう思う」「そう思う」と答えた割合

	5年生	6年生
本校	77.8	85.2
全県	89.3	89.0

本県学習状況調査（H21.12）

#### 『全県・全国と本校との正答率の比較』

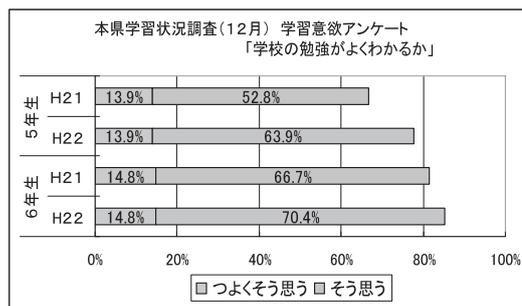
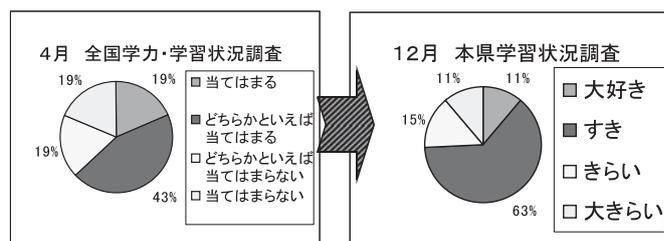
	国語A	国語B	算数A	算数B
本校	90.4	88.1	86.2	58.6
全県	89.3	84.8	83.2	59.0
全国	83.3	77.8	74.2	49.3

全国学力・学習状況調査（H22.4）

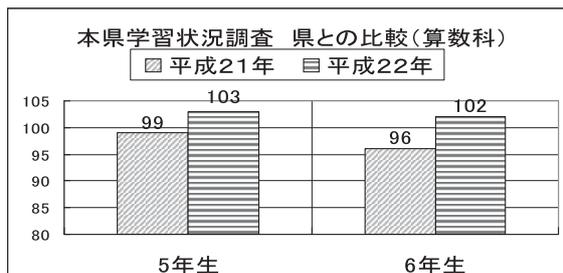
### 2 成果

- (1) 下のグラフのように、4月と12月の比較においても、昨年度との比較においても、算数への意欲が向上している。

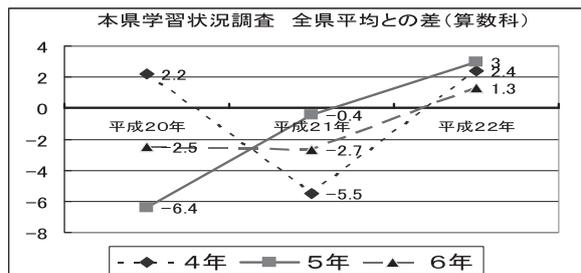
#### 「算数が好きか」4月と12月の比較(6年)



- (2) 算数科の通過率について本県学習状況調査で比較してみると、下のグラフのように年々伸びており、今年度は全県平均を上回る結果となっている。



【県平均を100として、本校の通過率を指数で表示】



#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 分かる授業の探究のために

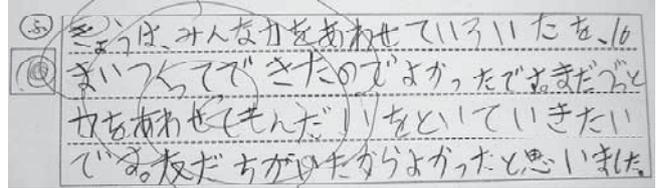
##### (1) 基本となる授業展開例の共通理解（問題解決的学習）【資料1】

- ① 個別思考と集団思考(学び合い)のかね合い…「見問」「見考」「見答」のある授業構築
- ② 授業のねらいの明確化…教師が「教えた(言いたい)こと」は何か、教師のねらいが子どもの発言(言葉)で出る授業(「答え」は子どもたちの中に)

【資料1】

- ① 問題をつかむ
- ② 予想をする
- ③ 課題・めあてを確かめる
- ④ 自力解決する(短時間で)
- ⑤ 比較・検討する
- ⑥ まとめをする
- ⑦ 適応問題を解く
- ⑧ 学習の振り返りをする

【授業の振り返り(2年生)】



##### (2) 学び合いの場の設定・方法の工夫

##### ① 比較・検討の場を設定

- ・自力解決後の教え合い(比較)
- ・ペアや小集団による、自由に立ち歩いている意見の交流(検討)
- ・児童が自由に黒板に出て、説明を補足したり質問したりする活動(比較・検討)

##### ② 「話し合い虎の巻」の活用【資料2】

##### ③ 生徒指導の機能を生かし、人間関係形成能力の育成を意図した授業

- ・自己決定 → 予想, 反応 = 「私は……と思う。」「……と考える。」
- ・自己存在感・効力感・有能感 → 学び合い = 「分かる」「できる」
- ・受容と共感 → 評価, 反応 = 「なるほど」「そうか」

##### (3) ノートへの自己評価(1単位時間に3回)

→自力解決後, まとめ後, ふりかえり後

##### (4) 「まとめ」の工夫(『いいはかせ』の活用)

→文章だけでなく図や表, キーワードでイメージ化を図る【資料3】

##### (5) TTの機能化

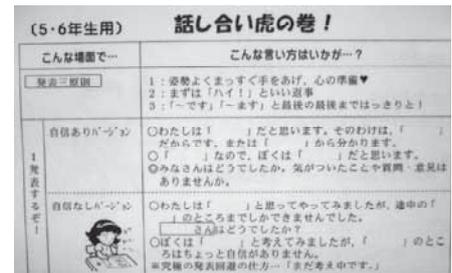
→個の見取り, 指名・指示, 教師の立ち位置, ゆさぶる発問の工夫

##### (6) 校内研究の方策

##### ① 授業研究会の流れの確立【資料4】

- ② 授業を見合う会の実施
- ③ 空き時間の他学級参観
- 職員・児童が参観する場を意図的に設定

【資料2 話し合い虎の巻(一部抜粋)】



【資料3】

- ㉒ 今までに学習したことを使っている
- ㉓ いろんな場面に使える
- ㉔ 早くできる
- ㉕ 簡単にできる
- ㉖ 正確にできる

【資料4】

指導案検討会 → 模擬授業の実施 → 当日〈授業参観記録票による授業評価〉  
→ ワークショップ型の研究〈授業記録を配付して協議〉  
→ 指導案の書き直し・書き換え  
→ 事後研で共通実践事項の確認

##### 2 学びを日常生活に生かすために

家庭学習に意欲的に取り組める手立て

- ① 手引きの配付
- ② ノート見合うデーの実施【資料5】
- ③ 強調週間でのカードを活用した取組
- ④ ノート展

【資料5 ノートを見合う子どもたち】



##### 3 学校間の教職員の連携

小・中相互の情報交換 → 森吉地区での課題の共有と対策

#### V 成果の普及に関する今後の取組

実践集録としてデータファイル化及び印刷物としてまとめ、地区研究会などの機会に紹介するとともに、さらに研究を推進し授業改善を目指す。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	10
児童数	14	10	10	11	12	23	1	81	
学校のホームページアドレス					http://www.kumagera.ne.jp/maeshou/				

II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

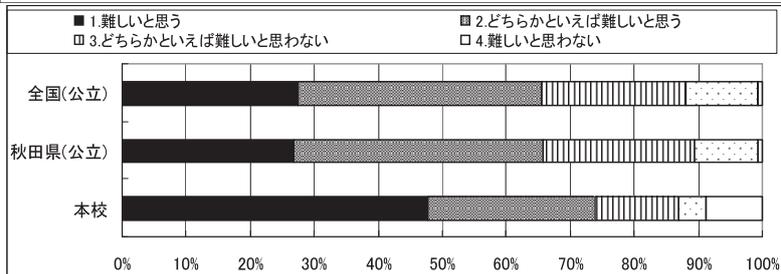
1 自校の課題

H22全国学力・学習状況調査における  
自校の平均正答率の全国及び県平均比較

	国語A	国語B	算数A	算数B
全国比	+5.1	+2.6	+7.3	+3.2
県比	-0.9	-4.4	-1.7	-6.5

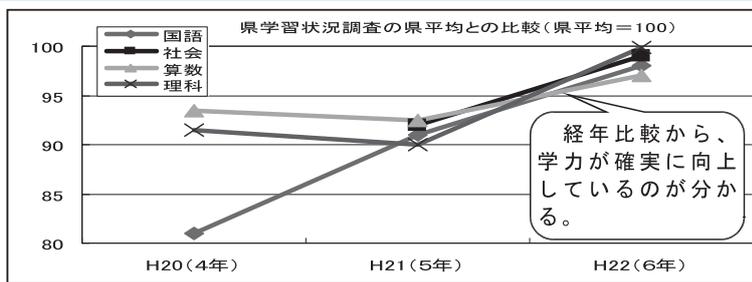
- 国語A・B, 算数A・Bともに, 国の平均より上回っているが, 秋田県平均より下回っている。
- 基礎的・基本的な内容の定着が確実ではない。
  - ・長文を読み取ったり要約したりする問題
  - ・言語事項に関する問題
  - ・基本的な計算
  - ・問題文を読み, 必要な事柄を適切に選び判断する問題
  - ・考えの根拠を基に論理的に説明する問題

(51) 学校の授業などで, 自分の考えを他の人に説明したり, 文に書いたりするのは難しい

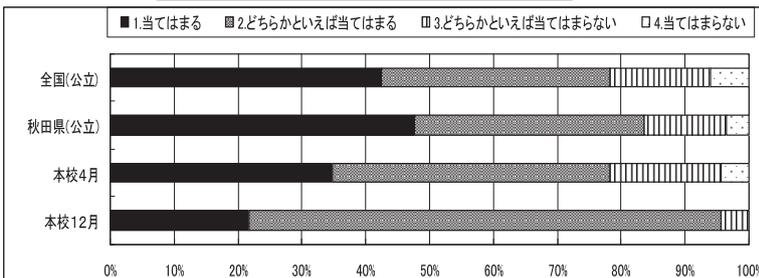


- 課題1…基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図る。
- 課題2…解決のために必要な情報を選択し, 根拠を基に自分の考えを論理的に表現する力を習得させる。
- 課題3…学習への苦手意識を減らし, 学習意欲を高める。

2 成果



(65) 算数の授業の内容はよく分かる



左の折れ線グラフのとおり, 12月に実施した県学習状況調査では, 6年生の各教科とも正答率が向上している。特に, 国語の「資料から分かったことについて自分の考えを入れて制限字数で書く」問題は, 100%の正答率であった。算数では, 「自分の考えの根拠を言葉や式で説明する」問題で, 73.9%の正答率(県を100とすると本校111.1), 未記入は0であった。また, 学習への苦手意識が薄れ, 左の帯グラフのとおり, 質問紙の「学習が分かる」という項目が, 年度当初の4月に比べ約1.2倍に増加し, 学習の楽しさを感じる子どもが増えている。

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 かかり合いの場を位置付けた授業構成の工夫

(1) 自分の考えを生かして、友達とかかり合いながら学びを深める場の意図的な設定

「何のために・どの段階で・どんな場面で・何について・どんな活動で」かかり合うのかを明確にして、授業の中に位置付けるようにした。自分の考えと友達のことを比較し、互いの共通点・類似点・相違点を伝達し合うなどの、自分の「学び」と友達との「学び」とを交流する活動を取り入れた。「自力思考→ペア・グループでの思考→全体思考」と段階を踏むことにより、曖昧だった考えが明確になり、自分の考えをさらに広めたり深めたりすることができた。



グループでの思考の練り上げ(6年)



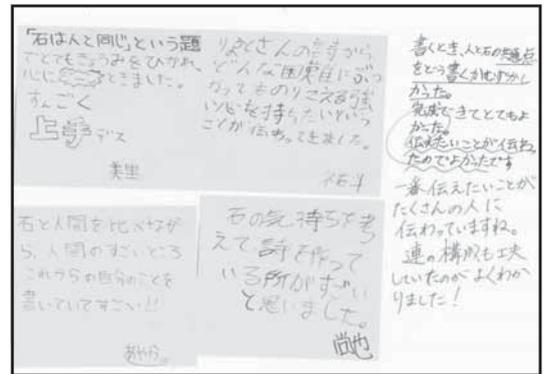
ペープサートを使って役割演技(2年)



ペアでせりふをつけ足して音読(1年)

(2) かけあひあうための言語活動の工夫

ねらいを達成するためには、どんな言語活動を用いてかけあひあわせることが有効なのかを考えて、様々な方法を試みた。「考えること」と「表現すること」は別々ではなく表裏一体で扱うことが大切である。ねらいを達成するために、授業の中に位置付けたかけあひあいの場では、自分の考えを伝えるための記録や説明の工夫、相手の考えを理解しようとする推論や批評、お互いの考えを生かしてさらに高めるための討論などの言語活動がなされ、友達のよさに気づき、意欲的に学習に取り組もうとするようになってきた。



それぞれが作った詩を読み合ったあとの相互批評

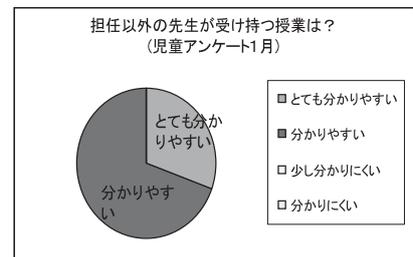
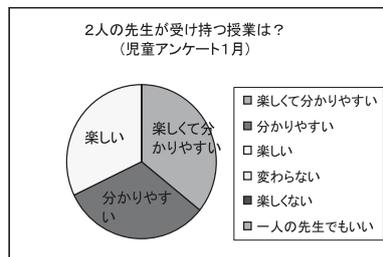
##### 2 TT指導や一部教科担任制の取組

「まなび・ふれあひ充実事業」による小規模校への1名の加配を、有効に活用することができた。6年生は、特に教科担任制を多く取り入れたことにより、それぞれの教科の特徴を生かした専門的な指導が可能になった。多くの教師による多様なかけあひにより、学習にメリハリが生まれ、中学校の学習スタイルへの橋渡しの効果も大きかった。また、中学校での指導経験豊富な校長や講師も指導に当たることで、今学習していることが中学校のどんな学習につながるのかを系統的に意識させ、どんなところが落ち込みやすいのかを見通し、それを踏まえた指導ができたことも成果である。



校長も含めた1C3Tの算数少人数指導

#### まなび・ふれあひアンケート結果から



##### 3 学校間の教職員の連携

同一中学校区の小・中学校(前田小・米内沢小・森吉中)との情報交換と連携研修会を行った。中学校では算数の「割合」の定着が課題となっていることから、小学校で重点的に取り上げて指導し、本県学習状況調査で出題された「割合」の問題の正答率を基に検証した。

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 地区研究会などでの紹介はもちろん、ホームページや学校報などを活用して地域へも紹介する。
- (2) 「学力向上は日々の授業の充実から」をキーワードとして、指導のための具体的な手立てや引き出しを豊富にもつための職員研修を引き続き行う。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	2	2	2					6	13
生徒数	61	52	65					178	
学校のホームページアドレス					http://www.kumagera.ne.jp/morityu/				

II 研究の重点

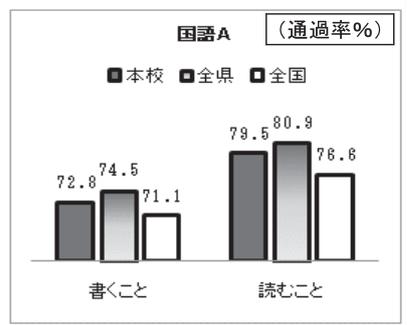
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

H22年度の全国学力・学習状況調査の結果によると、全国平均よりは上回っているものの、県平均との比較により次のような課題が見えてきた。

- ・国語では、「書くこと」「読むこと」、特に、文章から内容を読み取ってその特徴を捉えたり、自分なりの言葉で書いたりすること。
- ・数学では、文字式の意味を読み取ったり、事象について自分なりに考え、説明したりすること。
- ・意欲面では、難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦すること。



2 成果

(1) 教科の課題に関して

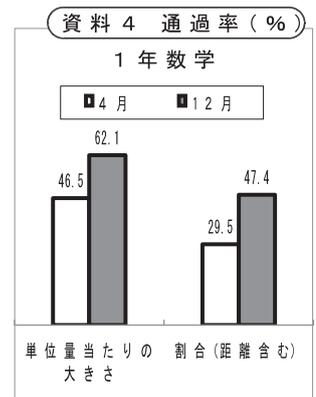
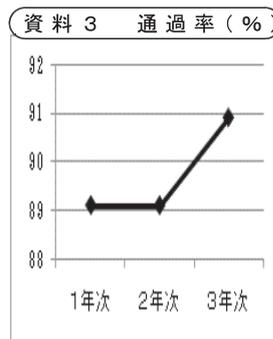
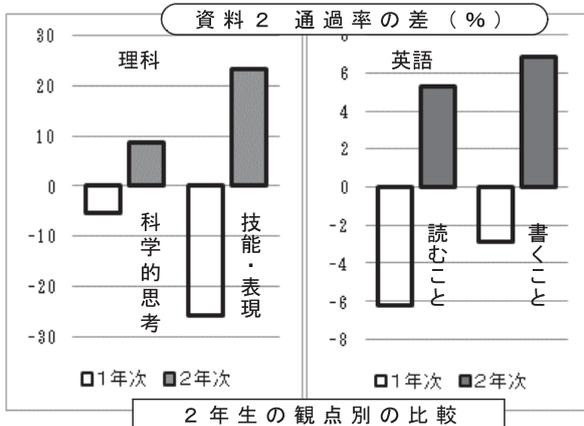
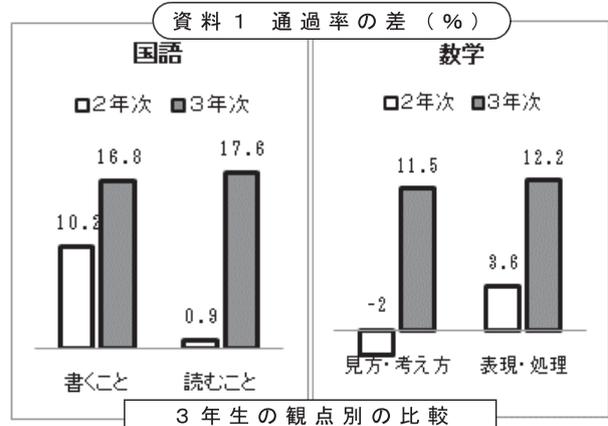
資料1は、今年度の2年生の本県学習状況調査と同様の問題を3年生で実施した際の、本県平均との差を表している。資料2は、2年生について昨年度の本県学習状況調査との比較である。大きく改善していると言える。

(2) 意欲面に関して

本県学習状況調査の質問紙から、「自分の力で解決したいと思う」という項目について、3年生の推移を比較した結果、資料3のように意欲の向上が見られた。

(3) 小・中連携に関して

小・中の共通課題となっている「割合や単位量当たりの大きさ」の問題は、4月に1年生が実施した全国学力テストと、12月の本県学習状況調査の結果との比較から、改善が見られた。(資料4)



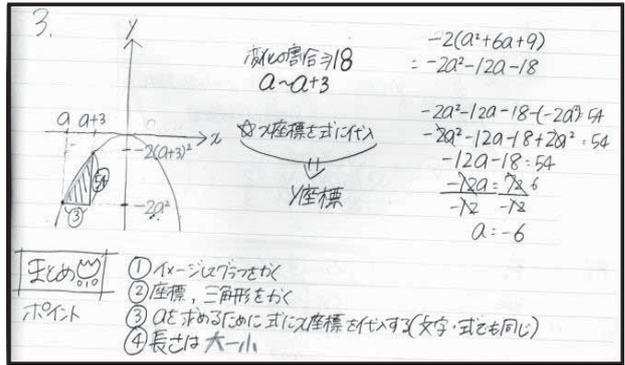
#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 分かる授業の探究

「書くこと」を重視した共通実践

自校の課題解決のために基本となるのは「書く」ことと考えた。書くことが、自分の考えを整理したり、説明したり、表現したりすることにつながると考えたからである。そのため、授業の終末において、ねらいが達成できたかどうかを評価する時間や、課題に対する答えを自分の言葉でまとめる時間を確保し、説明したり書いたりする場面を設けた。(資料5)このことが、基礎・基本の定着や、自分の言葉で表現しようとする意欲につながり成果となって表れた。以下は各教科の実践例である。

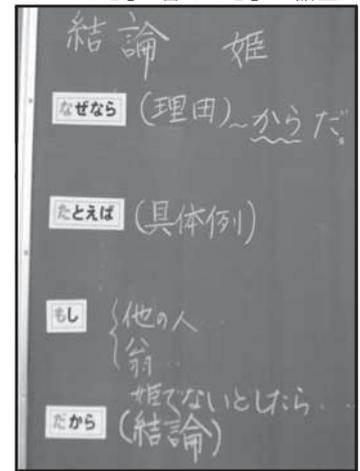
資料5 ノートに書いたまとめと関数のグラフ



##### (1) 国語

課題解決のための話し合い(学び合い)活動を数多く設けた。その中で、「話し合いをするために書く」「読みを確かめるために書く」「まとめるために書く」の三つに力を入れて指導した。この活動が、文章を書くことに対する抵抗感を少なくした。また、書く力を育てることにより話す力が育ち、聞く力も育ってきた。(資料6)意欲面でも、意識調査における「国語が好き」の割合が、4月の75%から12月は92%と向上したことにもつながった。

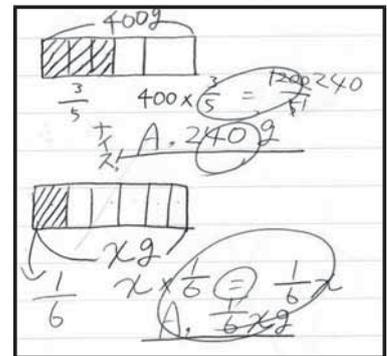
資料6 国語で掲示している「話すとき」「書くとき」の話し



##### (2) 数学

ポイントになる考え方や、解き方、まとめなど、数学の用語を用いて自分の言葉で書いたり話したりすることを続けて行った。問題を理解するために、図をかいて意味を捉えたり、グラフをかいて関数をイメージしながら考えたりすることを大切にしたら結果、証明問題にも式や記号を用いて抵抗感なく取り組めるようになった。(資料5)ペアやグループなどで、自分たちで考え、説明し合う場面を毎時間意図的に設定することで、生徒たちの理解が深まり意欲も高まった。

資料7 割合を考えるための図



##### (3) 英語

リレーノートを用いたり、ディベートを取り入れたりなどして、生徒相互のコミュニケーション活動を多用しながら指導した。その結果、英語を用いて書きたいという意欲が高まった。

##### (4) 理科

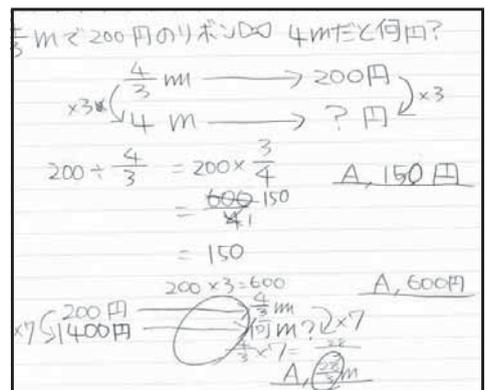
課題の予想や考察の場面で、自分の考えを書く指導に力を入れた。また、その考えを相手に伝える場を設定することで、学習意欲の喚起につながった。

##### 2 小・中学校の教職員の連携

小・中の情報交換

森吉地区の研究主任会において、算数・数学においては、割合や単位量当たりの大きさの正答率が低いことの確認をした。それを受けて、指導法について協議し、図を用いて意味を理解しながらかいて考えることや、矢印で対応をはっきりかくことに重点を置き指導した。(資料7, 8)

資料8 当初は不正解だったが、矢印の利用で修正できたときのノート



#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 今年度の成果と課題を印刷物にまとめて配付し、来年度の研究につなげる。
- (2) ホームページに自校の取組を掲載・紹介することで、さらに研究を深める。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	2	1	1	8	12
児童数	29	34	39	27	43	33	1	206	
学校のホームページアドレス					http://www.shirakami.or.jp/goshou01/				

II 研究の重点

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究
- イ) 児童生徒相互の学びの探究

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

◎ 全国学力・学習状況調査の結果を受けた自校の課題

算数Bの記述式問題の正答率(表1)

H20	H21	H22
39.5%	44.1%	52.7%

本校は表1のように、算数Bの記述式に関する問題を解く力について課題があり、これまでの取組により向上はしているが、まだ十分ではない。

つまり、「言葉や数、式、図、グラフなどを用いて、事実・方法・理由を説明する力」が弱いことが本校児童の課題である。また、自分の考えを数学的に分かりやすくまとめたり、伝えたりすることが苦手である。

H22質問紙(73)の結果(表2)

本校	全県
69.7%	77.9%

児童質問紙調査(73)の「言葉や式を使ってわけや求め方を書く問題をどのように解答したか」においても、「書く問題を最後まで解答を書こうと努力した」児童の割合が、全県よりも8.2ポイント低かった。この結果から、粘り強く最後まで問題を解こうとする意欲が低いことがうかがえる。

2 成果

◎ 今年度の取組の成果

- (1) 算数Bの記述式問題を解く力の向上(6年生実施)

表3のように、1月に実施した算数B問題の記述式類題の正答率が、8割を上回り、4月より31.5ポイント上がった。自分の考えを数学的に分かりやすく説明する力やノートに要点を押さえて考えをかく力が付いてきている。

算数Bの記述式問題の正答率(表3)

4月	→	1月
52.7%		84.2%

- (2) 問題文や図表を正しく読み取り筋道を立てて立式する力の向上

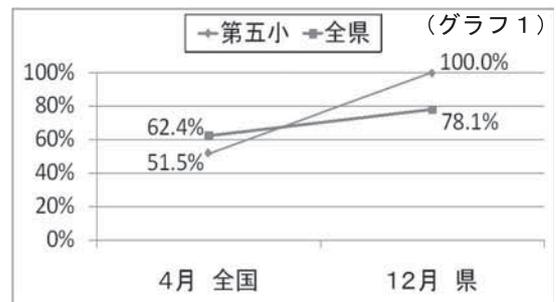
※商が1より小さくなる等分除(整数)÷(整数)の場面で除法が用いられることを理解しているかどうかを確かめる問題

【全国学力・学習状況調査 算数A②(1)】

8mの重さが4kgの棒の1mの重さを求める問題

【本県学習状況調査 算数⑤】

12mの重さが6kgのパイプの1mの重さを求める問題

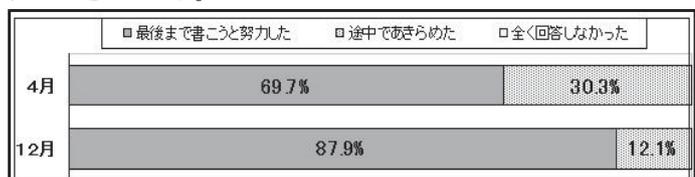


グラフ1のように12月の本県学習状況調査での類題比較で、正答率が4月より48.5

ポイント上がった。立式するための根拠を数直線図や関係図を活用して考え、数量の関係を考えて演算を決定することが身に付いてきている。

- (3) 問題を解く意欲の向上

児童質問紙においても、グラフ2のように、学習状況調査や算数の授業での記述式問題を「最後まで解こうと努力した」児童の割合が、4月に比べて高くなった。



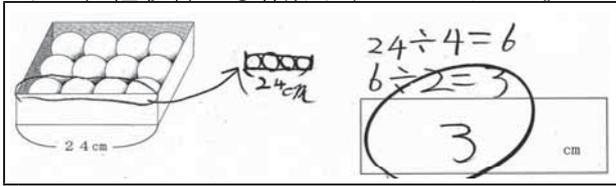
(グラフ2)

IV 成果に寄与したと考えられる取組

全国学力・学習状況調査問題の分析により、児童に図1のような7つの力を身に付けさせたいと考え、取組を進めてきた。その中から三つの力について紹介する。

1 「情報を選択する力」を育てるために

問題文や図の中に、分かっていることや気付いたこと（式や図等）を書き込むことで、必要な情報を取り出して問題を解く習慣を付けることができた。これは、他教科にも有効な手立てであった。



▲H22本県学習状況調査 4年算数の問題から

- 思考力、表現力を育てる7つの力
- ①問題をイメージする力
  - ②情報を選択する力
  - ③見通し、判断する力
  - ④正確に答える力
  - ⑤考えを数学的に説明する力
  - ⑥かかわり、なかまとつながる力
  - ⑦結果を振り返って考える力

▲児童に付けたい7つの力（図1）

2 「考えを数学的に説明する力」を育てるために

(1) 表現の系統化

表現する方法を身に付けさせるために、各学年で育てたい表現方法を明確にし、共通理解を図った。表現する児童が、学年や担任する教師が変わっても混乱することがないように、表4のように系統性をもって指導に当たった。また、方法別のプレートを各教室に準備して、数学的に説明するための方法として意識付けを図った。



▲方法別のプレート（各教室に設置）

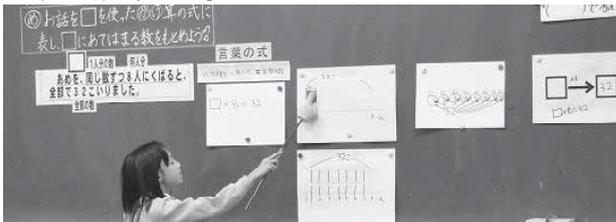
▼各学年で育てたい数学的な表現方法（表4）

数学的な表現	1年	2年	3年	4年	5年	6年
絵・ブロック図	◎	○	○			
テープ図		◎	◎			
線分図		○	◎	◎	○	○
数直線	○	○	○	◎	◎	◎
関係図			◎	◎	◎	◎
リットルます図		○	◎	◎	○	○
面積図					◎	◎
数直線図			○	◎	◎	◎
表	○	○	◎	◎	○	○
グラフ	○	◎	◎	◎	◎	◎

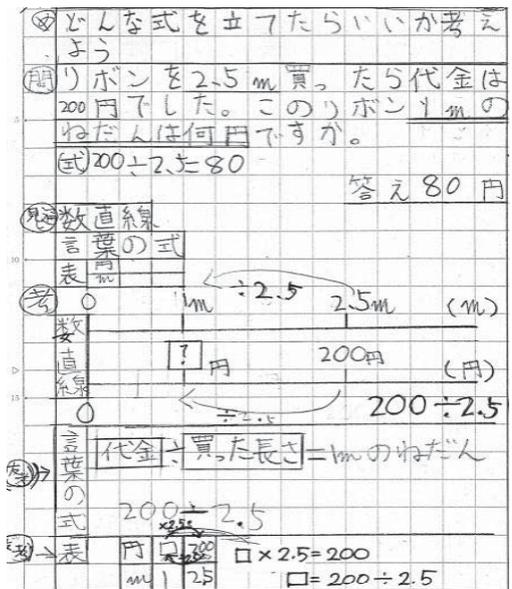
(◎は取り立ててかき方を指導する学年)

(2) 根拠をもって考えるための表現活動の継続

下の写真や図2のように、図や式、言葉を絡めながら表現する活動を積み重ねてきた。図で表現した児童には、式や言葉で説明するとどうなるかを考えさせ、式で表現した児童には、図とつなげて考えるように指導した。



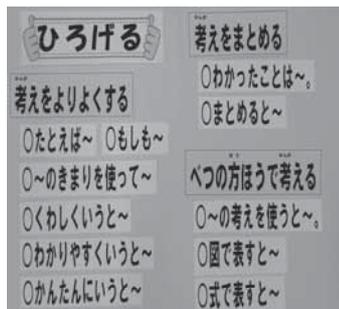
▲3年「□を使った式に表そう」テープ図で説明



▲5年「小数のわり算」児童のノート（図2）

3 「かかわり、なかまとつながる力」を育てるために

- (1) 1時間の授業の中に、ペア・グループ・一斉・一人学習を効果的に取り入れ、伝え合い、学び合う活動を展開した。
- (2) 児童が、学び合いの場で獲得してきた表現を掲示し、いつでも使えるようにした。（算数の言葉カード）
- (3) 友達の考えを読み取り説明する活動を取り入れ、みんなで解決していく姿勢を大切にしたい。



▼1年ペア学習の様子



▲算数の言葉カード

V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 北管内学力向上実践研究発表会で紹介する。
- (2) 実践記録をまとめて、地区研究会などの機会に紹介する。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	2	2	1	9	17
児童数	31	31	38	33	41	44	3	221	
学校のホームページアドレス						http://www.geocities.jp/kadosho01/			

II 研究の重点

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究
- ウ) 分かる授業の探究

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

- ・活用問題に課題があり、特に「既習事項を活用して考えたり、文章に即して読み取り目的や意図に応じて自分の考えを表現したりする力が十分ではない」(資料1・2)
- ・正答分布グラフの形状が国や県と重なるものの、やや二極化している傾向が見られる。学習意欲は高いが、学習定着の面で個人差が大きい。

	国語A	国語B	算数A	算数B
■ 全県	89.3	84.8	83.2	59
■ 本校	91	78	83.3	63.4

【資料1 全国学力・学習状況調査の結果】

【国語B】 (本県平均正答率) 理由を明確にして考えを書く 65.9% (90.3%)

【算数B】

割合	65.9% (76.1%)
かっこの意味	50.0% (55.0%)
図形の説明	52.3% (53.6%)

【資料2 正答率の低かった主な問題】

2 成果

- (1) 12月の県学習状況調査の結果では、国語、算数ともに全県平均を上回った。特に、算数は大きく上回っている。(資料3)
- (2) 全国的に課題が見られた問題についても、資料4のように通過率が高くなり、児童一人一人に力が付いてきていると言える。
- (3) ノートに書いて、自分の考えを整理したり、まとめたりして表現することが定着してきている。(資料5・6)

	本校	全県
国語	71.8%	67.2%
算数	87.7%	73.9%

【資料3 秋田県学習状況調査の結果】

	設問の内容	全国調査	県学習状況調査
国語	・理由を明確にして考える	65.9%	88.6%(6年) 88.0%(6年) 93.0%(5年)
	・割合	65.9%	68.2%
算数	・かっこの説明	50.0%	97.6%(5年)
	・図形の説明	52.3%	95.5%
	・円周と長方形	61.4%	100%
	・分数	52.3%	100%

【資料4 全国的に課題が見られた問題】



【資料5 算数ノート(6年)】

・ノートに自分の考えを書き、発表に生かしたり整理してまとめたりすることが定着してきている。

・授業での学びが家庭学習で活用され、読みの力を伸ばしている。

・新聞等読み物にも広がりが見られ、自分の考えをもてるようになってきている。



【資料6 家庭学習ノート】

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 児童の自主性に基づく学習の探究

(1) 表現や構成に着目した読み方や目的、意図に応じて考えを表現する力を身に付けさせるため、「読みの10の観点」を使った読みや比べ読みを取り入れた単元構成を工夫した。「10の観点」で目の付けどころを養うことで、家庭学習でも一人読みに挑戦できるようにした。

【3年】	【5年】
<b>読んで考えたことを発表しよう</b> 「海をかつとばせ」(光村図書3年・23年度版) 「消しゴムころりん」「つりばしわたれ」	<b>筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう</b> 「生き物は円柱形」(光村図書5年・23年度版) 「むささびの秘密」「あめんぼは忍者か」(学校図書4年)
単元構成の流れ (8時間扱い)	単元構成の流れ (10時間扱い)
① 10の観点で読む。 <b>【物語文の10の観点】</b> ~抜粋~ ・いつ?・どこで?・どんな人物・ものが? ・どんなことが起こったか? ・一番大きく変わったことは? ・一文で書くとどんなお話? ・気に入った言葉や文は? ②話の続きが「あるかないか」考える。 ③提示した三つの物語で共通する物語の展開について話し合う。 10の観点から物語全体を読んで考えることで、段落ごとに読む単元構成でなくても、大事なことに目を向けて読み取ることができた。さらに、日常の読書活動への広がりも見られた。	①三つの教材を10の観点で読む。 <b>【説明文の10の観点】</b> ~抜粋~ ・形式段落はいくつ? ・中心となる文を選んで一文で短く書こう。(主語を文末に倒置して体言止めにする) ・問題を出している段落はどこ? ・文章構成図を作ろう。 ・筆者の考えから、自分が思い出したことは? ②構成に着目して、三つの教材を読み比べる。 ③説明文の構成を生かして、目的や条件に応じて自分の考えを表現する。 「読みの観点があると説明文を読むときにどう読めばよいか分かりやすい」「筆者の主張を伝えるための段落構成が分かり、自分で書くときにも使えそうだ」など、子どもも有用性をとらえている。

(2) 朝の読書タイムで、琴小版ブックトークを使って意図的な読書指導を行う。



話の続きや好きな部分等について出し合い、読み取りを基にした熟考・評価がされている。

1年「不思議なキャンディーやさん」  
T: このお話知ってるかな?  
C: あのね、たぶんね……

6年「泣いた赤おに」  
T: この終わり方でいいかな?  
C: このまま終わるのは……  
私なら自己嫌悪になっちゃうな

**琴小版ブックトークの手引**  
~抜粋~ ※ブッククラブ的ブックトーク

- ・どこがおもしろかった?
- ・どの登場人物が好き?
- ・どんな問題がおきた?
- ・この物語の終わり方に賛成? 反対?
- ・ほかにもっといい終わり方はある?
- ・あなたがこの物語と同じ体験をしたらどう解決する?

「子どもの生活や他教科と関わりのある本を選ぶなど本を探す意識が高まった」「子どもたち自身でブックトークを始めた」など、教師の意識にも変化があった。

##### 2 分かる授業の探究

(1) 既習事項を根拠にして説明したり話し合ったりする場を意図的に設定した。



言葉による交流で考えが確かになった

C: その式じゃ意味が違うよ!!  
C: 三角形の3つの角の和は180°を使ってね。  
C: 前に勉強したことを使うと簡単。

5年 四角形の内角の和を求める

(2) 理解や習熟に応じたきめ細かな指導の充実のため、全校で計画的に取り組んだ。

- ① 全校の学力・学習状況を把握する  
 全校力試しの実施→課題の把握→授業改善→第2回補充授業→全校力試し→県学習状況調査→指導の効果の検証
- ② T T打合せノートの活用  
 T1がノートに書いた板書計画をコピーしてT2も活用することで、短時間で共通理解を図れるようになり指導の効果が上がった。

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 秋田県教育研究発表会や北管内学力向上実践研究発表会等で紹介したり、研究集録を作成して三種町内の小・中学校に配付したりして、さらに研究を推進する。
- (2) これまで同じ研究をしてきた学校と今後も情報交換を続け、実践の共有を図る。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	2	/	/	/	/	4	11
生徒数	30	38	48	/	/	/	/	116	
学校のホームページアドレス					http://www5.ocn.ne.jp/~wakami/				

II 研究の重点

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究
- ウ) 分かる授業の探究

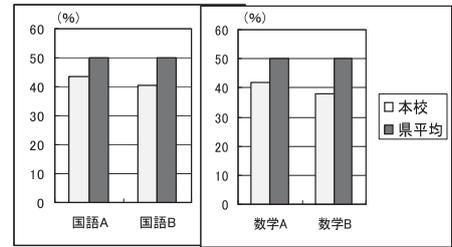
III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

全国学力・学習状況調査等の結果から見いだされた課題

- 国語・語彙や言葉の知識が不足しているため、文章の内容や設問の意味するところを正確に把握できない。
- 数学・題意を読み取り数学的に表現することができない。
- ・既習事項が身に付いていないために、既習の知識を問題に適用することができない。

全国調査や諸調査から

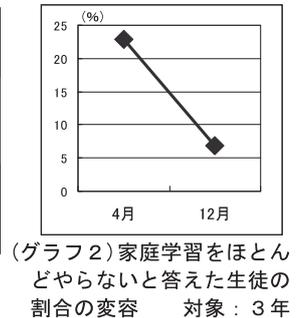
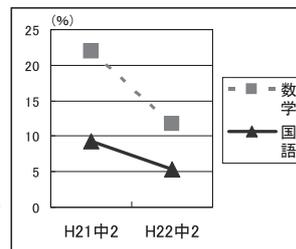


- ・学習課題に対して最後まで粘り強く取り組むことを避ける傾向がある。 --[課題追究意欲]
- ・既習事項が身に付いていない。 --[基礎・基本の定着]
- ・文章や題意を読み取る力が不足している。 --[読んで理解する力]
- ・考えをまとめて書いたり、根拠を基に話したりする力が身に付いていない。 --[自分の考えをもち、表現する力]

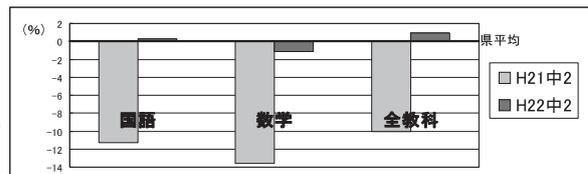
2 成果

(1) 学習課題に粘り強く取り組むとともに、自分の考えをもち、表現しようとする意欲の向上が見られるようになってきた。

- ① 昨年度に比べて無答率が低くなっている。(グラフ1)
- ② 家庭学習が習慣化されつつある。(グラフ2)



(2) 基礎的・基本的事項の定着により、諸調査における通過率の向上が見られた。(グラフ3)



(グラフ3) 県平均との差 H22年度県学習状況調査  
国11.6↓ 数12.5↓ 全10.9↓

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 全教科の授業における共通実践事項①～④の具体化と実施

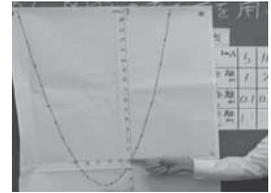
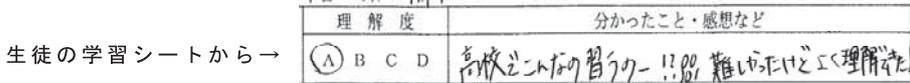
共通実践事項	① 課題追究意欲を高めるための手立ての工夫(課題提示の工夫等)
	② 読んで理解する力を高めるための手立ての工夫(情報を読み取るための手順や方法の指導等)
	③ 自分の考えをもち、表現する力を高めるための手立ての工夫(発問の工夫、学習形態の工夫)
	④ 基礎・基本の定着を図るための手立ての工夫(個に応じた指導の工夫等)

##### 第3学年数学科における実践

○単元名：関数 $y=ax^2$  ○本時：いろいろな関数 自転車の停止距離  
 ○実践のねらい：2つの数量の関係を、式、表、グラフを使って考えることができる。

##### ① 課題追究意欲を高めるための手立ての工夫

身近で場面を想起しやすい題材として、自転車の停止距離を教材化した。これまで学習してきた関数以外にも様々な関数があることに気付かせることで、上級学校での学習への興味・関心を高めることにつなげた。



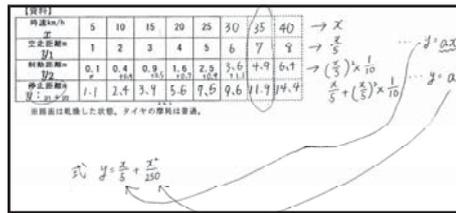
↑時間と制動距離の関係を表したグラフ

##### ② 読んで理解する力を高めるための手立ての工夫

読み取るための具体的な手立て(アンダーライン、囲み等の活用)を確認した。また、必要な情報を取捨選択して、図式化するなどして題意を整理する場を設定した。

##### ③ 自分の考えをもち、表現する力を高めるための手立ての工夫

自分の考えをもつ時間を保証し、その後でグループや学級で自分の考えを伝え合う場面を設定した。また、表の中に表れる関係がグラフではどこに表れるかを問うなどして、式・表・グラフを関連付けて関数関係を捉えることができるようにした。



↑生徒の学習シートから



↑グラフを用いて説明

##### ④ 基礎・基本の定着を図るための手立ての工夫

学習後には練習問題に取り組み、本時の学習内容の定着を図るとともに、既習事項(数値と式の意味を理解し、代入して2次方程式を解くこと)の定着を確認した。

##### 2 月例職員研修会での情報の交換と共有化

月1回の職員研修会で、各教科において工夫した手立てを紹介し合い、効果的な取り組みについて共有化を図った。課題解決のための教科横断的な指導の手立てを見いだすとともに、ショートスパンによる検証改善サイクルを機能させながら授業改善を進めるために効果的であった。

各教科における効果的だった手立て一覧→  
 (職員研修会のために毎月作成した資料)

教科	課題追究意欲を高めるために	読んで理解する力を高めるために	表現する力を高めるために	基礎・基本を定着させるために
国語	○2年 漢文の読み方 中国語を日本語の読み方にする工夫を自分たちで見つける活動を行った。(読り点) ○3年 古典 おくの粗道 パワーポイントを使って興味・関心を喚起した。	○3年古典 自由に選び取って書く授業を行った。 ○1年 表現文の問いに対する答の部分を図で表し、その問をもとに質問をまとめた。	○1～3年 範囲のしつかりした読見文や区論文を書く授業を行った。 ○3年 異なる意見を比較し、どちらかの立場で、テクノロジーについて作文を書かせた。	○授業の進度に合わせて、漢字小テストの実施。 ○小説テストの実施 (※4回実施(8課～5課)) ○古典、短歌、俳句で暗唱し、リズムを覚えさせた。
社会	○実習資料の紹介と「トピックス」の紹介を行った。 主に導入部分において ・「どうぶつ」は何歳?(1年) ～日本の地域区分～ ・富岡の「炭素」と「福」(2年) ・コンビニの見取り図と経済(3年) ・ピエールの優勝と経済(3年)	○まとまった文章を鑑賞し、要旨を読み取る活動を行った。 ・三撰抄(1年) ～3日目が計画されていた元寇～ ・「秋田と成吉思汗」(2年) ・「新撰集」(2年) ・「ペリーと開港」(2年) ・「平等輪と秋田の煎茶」(3年)	○副読本教材使用後に感想を書かせ、発表させた。 ・ベン・ハー・ローマ帝国(1年) ・ガンジー・インドの独立(2年) ・野史抄：社会権・労働問題(3年)	○プログラムシートにミニマムステップを盛り込んだ(1～3年) ○単元テストの実施とその解説(1～3年) ○副読本課題の提示とその点検(3年) ○副読本名テストの実施(1年)
数学	○自作の事象の教材化した。～自転車での移動(2年)、制動距離(3年) ○数表の紹介した。	○授業のはじめに基本的な文章題を出し、問題文の読み方の確認をした。 ○方程式の利用の授業で問題文の読み方を確認した。(1,2年)	○学習シートに、学習のまとめの欄を設け、自分の言葉でまとめさせ、よいまとめ方は全体に紹介した。(2年)	○単元の学習内容に関わる副読本課題(5・マスを)授業のはじめに行った。
理科	○日常生活の事例を取り上げたり、事象をイメージさせたりして導入を図った。(全学年) ○「水の入ったやかんを加熱すると、蒸気が出る」【全学年】 「氷が溶けると、周囲の温度が下がる」【全学年】	○文章題の読み方を全体で確認した。(全学年) ・数値と表式の整理、答え方の指示の確認を実施 ○「水の入ったやかんを加熱すると、蒸気が出る」【全学年】 「氷が溶けると、周囲の温度が下がる」【全学年】	○全学年及び全学年の実験結果を比較し、結果が異なる理由を説明する場面を設けた。(全学年) ○考察を自分の言葉でまとめ、班や	○学習シートに、その学習の学習内容に関連した既習事項の復習欄を設け、確認した。(全学年) ○選1科のTを学習し、定着と応

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 男鹿市校長会研修部の各教科部会において成果を普及する。
- (2) 潟西中学校区小・中連携協議会で成果を確認し、今後の連携の在り方について協議する。
- (3) 本校のホームページに取組の概要を掲載し普及を図る。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	3	2	3	2	3	3	2	18	26
児童数	85	71	82	73	83	81	5	480	
学校のホームページアドレス					http://shisetu.city.katagami.akita.jp/school/tennou-es/				

II 研究の重点

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究
- ウ) 分かる授業の探究

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

(1) 自分で読み取り条件に即して考える力

問題の文章やグラフ・表，図形などを読み取り，与えられた条件を基に筋道立てて考え，数学的に表現することが苦手である。

(H22全国学力・学習状況調査・算数B問題から)

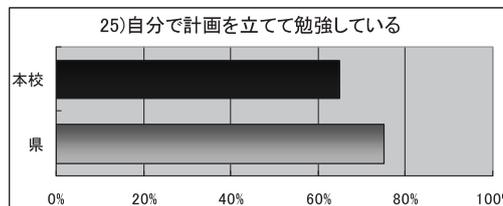
<算数B問題で50%に達しなかった問題>

- 2- (1) 図形を読み取る。
- 3- (3) グラフと表を読み取る。
- 5- (2) 文章を読み取る。

(2) 子どもが自主的に取り組む家庭学習習慣の形成

ほとんどの子どもが1時間程度，家庭学習に取り組んでいるが，宿題や復習を計画的に行う学習習慣は形成されていない。

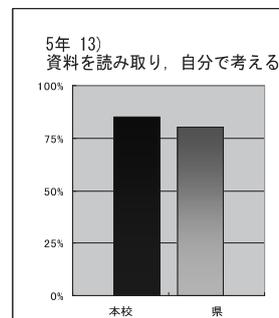
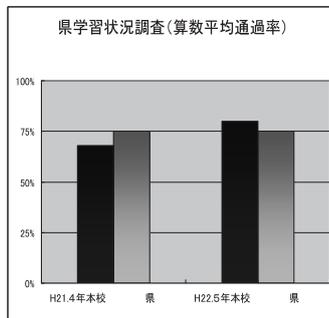
(H22全国学力・学習状況調査・児童質問紙から)



2 成果

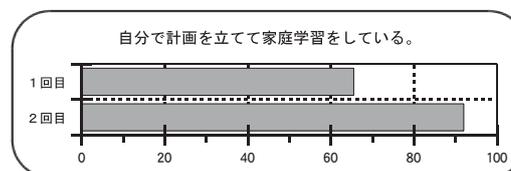
(1) 「考えるのがすき」

考えて表現する活用問題に意欲的に取り組み，数学的なよさを生かして問題解決する力が育ってきた。特に，文字テキストなどの資料を読み取って考え判断する問題（県学習状況調査等）で正答率が上がってきた。



(2) 「自分のためになる勉強をする」

発達段階に応じた具体的な目標に沿い自主学習ができるようになってきた。自分に必要な学習を考えて，内容を工夫する子どもが増えてきた。



#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 読み取る力を育てる活用問題の教材化と授業づくり

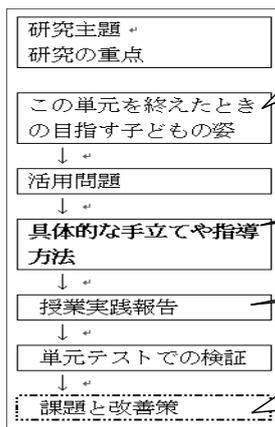
###### (1) つまづきの要因を明確にした単元づくり

問題文の中につまづきの要因（数値，文の数，題意の理解等）が複数含まれていても，問題解決できる子どもに育てていくことをねらい単元計画を立てるとともに，問題文を読み取るための手立てを意識して授業を構成した。

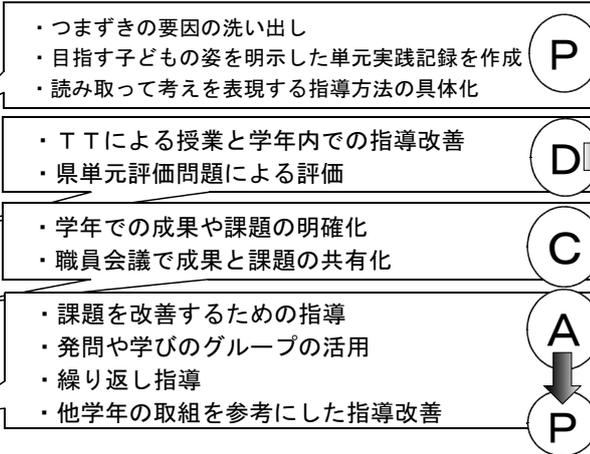
###### (2) 単元実践記録の作成による指導方法の検証と全学年での成果と課題の共有化

学年の全クラスで実践した後に実践報告としてA4版1枚にまとめ，毎月の職員会議で全学年の成果と課題を共有化することで，他学年の成果と課題及び改善策を自学年の指導に生かした。

###### <単元実践記録の内容>



###### <指導改善のPDCA>



###### <具体的な手立て>

- 読み取る力を高めるために  
こんな手立てを  
加えてみよう
- ◇条件へのマーキング
  - ◇問題文の図化
  - ◇式の違いを言葉で説明
  - ◇単位を付けて立式
  - ◇友達の考え方を説明
  - ◇式から考えを読み取る
  - ◇次のような問題も扱う
    - 不必要な情報のある問題
    - 答えが1つ以上の問題
    - 誤答について考える問題

###### <他学年の取組を生かした指導例>

5年生の「図形の面積」の学習で補助線が引けないという課題があったので，色板を日常的に活用するようにした。  
(2年部)

4年生の「四角形」の活用問題を参考に，正しくない方法で描いた正三角形をどうすれば正しい図になるかを考えさせた。  
(3年部)

数量関係の領域の課題に「感覚的に理解できない」という課題が複数学年あったので，算数セットを活用した操作活動を今まで以上に取り入れた。  
(1年部)

##### 2 主体的な学びを支える家庭学習習慣の確立に向けた指導の手立て

(1) 子どもと保護者へのアンケート結果から明らかになった成長や課題，学年段階に応じた家庭学習の取組例を通信等で紹介した。

(2) 保護者が子どもと一緒に家庭学習を振り返る際の基となるように，チェック表「ファイナルチェック」を作成・配布し全学年で取り組んだ。また，参考となるような「おすすめノート」を校内展示で紹介した。



#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 自校のホームページで取組の成果や課題を発信する。
- (2) 本校児童の主な進学先である中学校と今年度明らかとなった効果的に指導の手立てについて共有化し，算数・数学科の学習指導における中1ギャップの解決に努める。
- (3) 潟上市の研修会等で本校の取組や成果・課題を知らせる。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	3	2	2	2	2	2	2	15	21
児童数	73	61	62	65	69	62	4	396	
学校のホームページアドレス					http://www.edu.city.nikaho.akita.jp/hirasawa-e/				

II 研究の重点

- ウ) 分かる授業の探究
- オ) 地域社会との連携

III 自校の課題と取組による成果

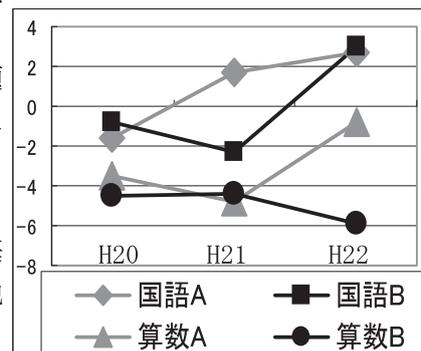
1 自校の課題

自校は右のグラフのとおり、過去3年間の正答率が県平均を下回っていることが多く、大事な言葉に着目して文章を読み取ったり表現したりする力（読解力）に課題が見られる。

また、B問題の結果より、学んだことを生かして応用問題を解く力（活用する力）が弱い傾向にある。しかし、国語に関しては伸びてきている。

質問紙によると、自己有用感に関しては向上してきているが、読書や学習に関する意欲が低い傾向にある。また、家庭生活（地域との関わり、家族と食事、持ち物を確かめる、地域の行事に参加）に関しての意識も低い傾向にある。

全国学力・学習状況調査  
県の正答率との経年比較



2 成果

子どもの学習への興味・関心が高まった。また、読書への興味も高まってきた。

授業の中では、自力解決や伝え合う活動において、考えをもち進んで書いたり発表したり、友達の考えを参考にしたりする児童が増え、課題解決に主体的に取り組む姿が見られるようになった。

県学習状況調査の読み取りに関する問題（国語）を小問別に分析すると、「感想や意見もちながら読み、考えをまとめる」、「段落相互の関係や内容を的確に捉えて読む」、

「優れた叙述を味わって読む」などの読解力の向上が見えてきた。更に、キーワードに着目して書き込みをしながら読み取っていくといった、教科書の題材の読み取りで付けた力を他の文章の読み取りにも生かそうとする姿が見られるようになった。

平成22年度全国学力・学習状況調査と県学習状況調査から

質問項目	4月(%)	12月(%)
国語の勉強は好き	70.4	93.5
算数の勉強は好き	70.5	88.7
読書は好き	75.4	91.9

平沢小学習アンケートから〈1年～6年〉

質問事項	7月(%)	12月(%)
自分の考えをもつことができる	92.8	95.9
進んで発表している	77.1	77.7
友達の考えを参考にする	92.3	96.7

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 読解力の向上を目指して

(1) 自分の考えをもつ自力解決の場の設定と工夫

- ① 手引きを利用しながらキーワードに着目する。
- ② 自分で気付いたキーワードに、「線」「囲み」「疑問や感想」などの書き込みをする。

(2) 考えを確かめたり、広げたり、深めたりする伝え合いの場の設定と工夫

- ① 個々の考えや変容を見取るために座席表を活用する。
- ② 比較・関連を意識した伝え合いによって、課題解決につながるようにする。
- ③ 自他のよさを意識できるような振り返りを工夫し、**資料1** 【生かす2】を取り入れた単元構成（4年国語）  
自己有用感の醸成を図る。

(3) 読み取ったことや学んだことを生かして再構成・表現する授業及び単元の展開

- ① **【生かす1】**：題材の特質を生かして再構成・表現する活動を設定する。
- ② **【生かす2】**：関連する題材を読み取る活動を設定する。

**資料1**

書を書く。		本を選び、読書する。		
P 9 L 13 ~ P 11 L 13				
8	本時 ・第三場面から現在の暮らしぶりを読み取り、それを基に場面解説書を書く。 P 1 2 L 1 ~ 終わり			○
9	・学習したことを確かめながら、場面目次を作る。			○
3	10 ・自分ら選んだ本の中から好きな場面を選び、選んだ理由をしながら場面解説書を書く。			○
11	・自分たちが選んだ本の場面解説書を読み合い、学習のまとめをする。			○

##### 2 地域社会との連携

(1) 地域の施設や人材を活用した授業づくり

**資料2**

(2) 生活・学習習慣の向上を目指した家庭への呼びかけ

- ① 家庭学習の手引きを作成し配付する。更にノート展示を行う。
- ② 親子読書を実施する。
- ③ アンケートや諸調査を実施し、家庭に対して情報提供や呼びかけを行う。

**資料3**



**資料2** ゲストティーチャーを迎えての授業（4年社会）

<p>2 2教科の平均正答率</p> <p>◎全国平均を上回り、県平均と同等もしくは上回る。</p> <p>○全国平均を上回り、県平均を下回る。</p> <p>△全国・県平均ともに下回る。</p>	<p>教科 A (知識) B (活用)</p> <p>国語 ◎ ◎</p> <p>算数 ○ ○</p>	<p>(2) 算数科</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・数直線を用いて数量の関係を考える習慣を身に付ける。</li> <li>・分数の意味を理解できるように、実生活と結び付けながら考え、繰り返し練習をする。</li> <li>・算数的思考力を伸ばすために、自力解決を大切に学習を積み重ねる。</li> </ul> <p>この学力検査は、子どもたちの学力の一部をとらえた結果ですので、子どもたちのもっている学力の全てではありません。子どもたちのよさを伸ばす機会ととらえ、お子さんに自信と意欲をもたせてください。かしこく、やさしく、たくましいお子さんに育つよう、これからも保護者の皆様のご協力をお願い申し上げます。</p>
	<p>3 児童質問紙の回答から</p> <p>&lt;成果が見られる項目&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・早起き</li> <li>・決まりを守る</li> <li>・人の役に立つ人間になりたい</li> <li>・失敗をおそれないで挑戦する</li> <li>・自分によいところがある</li> </ul>	

**資料3** 家庭への情報提供と呼びかけの学校通信

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 研究通信・授業研究会・研修会議を通して、研究の成果と課題を把握し共通実践事項に学校全体で取り組んでいく。
- (2) 学校便り・仁賀保地域学力向上推進委員会報「風車」等で家庭に対しても取組への共通理解を図るとともに、子どもたちの変容について伝えていく。
- (3) ホームページや市の教職員研修会等における情報交換の場で、本校の実践を紹介していく。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	2	1	1	1	1	8	11
児童数	20	27	43	24	29	28	2	173	
学校のホームページアドレス								http://www.edu.city.nikaho.akita.jp/innai-e/	

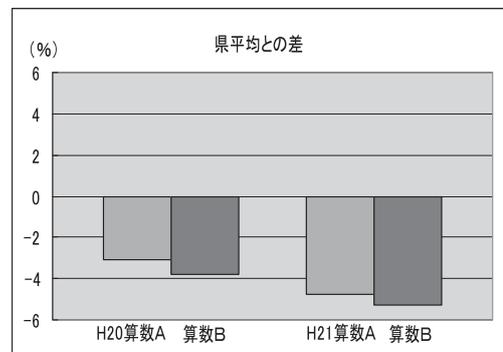
II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

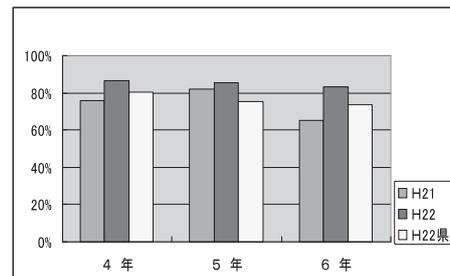
- (1) 全国学力・学習状況調査問題において、文章や資料から内容を読み取る力、題意を把握して問題を解く力に個人差が顕著に見られた。つまり、問題文や資料を読み解き、目的や条件に合わせて考えを表現することを苦手とする児童が多い。
- (2) 仁賀保中学校区全体の傾向として、自己有用感の低い児童生徒が多い。本校では、「難しいことでも失敗を恐れず挑戦」「自分にはよいところがある」「将来の夢や希望をもっている」などが他の項目に比較して低い。



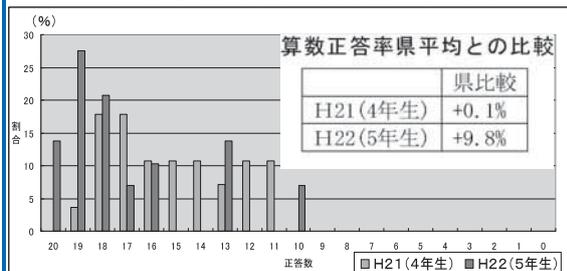
全国学力・学習状況調査問題の結果 (H20・H21算数)

2 成果

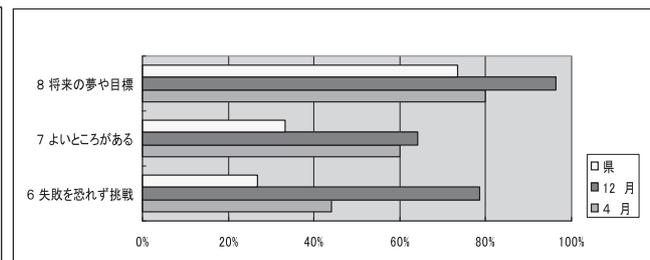
- (1) 教科の用語を用いて表現する力が付くとともに、表現することで自分の考えが整理されたり、まとまったりしていき、題意に応じて考える力が伸びた。
- (2) 小グループにおいて相互の学び合いが成立したことにより、中位層を中心に全体的に基礎・基本が定着してきた。
- (3) 活躍（発表）の場を保障し、お互いの思考に共感し合いながら学びを深めていく中で、自他の成長に気付き、自己有用感を実感する児童が多くなった。



県学習状況調査通過率の比較(算数)



県学習状況調査正答数分布の変化(算数・H22年度5年)



全国学力・学習状況調査質問紙より(「A:あてはまる」の割合)

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 中心となる取組

###### (1) 学び合いを充実させるための手立て

###### ① 表現する（話す）機会の保障

- ・小グループ等による話し合いの場を効果的に位置付けた単元構成の工夫
- ・形態の工夫……3人グループ、フリー
- ・話し合いの約束…考えがまとまっていない児童から話し始める



キーワードカードを使って(4年)



ホワイトボードを使って(1年)

###### ② 話の組み立ての指導

###### ③ キーワードの活用や教科の特性に応じた表現への支援

###### (2) 話し手・聞き手の心情を育てる指導

###### ① 「友だちの日」の実施(毎月最終水曜日)

……ソーシャルスキルトレーニングなどによる人間関係づくりの実践的授業の展開

###### ② 「友だちアンケート」の実施(4, 10, 12月)

……評価と指導計画の見直し

###### (3) 学び合いをふり返る場の重視

###### ① 自己の変容を記述するふり返りの場

……ふり返りの視点の提示、機能的なノートづくり

###### ② 学習内容の定着を評価するふり返りの場(算数科)

……県算数単元評価問題の活用

###### (4) 学校間の教職員の連携による授業改善

###### ① 「小学校教科指導に関するお願い」(仁賀保中学校より)に基づく授業づくり

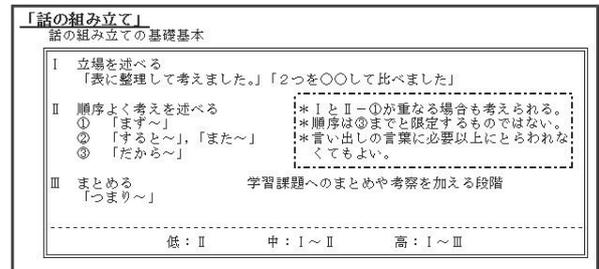
###### ② 仁賀保中学校教諭による6年生に対する授業の実施

###### ③ 各校の授業研究会への参加…9年間を見通した系統図、生徒指導の三機能を生かした授業

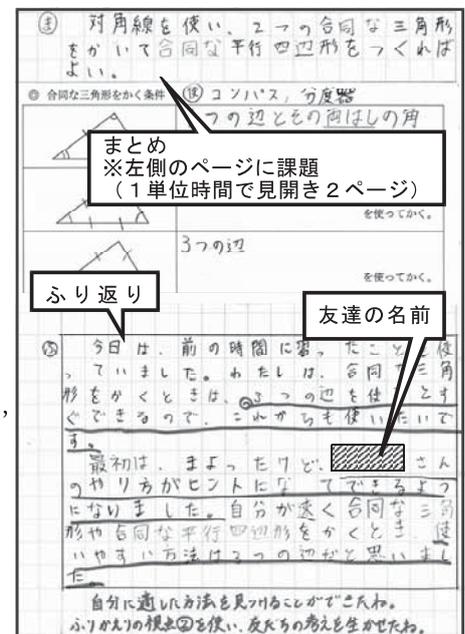
##### 2 検証と考察

45分の単位時間内に学級内の全ての児童が自分が考えた過程を表現し、学び合うために、小グループを主とした様々な学び合いの形態を試みた。児童一人一人が必ず表現する(話す)ことになるため、主体的に課題に取り組むようになった。また、話の組み立ての指導、キーワードの活用への支援などにより、題意に応じた話し合いが展開でき、その結果、基礎・基本が定着してきたと考える。さらに小グループ内で自分の考えを共感的に聞いてもらったり、全体の話合いの中で自分の考えを説明することにより、自己有用感を実感する児童が増加したと考える。

学校間の教職員の連携としては、中学校までに育てておきたい力の共通理解と自己有用感を高めるといった共通の課題をもって、仁賀保中学校区4校間で授業を見合い、「授業参観カード」を活用した評価や意見交換により研修を深めた。また、本校6年生を対象に行った仁賀保中学校教諭による授業の実施により、児童の発達段階への理解と教師の指導方法への理解による中1ギャップ緩和への方向性を示すことができた。



話の組み立ての指導資料(抜粋)



児童のノートより(5年)

#### V 成果の普及に関する今後の取組

###### (1) 今年度の研究の取組の様子と成果を本校ホームページ上に公開し、幅広い認知を図る。

###### (2) 仁賀保中学校区以外の3校との連携をこれまで以上に強め、お互いの成果を共有し合うとともに、共通の課題を明らかにし、その解決に向けて協議し、取り組んでいく。また、市の教職員研修会等を活用し、市内の他の学校との連携を図る。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	2	8	11
児童数	17	9	14	9	9	19	3	80	
学校のホームページアドレス		http://koidesyou.blog27.fc2.com/							

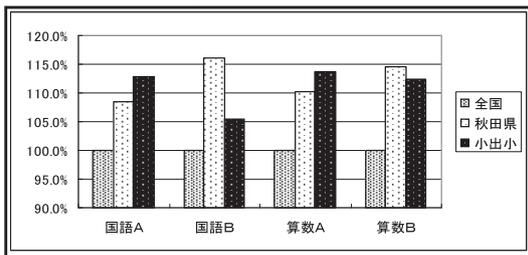
II 研究の重点

- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

自校では下のグラフの通り、B問題に関して、国語、算数ともに県平均を下回っており、自分の考えを表現する問題に弱く、活用する力は不十分である。また、下表の通り、取組に対する自信のなさや、粘り強さに欠ける傾向が見られる。



質問紙調査の項目	県平均との差
「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦していますか」に対する肯定的回答の割合の平均	-3.8%
「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」に対する肯定的回答の割合の平均	-1.1%

〈全国の正答率を100としたときの正答率の平均〉  
全国学力・学習状況調査 (H19~22)

〈全国学力・学習状況調査質問紙より (H19~22) 〉

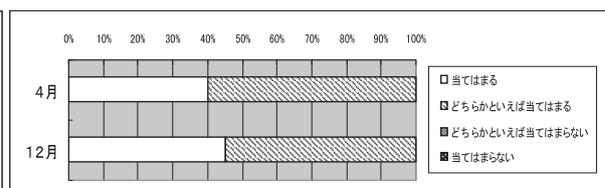
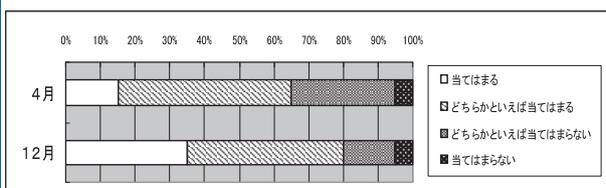
2 成果

本研究の取組によって、自分なりの考えをもとにするようになり、テキストをもとに自分の考えを表現する力が高まってきた。また、学習に対する主体性や粘り強さが見られるようになってきた。

全国学力・学習状況調査 国語Bの問題の正答率	
4月実施時	74.5%
12月実施時	94.5%

〈全国学力・学習状況調査国語B 同一問題による変容 (6年生) 〉

4月実施時に特に正答率が低かった問題	4月実施時	12月実施時
物語を読んで思ったことや考えたことを、理由を明確にしてまとめて書くことができるかどうかを見る問題	50.0%	80.0%
目的や意図に応じて、聞き手を引きつけるように話すことができるかどうかを見る問題	45.0%	85.0%
話の中心や話し手の意図をとらえながら聞き、適切に質問することができるかどうかを見る問題	65.0%	85.0%



「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦しますか。」

「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか。」

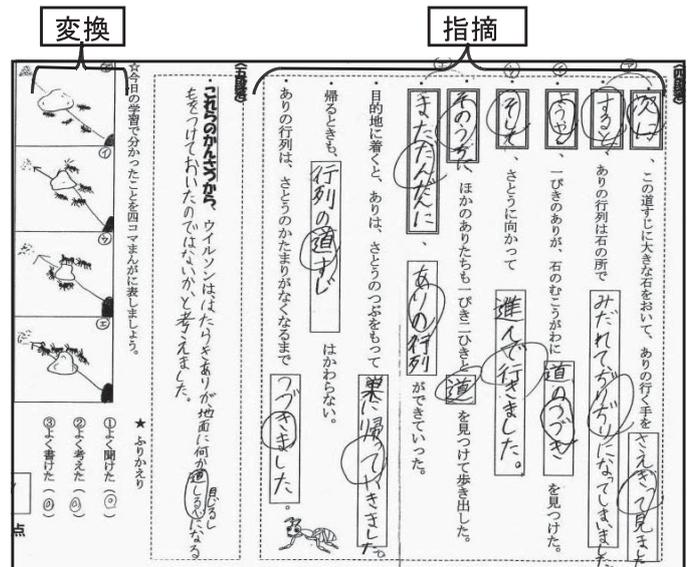
〈全国学力・学習状況調査質問紙より4月と12月の結果の比較〉

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 PISA型読解力を踏まえた、3つの読解プロセスを意識した授業づくり

(1) 指摘～目的にそって、テキストから正確に情報の取り出しをする。

- ① テキストから情報を取り出すための目的が分かり予想をもつ。
- ② 明確な視点を与え、テキストにサイドラインを引いたり、テキストから見付けたことを書いたりする。
- ③ ワークシートを工夫し、ねらいにせまるために必要な情報の取り出しをする。



<指摘から変換へ：キーワードを捉え、分かったことを4コマ漫画で表現>

(2) 変換～情報を取り出し、分かったことを表現形式を変えたり、視点を変えたりして表現することで理解を深める。

- ① 情報を取り出し、分かったことをもとに思考を働かせながら、絵や図から文章にしたり、文章を読んで分かったことを図や式に表したりなど形式を変えて表現する。
- ② 情報を取り出し、分かったことをもとに、思考を働かせながら立場や視点を変えて、表現する。
- ③ 分かったことを、キーワードを入れて短く書いたり、簡潔な言葉で表現したりする。

(3) 理由付け～テキストを根拠に理由を述べ、自分の考えをもつ。

- ① 自分の考えや理由をシートやノートに書く。理由は、テキストを根拠に、自分の知識や経験と結び付けながら書く。
- ② ペアやグループなどでの話し合いを取り入れ、自分の考えを確かにしたり、全体の場合での話し合いで様々な考えにふれたりする。



<理由付け：問題について  
テキストを根拠に理由を述べる>

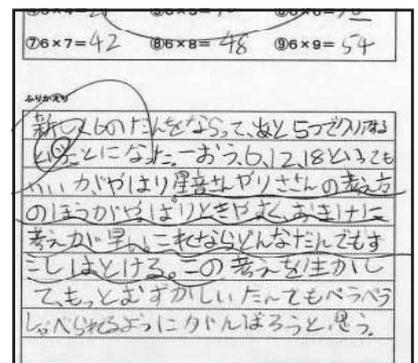
##### 2 中学校区各校の共通課題である自己有用感の向上への取組

(1) 生徒指導の三機能を意識した授業づくり

- ① 毎月の職員会議で、学習過程における生徒指導の三機能について重点事項の確認をする。
- ② 一人一人の考えを認め合う雰囲気づくりをする。

(2) 自己有用感を育てるための連携

- ① 指導案に「自己有用感を高めるために」の項目を設けることを確認し合い、その手立てが効果的であったかについても研究会で取り上げる。
- ② 中学校区各校の研究授業に参加し、他校の取組を参考にしする。



<生徒指導の三機能  
：友達のよさにふれた振り返り>

#### V 成果の普及に関する今後の取組

(1) 自校のホームページに掲載したり、市の教育研究会で発表したりして、広く紹介する。

(2) 来年度の地区公開において自校の研究成果を紹介するとともに、さらなる改善を図りながら研究を推進していく。

(3) 地区学力向上推進委員会会報「風車」で地域に発信し、家庭との連携も深めていく。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	4	3	4	/	/	/	2	13	23
生徒数	104	113	141	/	/	/	2	358	
学校のホームページアドレス					http://www.edu.city.nikaho.akita.jp/nikaho-j/				

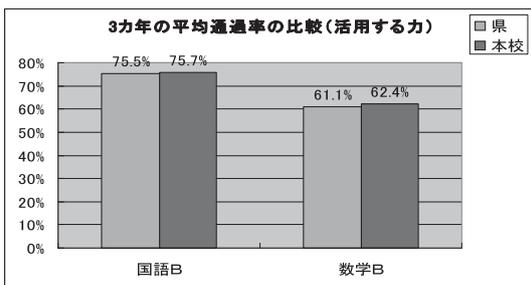
II 研究の重点

- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

自校では下のグラフの通り、B問題に関して、数学は県平均を少し超えているが、国語の活用する力が県平均よりやや低い。また、下表の通り、県平均と比較して、学習に対する肯定的な考えや家族との関わり、自己有用感に関する項目に弱い傾向が見られる。



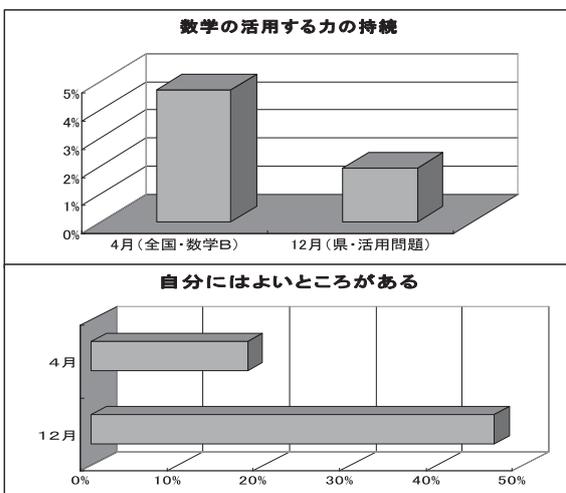
<全国学力調査問題の正答率より (H19~21)>

項目	県平均との差
(1) 学習に対する肯定的な考えの低さ	
Q 国語の勉強は大切だと思いますか。*	-8.9%*
Q 国語で学習したことは将来役に立つと思いますか。	-5.4%*
Q 数学の勉強は大切だと思いますか。*	+1.0%*
Q 数学で学習したことは将来役に立つと思いますか。	+0.4%
(2) 家族との関わりの弱さ	
Q 家の手伝いをしますか。*	-9.5%*
Q 家の人といっしょに朝食を食べますか。	-9.6%
(3) 自己有用感の低さ	
Q 自分にはよいところがあると思いますか。*	-2.1%*
Q 将来の夢や目標を持っていますか。	-1.3%

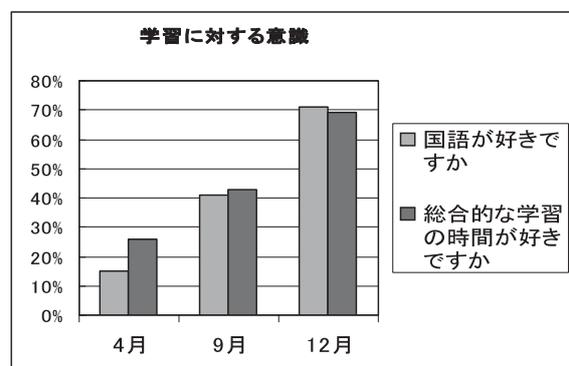
<全国学力・学習状況調査質問紙より (H19~21)>

2 成果

本研究の取組によって、数学で活用する力が維持され、自己有用感にも向上が見られた。また、学習に対する肯定的な意識にも改善の傾向が見えるようになっている。



<4月(全国)と12月(県)の結果の比較より>



<肯定的回答率が県平均より低かった、国語と総合的な学習の時間に対する意識の、4月(全国)・9月(自校)・12月(県)の三調査で比較した結果より>

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

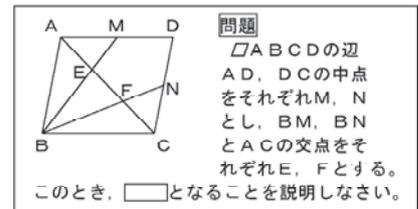
##### 1 分かる授業の探究

###### (1) 言語活動を学習過程に取り入れた授業

<数学科の実践例>

【多様な考えや答え方が得られる問題の工夫】

活用する力の向上のために、課題解決の過程で言語活動を意識して指導した。活用する力は、特に課題を自力解決したり協同で解決したり、分かったことを教え合ったりする過程で身に付く。次は、多様な考え方が得られるような問題に答える授業である。右上のような問題を生徒に投げかけ、自由な発想で□にあてはまる事柄を挙げさせた。右のように、同じ問題でも多様な考え方や表現の仕方があった。説明できたら黒板に貼付させた後、「なるほど！」をキーワードにして全員で見合わせた。また、どの考え方が分かりやすいか、説明してもらいたいのはどの考え方を、見合う際の視点にすることで個々の考えの深まりが見られた。この場合、考える過程・書く過程・説明の過程・多様な考えを理解する過程で言語能力が磨かれ、活用する力もその中で育まれた。



私は $\triangle ABM = \triangle NBC$ を説明してみます。	名前
<p><math>\triangle ABM</math>と<math>\triangle NBC</math>において 底辺が等分されている? <math>\triangle ABM = \frac{1}{2}\triangle ABD</math>, <math>\triangle NBC = \frac{1}{2}\triangle CBD</math> <math>\triangle ABD = \triangle CBD</math>なの? <math>\triangle ABM = \frac{1}{2}\triangle ABD</math> <math>= \frac{1}{2}\triangle CBD</math> <math>= \triangle NBC</math></p>	
私は $\triangle ABM = \triangle NBC$ を説明してみます。	名前
<p>底辺が等しく、高が共通 だから<math>\triangle CBN</math>と<math>\triangle NBD</math>は同じ面積 ②<math>\triangle ABM</math>と<math>\triangle MBD</math>は " 4等分したことに気づいた。 <math>\triangle NBC = \triangle BMA</math></p> <p>BDは<math>\square ABCD</math>の 2つに分れる</p>	

3 学年数学 学習シートへの生徒の記述

【テストの自由記述欄や学習カードを使った工夫】

- 証明の授業では、まず根拠となる事柄を自分で考えさせ、言葉にして書かせた。
- テストの自由記述欄に、学んだことのまとめや自作問題と解説・感想を書かせた。
- 毎時間の学習カードによる振り返りに、学んだことや感想を文章化させた。

###### (2) 生徒指導の三機能を生かし、自己有用感の醸成を図る授業

<美術科の実践例>

【共感的人間関係を育てる話合い】

1 学年「ピカソ」作品の鑑賞の授業である。プロジェクターに映し出された作品を通して思ったことや考えたことををもとに話し合った。スクリーンの前に弧を描いて座り、全員で一つの絵を鑑賞することで話しやすい雰囲気をつくり、個から出された考えを全体で認め合った。ここで教師は、一人一人の考えが共感的に受け止められるように、コーディネーターに徹し、発表者は、ありのままに自分の意見を語れるように、また聞く側は、発表者の意見を一人の人間の意見として無条件に尊重し、理解しながら聞けるように配慮した。

##### Q.アーティストの世界を味わおう!

1 学年美術 学習カード

##### 2 小・中学校の教職員の連携

- (1) 授業研究会と小・中授業交流会における職員の交流
- (2) 小学校の既習内容の把握
- (3) 小学生の体験授業の実施
- (4) 小学校への重点的指導内容の依頼



小学生の体験授業 数学

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 仁賀保中学校ブロック授業改善連携部会報に掲載し、成果を仁賀保中ブロック全体で共有する。
- (2) 市の教職員研修会で発表し、にかほ市全体で成果を共有する。
- (3) ホームページに掲載し、県内外に広く成果を紹介する。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	2	1	1	1	1	8	12
児童数	39	40	43	33	39	35	3	232	
学校のホームページアドレス									<a href="http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ns-nakasensyo/">http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ns-nakasensyo/</a>

II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

全国学力・学習状況調査結果から捉えた本校の課題

[国語]・基礎的言語事項に関する知識・理解 (A1:90.5% 県93.6%)

- ・叙述と関係付けて的確に読み取る (A3:71.4% 県73.0% B3三:71.4% 県78.1%)
- ・条件に応じて適切に書く (B3二:71.4% 県81.1% B4:77.1% 県77.2%)

[算数]・分数、割合、計算の意味 (A2-1:71.4% 県62.4% A2-2:60.0% 県64.2%)

- ・必要な情報を選び考えを説明する (B5-2:22.9% 県30.7% B6-2:31.4% 県27.7%)

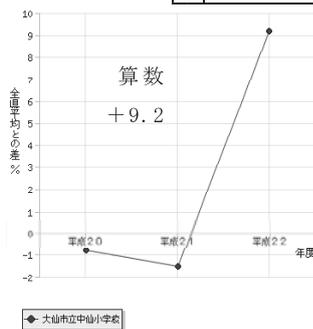
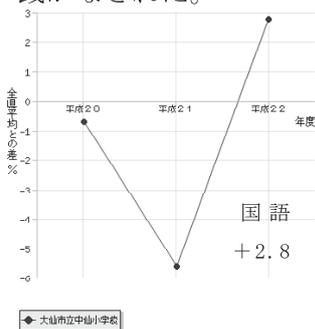
自校は上記の通り、基本的な知識・理解とともに、的確に読み取り、条件に合わせて筋道立てて考え表現する力について課題がある。

2 成果

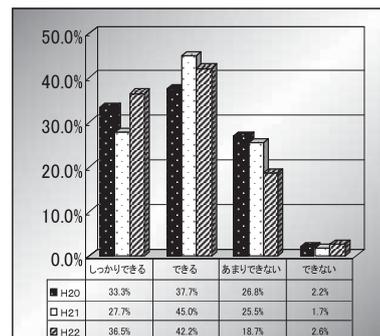
- 継続的な検証改善、授業改善に取り組み、全国学力・学習状況調査で捉えた課題の改善が図られてきた。
- 12月の検証(県学習状況調査)では、国語・算数とも県平均を上回った。特に、算数の課題改善が図られた。
- 自分の意見を伝える意欲が高まってきている。(児童アンケートより)
- 小・中共通の「中仙モデル」に取り組み、めあてとまとめ(1時間のゴール)を教師も児童も意識して、授業実践がなされた。

全国学力・学習状況調査課題の県学習状況調査による検証結果

課題(全国)	改善の目標値	12月(全県)
国語	言語事項 A1 90.5%→95%	86.3% (87.2%)
	読む A3 71.4%→80%	62.9% (35.2%)
	表現の工夫 B3二 71.4%→80%	80.0% (63.4%)
	条件に合う作文 B4 77.1%→85%	80.0% (82.4%)
算数	商が小さい除法 A2(1) 71.4%→85%	100% (77.9%)
	分数 A2(2) 60.0%→75%	100% (81.5%)
	角の大きさ A5(2) 82.9%→90%	88.6% (79.6%)
	割合 A9(1) 68.6%→85%	82.9% (45.1%)
考え方の説明 B5(2) 22.9%→60%	62.9% (75.4%)	
意欲等	家庭学習時間 平日30分以上 100%	100%
	45分以上 80%	
	話し合う活動 中仙地区目標値 85%	100%
ノート 中仙地区目標値 80%	82.1%	



県学習状況調査全県平均との差経年比較(6年)



Q あなたは、自分の意見や考えを伝えたり発表したりできますか。

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 具体的な研究内容

###### (1) 継続的な検証改善サイクルの確立 (資料1)

中仙地区教育研究会を設立し、地区共通のPDC Aサイクルやデータ分析を進めている。短期的課題、中・長期的課題の分析と解決に向けた取組、自校の実態に応じた検証改善に継続的に取り組んできている。

###### (2) 小・中連携に基づく授業改善の推進

###### ① 小・中同じ視点から授業改善を目指すための「中仙モデル」の実践 (資料2)

課題意識を高める焦点化されたねらい、ねらいに迫るための言語活動の充実、分かったことが実感できるまとめと評価を意識し、授業改善を図っている。本時のゴールを明確にし、自力解決と学び合いの充実(ペア・グループ・全体)から、個の学習の成立につなげている。

###### ② 授業研究会の実施方法の工夫

中仙モデルに視点を当て、付箋紙を用いたワークショップ型の協議を行っている。また、国語や算数の教育専門監を招いてのオープン授業、小・中連携、大学教授と連携した研究協議も多く取り入れている。

###### ③ 9年間のスパンで「学び方」を育てる指導 小・中で「話す・聞く」「ノート指導」「家庭学習」について、指導の系統性を考えながら具体的に指導している。

##### 2 成果及び改善の要因

課題改善の要因として、教師の意識の向上が挙げられる。中仙モデルの実践、同僚性を発揮した研究協議が日常化され、確実に授業改善につながってきた。子どもたちの、中仙モデルの授業スタイルに対する満足度も高くなっている。教室を開き、学校を開くことで、多くの連携が生まれ授業力向上が図られてきた。また、中仙地区共通のPDC Aサイクルを機能させることで、計画的に自校の検証改善も進めることができた。

(資料1) 自校・中仙地区検証改善サイクル

月	本校の取組	中仙地区の取組
	○調査分析 □校内研修・実践	
P	4 ○全国学力・学習状況調査の実施、分析 5 ○研究計画の作成、研究の重点の確認 6 ○研究の重点を意識した授業実践の継続(通年) ○短期的課題の検証・補完指導 ○長期的課題への対応(通年)	・中仙地区研究体制の確立 ・地区短期的課題の把握 ・授業改善に向けた共通実践の確認 ・特別活動実践の連携 ・「家庭学習推進のてびき」作成・配布 ・「生活についてのアンケート」実施
D	7 □特別活動計画訪問 ○授業改善・学力向上に向けた実践の共通理解 ○オープン授業の実施(国語か算数) ・「家庭学習チャレンジデー」の実施 ○短期的課題の改善状況検証	・「ノーマディアデー」の実施 ・授業改善の「中仙モデル」検討 ・小・中合同学習会「N1スタディ」
C	8 ○長期休業中の補充学習 ○全国データの分析、本校課題の把握と対策 9 ○課題の回復・補充指導 □総合的な学習の時間計画訪問 □「学びの総合エリア」大学教員派遣事業1 □オープン授業の実施(国語か算数) ○「中仙モデル」授業実践レポート作成	・学力向上部会の開催 ・中仙地区教育研究会研修会の開催 ・授業改善の「中仙モデル」提示 ・全国データとの比較 ・地区課題の把握 ・県外先連校視察(千葉市・川崎市)
A	10 ○教師アンケート ○課題改善状況の検証と授業改善の評価 ○授業改善に関する強調週間の実施(早寝・早起き・朝ご飯・家庭学習・ノーテレビ)	・地区課題の改善状況の検証 ・「生活についてのアンケート」実施 ・学力向上部会の開催

(資料2) 「中仙モデル」を押さえた授業実践 1年:算数「ひきざん」

<算数の基本的な流れ>

**1 課題意識を高める  
焦点化されたねらい**

(1) 前時までの違い等から、本時の課題を焦点化する。  
(2) 子どもが見つけたキーワードを大事にする。  
(3) 本時のゴール(まとめ)に結び付く文言にする。

**2 ねらいに迫るための  
言語活動の充実**

(1) 具体物や半具体物・図・式等と言葉を結びつけるようにする。  
(2) 個・ペア・グループ学習の状況から、全体の学び合いにつながるよう考えを取り上げる。  
(3) よりよい考え(速く・簡単に・正確に・いつでも)に視点を当てた学び合いにする。

**3 分かったことが実感  
できるまとめと評価**

(1) 子どもの言葉を生かし、ねらいに合致したまとめにする。  
(2) 適用問題で理解の状況を確認し、支援を生かす。  
(3) 振り返り(自己評価や感想)を次の学習に生かす

**1 焦点化されたねらい**

○既習事項  $13 - 3 = 10$  との違いを明確にする。

ブロックで **まやく** 9をとるほうほうをかんがえよう

○めあてのキーワードを  にして、考えさせる。(めあてを子どもとともに)

**2 ねらいに迫る言語活動**

○自力思考のあと、ペアで互いの考えを説明する。言葉だけでなく実際にブロックを操作しながら。

ぼくは、3をとって、6をとったよ。

わたしは、10のケースから9をとったよ。

○異なる考え方を取り上げ、ブロック操作や言葉で比較し、よりよいまとめにつなげる。

**3 まとめと評価**

○まとめのキーワード  から  にして考えさせる。  
○適用問題をブロック操作とキーワードで評価する。  
○振り返りは記号で自己評価

中仙モデルの実践等に関する評価 (教師アンケート)	授業満足度 (児童アンケート)	中仙モデルとリンクしたノート指導
4 (十分満足) 3 (おおむね満足) 2 (もう少し) 1 (不十分)		
学習意欲を高める学習課題や導入の工夫をしているか		
ゴールを意識し、1時間のめあてを明確に提示しているか		
自力解決と学び合いのバランスをとっているか		
ペア・グループ・全体で話し合い学び合う場をつくっているか		
分かったことが実感できるまとめと評価になっているか		
学習に役立つノート指導をしているか		
めあてを意識し意欲的に取り組む子どもに近づいているか		
聴き合い話し合い、高め合う子どもに近づいているか		

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 第25回秋田県教育研究発表会において、中仙地区小・中3校連携による取組を発表する。
- (2) 自校の学校報やホームページで取組を紹介し、保護者や地域・他校に発信する。
- (3) 今後も授業改善に取り組み、伝え合い高め合うための表現力や読解力の向上を図っていきたい。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	11
児童数	14	18	17	11	18	24	2	104	
学校のホームページアドレス					http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ns-shimizusyo/				

II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

全国学力・学習状況調査の結果からみた課題

- 〈国語〉・文末表現や接続語などに注目しながら、物語を注意して読むこと。
  - ・自分の考えが明確になるように、文章全体の効果を考えて書くこと。
  - ・自分の意図に応じて聞き手を引きつけるように話すこと。
- 〈算数〉・基礎的・基本的な知識の中では、「割合」と「分数」の意味。
  - ・活用に関する問題では、問題文の中から必要な情報を読み取り、それをを用いて表現するなどの過程。
- 〈児童質問紙〉
  - ・児童・生徒質問紙では、「失敗をおそれないで挑戦する」や「話し合う活動をよく行っている」などの項目。

「知識」に関する問題について		「活用」に関する問題について		児童生徒質問紙より
国語A	3・4	国語B	3二	6・7・12・26・48・51
算数A	2(2)・9(1)	算数B	1(2)・3(3)・6(2)	

2 成果

- ◇ 継続的な検証改善に取り組んだ結果、県学習状況調査において全国学力・学習状況調査で捉えた課題について改善が図られた。特に算数において大きく改善された。
- ◇ 小・中共通の「授業改善」として、導入場面で児童の気付きや思いから課題を設定するという教師側の継続的な取組により、意欲的に発表する児童が増えた。  
また、「話す・聞く」スキルの活用により、児童相互の学び合いが充実してきた。

全国学力・学習状況調査における課題  
についての改善が見られた項目

	設問	4月	12月
国語A	3	68.2	76.2
	4	79.0	80.0
国語B	3二	31.8	49.2
算数A	9(1)	59.1	86.2
算数B	1(2)	31.8	68.6
	6(2)	27.3	80.2

児童のアンケートの結果から (%)

No	質問事項	7月	12月
4	自分の考えをはっきり話したり、人の話をしっかり聞いたりしていますか。	80.6	88.4
5	学校や家での勉強をがんばっていますか。	90.0	95.1
6	授業は楽しく分かりやすいですか。	74.4	86.0
10	自分の夢をもち、実現のためにがんばっていますか。	91.0	94.2

- ◇ 児童のアンケート結果では、「授業が楽しい」「勉強をがんばっている」等の項目がよくなり、学習への意欲が高まってきた。

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 具体的な研究内容

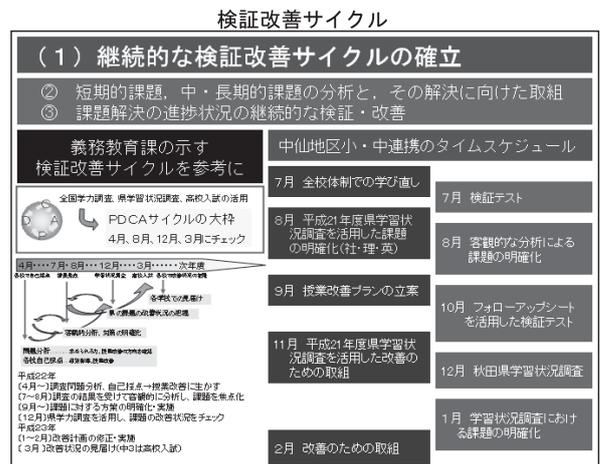
###### (1) 継続的な検証改善サイクルの確立

全国学力・学習状況調査の結果を基に、短期的課題と中・長期的課題を分析し、短期的課題については3～4か月のサイクルで、中・長期的課題については、12月までを1つのサイクルとして検証改善を行うこととして、全校体制で課題解決に向けた取組を行った。

###### (2) 小・中連携に基づく授業改善の推進

中仙地区の小・中学校が目指す授業改善「中仙モデル」を策定し、授業研究を行った。

- 1時間に1回は操作活動や話し合いの場を設定し、児童の気付きや考えを生かした学び合いができるようにする。(自力解決→学び合い→まとめ)
  - 1時間ごとのねらいを明確に示し(板書等)、めあてに向かって学びを進めることができるようにするとともに到達状況を把握(自己評価カード)し、フィードバック(ノート指導)・個別指導等(ワークシートの活用)で、確実な力を付けていくための支援をする。
  - 「話す・聞く」スキルの活用や、学習形態を工夫し、表現力を育てる。
  - 授業研究会の実施方法の工夫
    - ・事前研究会の重視(課題を焦点化して授業参観)
    - ・付箋を用いたワークショップ型授業研究会→成果と課題を明らかにする。
    - ・学校の枠組みを超えた授業研究(小・中の連携)
- (3) 9年間のスパンで育てる「学び方」の指導  
小・中9年間を見通した「学び方」の資料を作り、共通理解を図った。



##### 中仙モデル

###### 授業改善 中仙モデル

めざす授業 → 3つの「わ」

わかる  
わらい  
わくわく

###### 授業のポイント

- ・終末まじり！戻り切れない授業
- ・児童一人一人のねらい(課題)が焦点化されている授業
- ・充実した言語活動によりねらいに迫る授業

授業改善に生きる授業研究  
○事前研究→授業→事後研究のもち方  
○学校の枠組みを超えた授業研究(小・中の連携)

##### 学習形態の工夫



##### 2 成果と検証

###### ○継続的な検証改善サイクル

7月の客観的な分析後、新たな課題を焦点化してPDCAサイクルを示す授業改善の立案を目指し、全校体制で取り組むことができた。

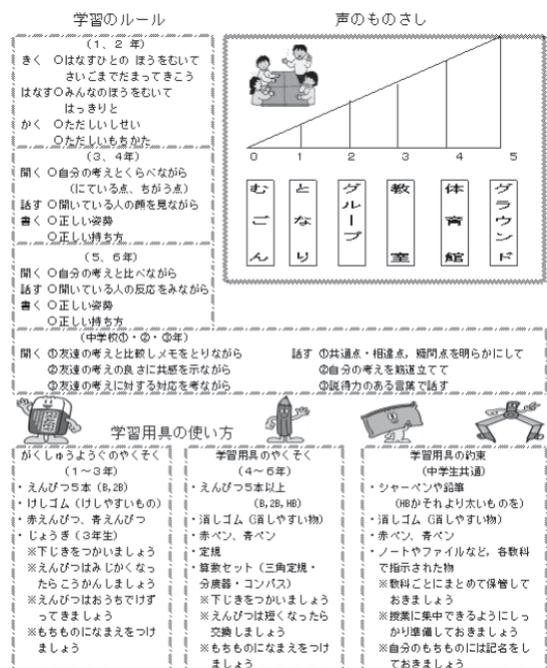
###### ○授業改善

「学び方」を育てる指導プログラムの作成とあわせて、児童に基本的な学習の流れや形が身に付き、活動を予測して自発的に学ぶ姿が多く見られるようになった。

###### ○授業研究会の工夫

授業者だけでなく、参加者全員が自らの授業改善の方向性を見付け、協議が深まりのあるものになってきた。

##### 中仙地区「学び方」の資料



#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 今年度の「成果と課題」を明らかにして、来年度の研究につなげていく。
- (2) 今後も小・中連携で情報交換をしながら、さらに改善点を明らかにして研究を進めていく。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	2	2	2	/	/	/	1	7	17
生徒数	51	52	65	/	/	/	1	169	
学校のホームページアドレス					http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~n-s-nakasentyu/				

II 研究の重点

- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

4月の全国学力・学習状況調査における本校・中仙地区・大仙市の課題を基に、短期的課題と中・長期的課題を分類した。

(1) 短期的課題について

基礎的・基本的な知識及び技能の中に一部定着が不十分なものがある。検証の場を生かしながらその都度新たな課題を見だし改善を図る。

(2) 中・長期的課題について

- ① 情報を適切に選択して解釈する、必要な情報を読み取りそれを用いて表現するなどの過程に課題がある。その解決のために読解力の育成に課題を焦点化して取り組む。
- ② 児童・生徒質問紙では、「7 自分にはよいところがある」など、右に示す項目で全国平均を上回ってはいるものの、本校の目標値に達していない。

全国学力・学習状況調査における課題

主に知識に関わる問題について	
国語A	10三・10七・4二・9二・10八・3一
数学A	11 (3)・9 (2)・3 (1)・3 (2)・5(4)・5(3)

活用に関わる問題について	
国語B	1二・3二・2三・3三
数学B	3 (1)・4 (1)・5 (2)・1 (2)・2 (2)

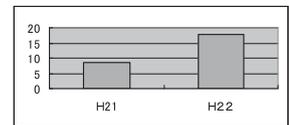
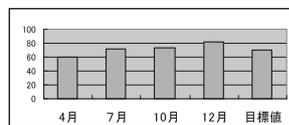
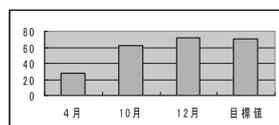
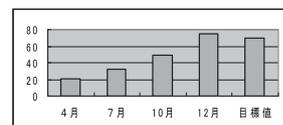
児童・生徒質問紙より	
質問紙	6・7・25・48・49・51

2 成果

- (1) 国語・数学以外の教科でも、生徒に育てたい力を明確に示した継続的な検証改善サイクルを確立することができた。
- (2) 各教科・学年ともに、4・7・10・12月と通過率が順調に伸びていることを確認するとともに、新たな課題を見だしながら継続的に改善のための取組を行うことができた。
- (3) 平成22年度秋田県学習状況調査において、国語・数学については本校で設定した目標値、社会・理科・英語については平成21年度秋田県学習状況調査の類似問題の設定通過率を上回っている設問が多いことを確認することができた。

※ 中学校2年数学を例に

- 基礎的・基本的な知識及び技能  
4月：H22全国調査11 (3)  
7月：H22全国調査類似問題  
10月：H21県調査 (5)  
12月：H22調査 (18)  
本校の目標値：70%
- 活用する力(「見方・考え方」平均値)  
4月：H22全国調査5 (2), 1 (2)  
10月：H21県調査 (9 (12 (16 (19 (20  
12月：H22県調査 (7 (14 (16 (17 (19 (20  
本校の目標値：70%
- 生徒の情意面  
4月：前年度の同一生徒の好意的反応  
7, 10, 12月：「学習の道標」の好意的反応  
本校の目標値：数学科では70%と設定
- 同一生徒の秋田県学習状況調査の正答率平均の全県平均との比較  
H21県調査(昨年度1年) + 8.6  
H22県調査(今年度2年) +17.9

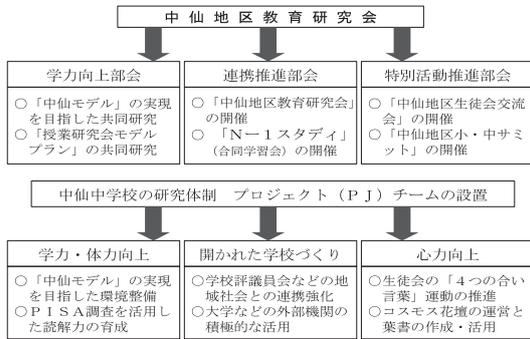


#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 「学校間の教職員の連携」による研究の推進

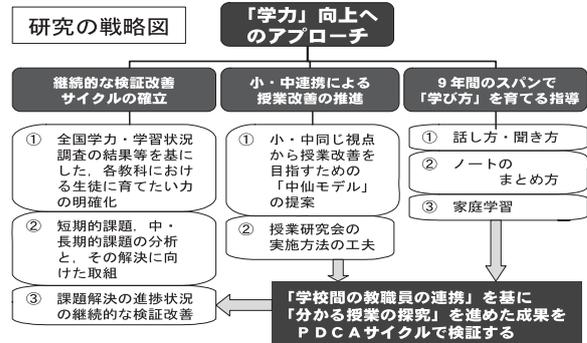
###### (1) 旧中仙町6校による研究体制の整備

中仙地区小・中3校に豊成地区を加えた旧中仙町6校の連携を強化するために、「中仙地区教育研究会」を立ち上げて三つの部会を設立し、本校の研究体制もあわせて整えた。



###### (2) 三つの柱を基にした研究の戦略図

特に、学力向上に向けては、PDCAサイクルのタイムスケジュールを作成して共通理解を図り、小学校は国語・算数、中学校は教科の壁を取り除いて全校体制で取り組んだ。



##### 2 具体的な取組と成果

###### (1) 継続的な検証改善サイクルの確立

各教科で調査結果を分析して生徒に育てたい力を明確化し、4・7・10・12月と全校体制で取り組んできたことを「各教科における今年度のPDCAサイクルの成果と課題」として示すことができた。

###### 生徒に育てたい力の明確化

教科	短期的課題 (基礎的・基本的な知識及び技能)	中・長期的課題 (活用する力と生徒の情意面)
国語	全国学力・学習状況調査を活用して見いだした基礎的・基本的な知識及び技能を習得している生徒	書かれている内容を正確に理解し、それを基に自分の考えを書いたり話したりすることができる生徒
数学	全国学力・学習状況調査を活用して見いだした基礎的・基本的な知識及び技能を習得している生徒	物事を数・量・図形などに着目して観察的に捉え、自分の考えを数学的に表現できる生徒
社会	秋田県学習状況調査を活用して見いだした基礎的・基本的な知識及び技能を習得している生徒	根拠を基に自分の考えを説明できる生徒
理科	秋田県学習状況調査を活用して見いだした基礎的・基本的な知識及び技能を習得している生徒	自然現象を多面的・多角的に捉え、科学的な根拠をもって自分の考えを表現できる生徒
英語	秋田県学習状況調査を活用して見いだした基礎的・基本的な知識及び技能を習得している生徒	4技能を統合的に活用してコミュニケーションできる生徒
音楽	強弱記号と楽譜に記された音の高さが分かり、それらを基に曲のおおまかな作りが理解できる生徒	歌詞の内容や楽譜を手がかりにして、自分の表現したい音楽をもち、それを具体化しようとする生徒
美術	基礎的・基本的な知識及び技能を習得している生徒	自分の思いを大切に、そのイメージを形や色彩で豊かに表現したり、鑑賞することができる生徒
保健体育	自分の体力に関心を持ち、持久走に意欲的に取り組むことにより体力の向上を目指そうとする生徒	授業の中で、書いたり話したりする言語活動を大切に、知識や技能をより確かなものにしてしようとする生徒
技術家庭	基礎的な知識・技術を習得している生徒	生活に生きる力を身に付けている生徒

###### 短期的、中・長期的課題の改善状況を検証する手立て (○国語・数学、◇社会・理科・英語を例に)

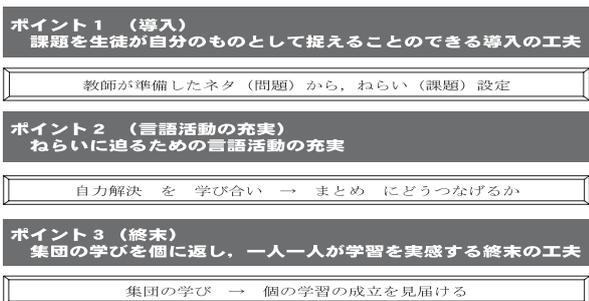
月	1年	2年	3年
4	○全国学力・学習状況調査を活用し、課題を全学年共通のものとして捉えた。		
7	○短期的課題についてのみ、全国学力・学習状況調査の類似問題を活用して、4月の課題の改善状況を確認するとともに、新たな課題を見いだした。 ◇平成21年度県学習状況調査の前年度の範囲を活用して課題を捉えた。(英語は出題可能な抜粋問題)		
10	○◇平成21年度県学習状況調査を活用して、7月の課題の改善状況を確認するとともに、新たな課題を見いだした。		○◇大仙市のフォローアップシートを活用して課題を捉えた。
12	○◇平成22年度県学習状況調査を活用して、10月の課題の改善状況を確認するとともに、新たな課題を見いだした。		○全国学力・学習状況調査を再度活用 ◇大仙市のフォローアップシートを活用
2	○◇平成22年度秋田県学習状況調査を活用して、課題の改善状況を確認する予定		

###### (2) 小・中連携による授業改善の推進

###### ① 授業改善「中仙モデル」の具体化

小学校では国語・算数、中学校では各教科の授業改善プランを作成して共通理解を深め、目指すべき授業改善の方向性が明確となった。

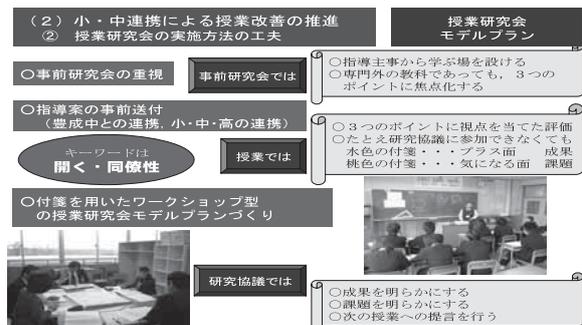
###### 「中仙モデル」の3つのポイント



###### ② 授業研究会の実施方法の工夫

授業改善に役立つ授業研究を日常的に行う土台ができ、「学び方」を育てる指導プログラムの作成とあわせて、9年間のスパンで児童生徒を育てていくという意識が高まった。

###### 授業研究会モデルプラン



#### V 成果の普及に関する今後の取組

(1) 研究発表の機会や他地区との交流の場を生かして、さらに研究を改善・推進していく。

(2) 自校のホームページに掲載するなどして、県内外の各学校に紹介する。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	1	1					3	10
児童数	29	29	29					87	
学校のホームページアドレス								http://www.city.semboku.akita.jp./sc_saichu/	

II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究
- エ) 学校間の教職員の連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

全国学力・学習状況調査の結果において、県の正答率と自校の正答率を比較したとき、下の設問について差が大きい。  
(数字は自校正答率－県正答率)

- 目的に応じて、文字の大きさや配列・配置に気を付けて書く (-14.3%)
- 表現の仕方に注意して説得力のある話をする (-18.1%)
- 記事文における表現の仕方を捉える (-14.3%)
- 事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる (-19.7%)
- 一元一次方程式の解の意味を理解している (-21.5%)

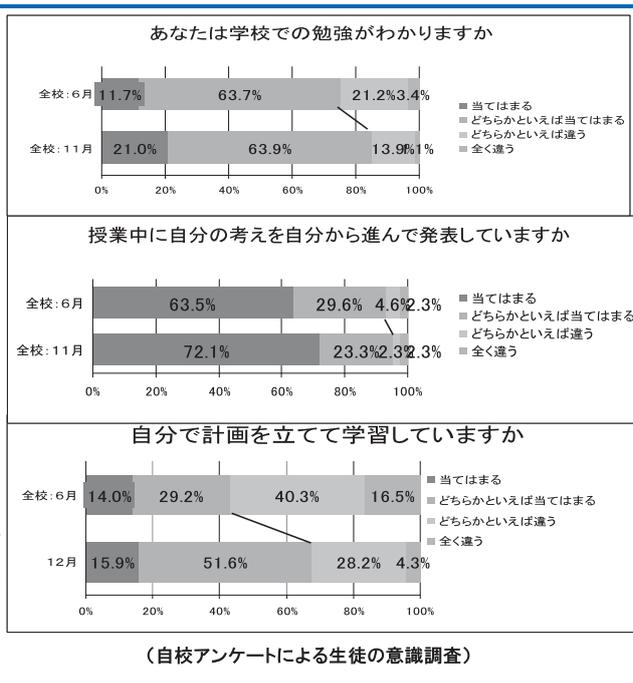
以上の結果から、自校の課題を

- ・人や事物と自分の関係を捉え、共通点や相違点を明らかにし、相手意識をもって適切に表現することによる学び合う力
- ・習得した知(学習した成果)のそれぞれを他の知と関連付けて考察し、新しい知を組み上げる力(活用する力)

と、整理した上で、これらの課題の根源を探り、学力を支えるものの一つとして、相手意識を重視したところの言語力にあると捉え、人との関わりの中で授業改善に取り組んだ。

2 成果

自校生徒アンケートの集計結果において、「あなたは学校での勉強がわかりますか」の質問について肯定的回答(「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」の和)が、6月には75.4%であったものが11月には84.9%となった。また、「授業中に自分の考えを、自分から進んで発表していますか」と聞いたところ、肯定的意見が6月93.1%から11月95.4%と増加しており、授業に対する意欲の向上が見られるとともに、発言内容も論理的な組立によるものが増加している。「分かる授業」を進めることにより、学んだ知をより深く定着させたいという意欲が育ち、自ら計画を立てて家庭学習を行う生徒が6月43.2%から12月77.5%へと増加するなど、学習習慣が身に付いてきている。



#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 具体的な研究内容と取組

###### (1) 「分かる授業」を支える中学生の学習習慣を形成する工夫

###### ① 「学習連結表」によるねらいの明確化

中学生の学習時間を、「登校後の朝学習の時間→授業時間→放課後の学習時間→帰宅後の家庭学習の時間」と整理し、月ごとの教育目標と各時間帯の学習内容及び重点的な取組の関連が明らかとなる「学習連結表」を作成した。全教職員が共通した実践を行うことのみならず、教師と生徒が同一のねらいをもって学習活動に臨めるように学習習慣の形成を図った。

9月	10月	11月
前期のめくりに向けて自分の課題を明確にし、計画的に学習できる生徒を育てる	秋のみの成果を具体的に語る生徒を育てる	冬運りも整え、時間を有効に活用して学習を進める生徒を育てる
前期期末テストに向けての取り組みを振り返り、よりよい学習習慣を確立できる生徒を育てる	後期の学習目標を設定し、目標達成のための具体的な計画を立てられる生徒を育てる	授業に真摯に取り組み、既習内容を確かめながら新単元の定着を図る生徒を育てる
3教科テスト	読書	県学習状況調査過去問題から
期末テストに向けて		
期末テストに向けて	県学習状況調査の過去問題 (各教科・小学校の問題からも) 3年生も2年生までの県学習状況調査の復習をする	
やまばと祭合組練習		
グループ学習の推進 個々の考える時間の保障	少人数学習の推進 学び合う活動の明示	
話し合いの積極経験	学習記録(ノート)指導の充実	
小・中連携によるT、T	小・中連携によるT、T	
	授業を見合う週間	県学習状況調査・中間テスト対策学習相談
	学習相談週間 楽しみMATH研究室	県学習状況調査・中間テスト対策学習相談
家族への貢献を奨励	予復習と授業の関連指導	3教科テストに向けて
テスト勉強会・テストに向けて	宿題のない数学休業	テスト勉強会・テストに向けて
期末テストに向けて	家庭学習調査週間	中間テストに向けて
期末テストに向けて		中間テストに向けて

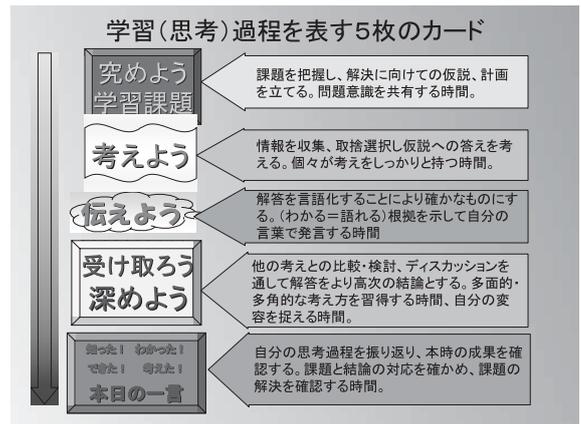
学習連結表(一部)

###### ② 学校間の教職員の連携及び家庭との連携による家庭学習習慣の改善

小学校の「家庭学習推進の手引き 学びのすすめ2010」と接続・発展させ、義務教育9年間を見通した家庭学習習慣の形成を図る。さらに家庭との連携を図り「家庭学習強化旬間」(保護者による「家庭学習ノート」確認旬間)を設け、家庭学習習慣ならびに生活習慣の改善に努めた。

###### ③ 論理的な思考過程を育成するための「分かる授業」過程の工夫

「授業」を、新しい「知」の獲得の場であり「知」を獲得する方法を習得する場である上に、社会生活に生かすことができる思考過程を模擬体験し習得する場としてとらえ、学習過程を表す5枚のカードを明示することによって、論理的な思考力の育成を図った。



###### (2) 生徒相互が学び合う学習活動の工夫

異年齢集団による放課後の時間帯を活用した学び合い学習(「楽しみMATH研究室」)を実施し、「分数・小数を完璧に計算できる西中生!」を目標に、ペア学習を主体とした小集団学習を行った。サブティーチャーを担う生徒の育成、学び合い学習への意欲の高揚を図り、その成果を生徒が捉えやすい学習環境の形成に努めた。

##### 2 取組による成果

- 実践事項を共通理解し共通実践していく中で、学校教育目標並びに目指す生徒像の具体的な姿が明らかとなった。
- 生徒の家庭学習実施時間の平均が6月→10月で12分増加し、さらに開始時刻が20時～21時台であったものが19時～20時台と早くなった。
- 数学科の取組として全教職員で実践した「楽しみMATH研究室」の手法が他教科においても導入されたことから、教科間での連携が図られ、学び合い学習が生徒に定着した。
- 保護者からの声として以下のことが寄せられた。
  - ・少人数で行われる各教科の学習相談(楽しみMATH研究室等)はとても良いと思います。部活や学校行事で大変とは思いますが、年間を通してできるだけ機会を増やしてほしいと思います。
  - ・学校と家庭が一体となり、子どもの成長を前向きに見守り協力していただいていることに感謝しています。

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 「確かな学力」向上推進協議会Ⅱにおいて実践発表を行い、本校の取組と成果について参加した先生方に伝えることができた。
- (2) 本校のホームページに取組と成果を掲載し、広く情報発信する。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	1	2	2	2	2	2	3	14	19
児童数	38	45	54	52	54	62	3	308	
学校のホームページアドレス						http://www.asamaisho.yokote-edu.jp			

II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

**国語B問題の設問別通過率**

[全国学力・学習状況調査結果から]  
国語B問題が、県平均を下回った。左のグラフのとおり、特に「あらすじをつかむ」「条件に合わせて考えや思い、わけを書く」ことの設定の正答率が県平均を下回っていた。  
\*事実や事象を整理しながら読む力  
\*読み取ったことを生かして、自分の考えを書く力

[授業の様子を観察、児童アンケートから]  
\*自分の考えをもつこと  
\*学び合いを通して、みんなで考えを深めていくこと

2 成果

[県学習状況調査結果から]  
\*「あらすじをつかむこと」「よく読んで、条件に合わせて自分の考えや思いをもち、そのわけを書くこと」の設定について正答率が県平均を上回ることができた。  
\*同時に、必要な叙述に着目したり、そのわけを説明したりする設問での正答率もよい結果となって表れた。

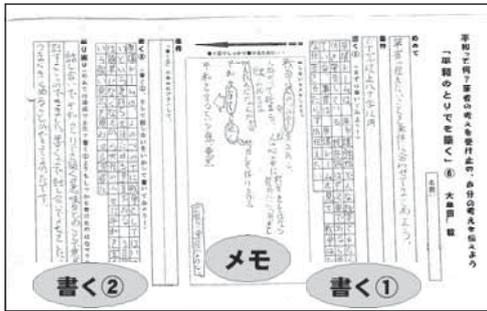
[授業実践の中から]  
\*「書くこと」を大事にした授業を積み重ねたことで、国語科では「深く考え、しっかり読み取る力」「必要な考えを取り入れる力」が付いた。また、他教科でも、学習のゴールに向かって見通しをもち、問題を解決していこうとする意欲が高まった。  
\*よい学び合いが〈書く②〉(後述)の内容につながるようになった。  
\*書くことに慣れることが「書く力」につながった。  
\*「考える」「書く」「読み取る」などのそれぞれの力は関わり合いながら個々の学力になっていくことを確認できた。

**6年 学習状況調査国語設問別通過率**

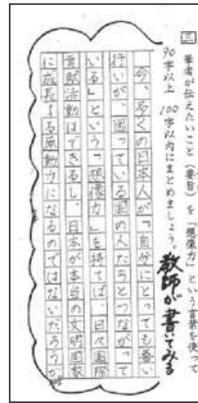
#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 授業改善のための共通実践

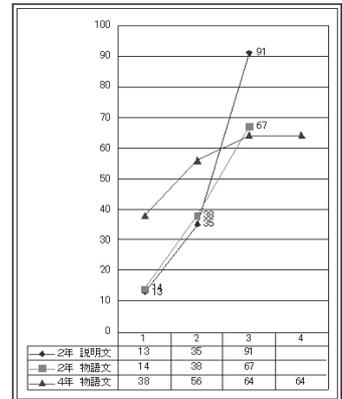
- (1) 国語の授業1時間の中に、「自分の力で書く〈書く①〉」、「学び合ったことをもとに書く〈書く②〉」の学習活動を設定した。
  - ① ねらいに沿って教師が作例を準備し、評価に生かした。
  - ② 条件（○字以上○字以下で、△△の言葉を入れて）に合わせ、活用する力を付けた。
  - ③ 他教科でも、書くことで見通しをもたせたり、学習成果を定着させたりした。



思考の深まりが見える学習シート



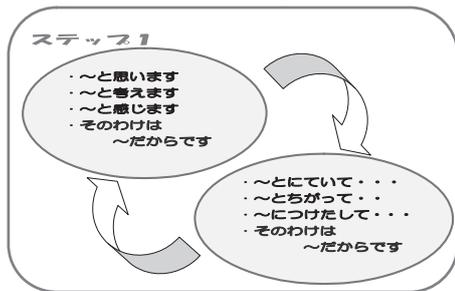
準備した作例



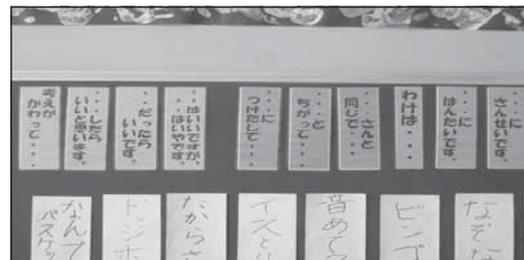
ねらいに到達した児童の割合  
(1単元の中での変容)

##### (2) 学び合いの充実

- ① 本校研究部が作成した表「こんな言葉を使って」を参考に、授業のねらいや学級の実態に応じて教師が話形を提示し、話し合わせた。
- ② 〈書く②〉をゴールにして、目的をもって話し合わせた。教師は、子どもの思考を揺さぶりながら話し合いをコーディネートするとともに、話し合いながら学び取ったことをメモさせ、自分の考えを深めさせた。



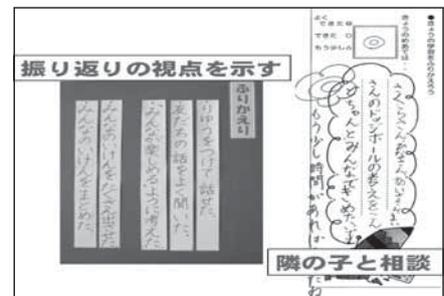
表「こんな言葉を使って (ステップ1)」



学習活動や学級の実態に応じた話型の提示

##### (3) 明確なめあてと次に生きる評価

- ① めあてに向かってまず書くこと(=考えること)で、見通しをもって学習に向かうことができるようにした。
- ② 〈書く①〉と〈書く②〉を自分で読み比べたり、友だちと〈書く①〉のよさを確かめたりしながら、自分の学びの変容をつかむことができるようにした。
- ③ めあてや振り返りの視点を示したり、ペアやグループで話し合わせたりして、自己評価の質を高めることができるようにした。
- ④ どんな学び方をしたから力が付いたかについても振り返らせ、次時以降の学習意欲・学び方へつなげた。



例：めあてと振り返り

##### 2 学びを支える言語環境づくり

- (1) 推薦図書の紹介や地域の方々による「おはなし会」など、読書活動を推進した。
- (2) 掲示物で、学習や生活のルールを啓発を図った。

##### 3 意識調査の実施

###### (1) 授業の様子について (児童・教師：6月・12月)

- ① 学び方についての子どもの自己評価の結果を一覧表にして、6月と12月の結果を個々に比較した。自己肯定感と学力の間の相関関係が明らかになり、自己肯定感をもたせる授業づくりの大切さを再確認することができた。
- ② 授業づくりの具体的な教師の課題(学び合いでのコーディネート・評価の生かし方等)が明らかになり、それに基づき授業を改善することができた。
- ③ 学ぶことの意義を子どもに考えさせようという教師の意識が高まった。

###### (2) 国語の学習について (児童：4月・10月・12月)

- ・読み取ったり、自分の考えを書いたりすることへの意欲が高まり、自信がついた。

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 「確かな学力」向上推進協議会Ⅱのワークショップで、県南の各学校に紹介する。
- (2) 地区内の小・中学校に成果を紹介するとともに、さらに改善を加え研究を推進していきたい。

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数	
学級数	5	3	3				2	13	26	
生徒数	141	118	115				8	382		
	学校のホームページアドレス						ホームページなし			

II 研究の重点

- ウ) 分かる授業の探究
- オ) 地域社会との連携

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

- (1) 全国学力・学習状況調査のA問題(知識)、B問題(活用)については、国語、数学とも秋田県平均を上回っている。しかし、受動的で自己開示の苦手な生徒もおり、課題意識を一層高めるとともに、互いに関わる学びから「考えが広がったり深まったりして分かった」という実感をもたせることが課題である。
- (2) 失敗をおそれずに挑戦しようとする姿勢に欠け、家庭や地域で積極的に役割を果たそうとする姿勢も十分ではない。また、将来の夢や目標といった生き方あるいは進路についての意識や、自己実現のために学ぼうとする意欲も不十分である。地域社会と連携しながら勤労観や職業観を育て、自己実現の基盤となる学習意欲をさらに高めることが課題である。

秋田県平均との比較

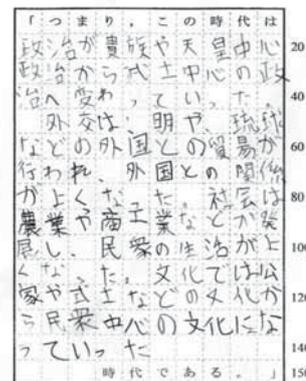
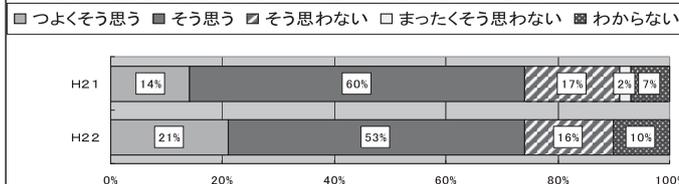
(全国学力・学習状況調査「質問紙調査」より)

質問事項		H22	H21	H20
難しいことでも失敗をおそれないで挑戦していますか	比較	+ 6.3	- 4.4	- 3.1
	本校	76.5	62.7	64.8
	秋田県	70.2	67.1	67.9
将来の夢や目標をもっていますか	比較	+ 4.9	- 1.6	- 3.1
	本校	82.6	75.4	74.0
	秋田県	77.7	77.0	77.1
家の手伝いをしていますか	比較	-15.9	- 7.7	+ 3.0
	本校	44.3	50.0	59.3
	秋田県	60.2	57.7	56.3

2 成果

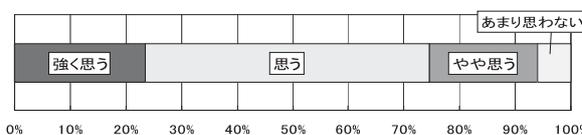
- (1) 生徒の学習意欲や授業に対する意識がさらに向上した。  
学習態度に関する生徒の振り返りアンケートを7月と11月で比較すると、「積極的に発表しよう」、「話し方を工夫して発表しよう」などの項目の数値が上昇した。
- (2) 「勉強がよく分かる」という生徒の割合が高まった。  
秋田県学習状況調査の質問紙調査を全校生徒対象に実施した。「学校の勉強がよく分かる」と回答した生徒の割合が1・3年生で増加した(1年生は昨年度の1年生との比較、3年生は同一集団による経年比較)。増加傾向の見られなかった2年生でも、学力調査の結果は昨年度の県平均+2.5ポイントから+3.8ポイントに上昇し、学力の向上が認められた。
- (3) 習得した知識や技能を活用して課題を追究できる生徒が増え、思考力・判断力・表現力の高まりが見られた。  
一例として社会科の実践では、1年生で時代の特色を文章でまとめる学習に取り組んだ。5月段階では、その時代のできごとを羅列したり教科書の表記をそのまま記述したりする生徒が多かったが、11月段階では、それまでの時代との比較や社会的事象の意味を自分の言葉で表現し、時代の特色を適切にまとめる生徒が増加した。
- (4) 体験を通して勤労観が変容し、多くの生徒がコミュニケーション能力の必要性や学ぶことの重要性を再認識した。  
「働く前やその後の学習の重要性に対する意識」「勉強に対する意欲」のいずれにおいても好ましい方向に変容が見られた。

学校の勉強がよく分かる(県学習状況調査「質問紙調査」より)



中世の特色のまとめ(社会科1年)

体験後、勉強に対する意欲が高まってきた



職場体験後のアンケートより(2年)

#### Ⅳ 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 分かる授業の探究

###### (1) PDCAサイクルによる授業改善の日常化

右の図のように、全国学力・学習状況調査などの諸調査の結果を活用した授業改善のサイクルを構築し、全教科で授業改善に取り組んだ。年6回の研修会を位置付け、他教科の取組に学びながら効果的な言語活動を探った。

###### (2) 「かかわる学び」の重視と共通実践の明確化

B問題の分析から、思考力・判断力・表現力の向上には、話を聞き、自分なりの考えを創り、学びを深化させる話し合い活動が重要であると考えた。「かかわる学び」を全教科で実践するため、次の2点を共通実践した。

- ◆グループ等で話し合いをさせる場合でも、学級全体で意見を出し合い、考えを深め合う場を設定すること。

- ◆話し合いの際は、必ず他者の意見との関係を示したり、自分の立場を明確にしたりしてから発言すること。

これらの実践により、表現力と聞く力が伸長した。国語では、発言者が次の発言者を指名する手法を試みている。繰り返し指導している中で、生徒が自分たちで話し合いの方向や流れを捉えられるようになり、「今までの意見とは違うのですが…」といった発言から、考えが広がり深まったりしていく姿が見られるようになった。

###### (3) 習得した知識・技能を活用する言語活動の工夫と効果的な振り返り

活用を意図した学習活動には、次の点が重要である。

- ◆目指す生徒の姿を段階的に実現する年間指導計画

- ◆学習のゴールや見通しをもたせるための単元カード及び導入の工夫

- ◆学習活動に応じたより具体的な評価規準

- ◆習得の重要性や活用の達成感を認識させる振り返り

社会の歴史的分野では年間2回、ペアやグループでの調べ学習の後に150字程度で時代の特色をまとめさせている。より適切なキーワードを選んだり、事象を関連付けまとめて表現したりする。評価規準を生徒作品と一緒に示し、学習の目標をより高く具体化させている。

###### (4) 生徒による相互評価を取り入れた言語活動の工夫

他の生徒の考えや作品、パフォーマンスなどを評価する場を設けることで、思考力・判断力・表現力が高まっている。このような言語活動では、次の点が重要である。

- ◆評価の視点の明確化と評価に関わる語彙の提示

- ◆評価の受け止めとその活用を明確にさせる工夫

理科では、力や電気といった目に見えない現象をモデルを用いて説明し合う中で、科学的な思考を促した。

保健体育では、柔道にトリオ学習という形態を取り入れ、3人のうち1人が観察しアドバイスする。言語活動の時間を確保することが、技の習得を早めている。

技術・家庭では、献立作成や布の絵本製作の学習に付せんによる相互評価を取り入れ、学習意欲を高めている。

##### 2 地域の教育力を生かした体験活動の充実

(1) 2年生の「総合的な学習の時間」に、横手市内50か所の事業所で3日間の職場体験を実施した。就職後の学びや中学校の学習の重要性について、生徒がそれぞれの職場で質問できるように事前指導した。事業所の方からは、学びの重要性について現実に即しながら具体的な言葉で語っていただいた。生徒は自分の体験とも重ね合わせながら学習意欲を高めることができた。

(2) ボランティア活動への参加をJRC委員会が呼びかけ、全校生徒の半数以上が参加した。

#### Ⅴ 成果の普及に関する今後の取組

(1) 成果を市教育センターのホームページに掲載するとともに、学校視察を積極的に受け入れる。

(2) 地区の教科等の研究会や研修会で実践事例を紹介する。

#### 授業改善のPDCA短期サイクル

##### ステップ1（年度初め～夏季休業）

- ①全国学力・学習状況調査、標準学力検査、観察等による実態把握と課題の明確化
- ②計画の立案と授業実践による検証
- ③生徒アンケートなども活用した評価と新たな課題の明確化、研修による共有

##### ステップ2（夏季休業～冬季休業）

- ①より効果的な指導方法の具体化と授業実践による検証
- ②県学習状況調査、生徒アンケートなども活用した評価と新たな課題の明確化、研修による共有

##### ステップ3（冬季休業～年度末）

- ①授業改善の成果と課題の取りまとめ
- ②次年度の課題の明確化と教科経営方針や実践計画の検討



生徒の連続した発言と教師による構造化された板書でねらいにせまっていく国語の授業

##### 生徒のまとめを分類し作成した 評価規準（社会科）

	易	難
短文型	特徴を表す代表的な事実や語を選び出し、短文で記述する型	
網羅型	調べたこと、学んだことから語句を精選し、網羅的につなげて記述する型	
比較型	既習の学習内容、概念と比較して記述する型	
置換型	調べたこと、学んだこと、とらえたことを、別の言葉や語句に置き換えて記述する型	
関連型	政治、外交、社会、文化の四つの視点からとらえたことを、関連、総合させて記述する型	

##### <社会科の学習後の生徒の振り返り>

- ・キーワードを一つにまとめることで、より深く時代が分かった。
- ・一番大事なキーワードを最初に書くことと続きの文が書きやすいと思った。
- ・友達がキーワードと理由を発表しているのを聞いて納得し参考になった。
- ・友達と意見交換すると新たな考えが出てくるのが分かった。

## I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	4	4	3				1	12	25
生徒数	119	128	119				1	367	
学校のホームページアドレス						http: kitachu@yutopia.or.jp			

## II 研究の重点

- ア) 児童生徒の自主性に基づく学習の探究  
エ) 学校間の教職員の連携

## III 自校の課題と取組による成果

## 1 自校の課題

## 【学習への姿勢】

明るく素直で、与えられた課題に対しては真剣に取り組むが、問題解決に対してはどちらかという受け身の学習態度が見られる。

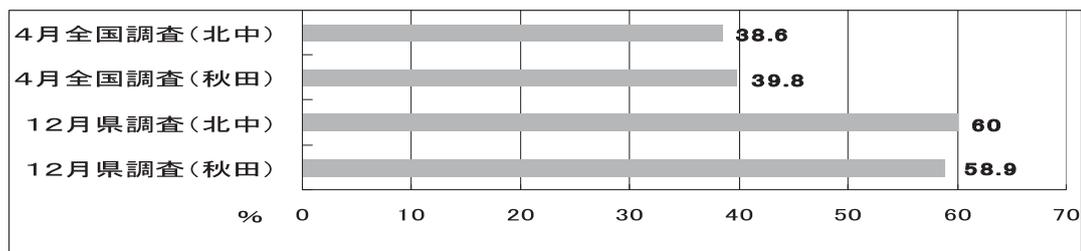
## 【全国学力テスト】

- ・国語…B問題 32 (正答率38.6%) から、表現の仕方に注意して読み取り、内容を理解する点で苦手な面が見られる。
- ・数学…B問題 5(2) (正答率12.3%) から、日常的な事象を数学的に解釈し、数学的な表現を用いて考察・説明したりする力に課題が見られる。
- ・その他の教科で…自らの学びを実感している生徒がやや少ない。授業における学びや体験に基づく気付きなどを振り返ったり、まとめたりするなど、言語を介して思考し、判断し、表現することが今後必要である。

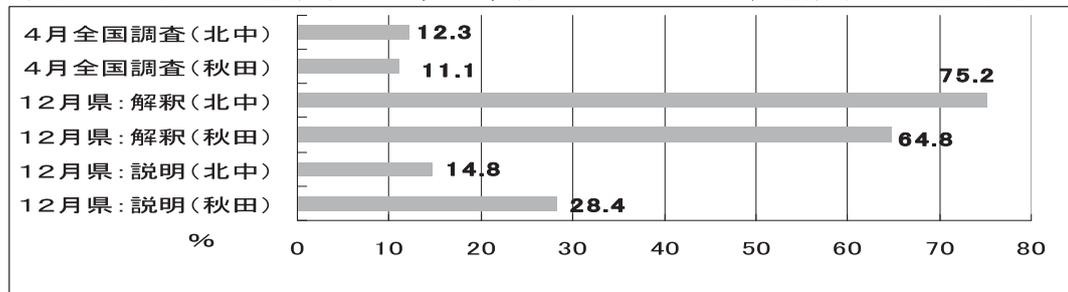
## 2 成果

- 1 言葉で関わろうとする生徒が増えてきており、新たな考えとの出会いが、内容を理解する力につながってきている。

- ①国語(学期末授業アンケートより)…「a 楽しく授業を受けることができたか。b 楽しかったものは何か。」  
a …「はい」1学期87%→2学期95%  
b …グループを活用した「話し合い活動」を挙げた生徒が、1学期の50%未満から、2学期は70%程度に増加した。
- ②国語(テスト問題より)…表現の仕方に注意して読み取り、内容を理解する力



- ③数学(テスト問題より)…事象を数学的に解釈し、成り立つ事柄の特徴を数学的に説明する力



- 2 学習課題が明確な生徒ほど、主体的に活動する姿を見て取ることができた。

- ①保健体育…運動のコツ、戦術のポイントに注目してお互いにアドバイスし合う際の視点、話し合いの時間を提供したことで、自己の目標と課題が明確な生徒ほど、話し合いに積極的に参加している。また、課題解決への意欲とも密接に関係している。
- ②国語…生徒が読解の授業に意欲的に取り組むことができるよう、ねらいを明確にし学習のゴールをはっきり示すことで、テンポよく授業を進められ、生徒も授業に対して好印象を持っていることが、授業評価からもうかがえた。

#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

習得した知識・技能の活用をねらいとした問題解決的な学習を、学習過程に意識的に位置付けることで、生徒は学ぶことの楽しさや意味を知り、受け身の姿勢から自ら学ぶ姿に変容するものと考えられる。そのために、次に挙げる「4つの関わり」をキーワードとして研究実践することが、「全国学力・学習状況調査」から導き出された課題克服につながると考えた。

##### ○ 具体的な研究内容と取組、成果（4つの関わり）

###### (1) 「生徒と教師、生徒同士の学び」への関わり 研究内容

**取組**：「話し合い活動」を各教科の学習過程に位置付ける。

**成果**：国語において古典や文学的文章の読解の学習の後で、作品の内容に関わるテーマを設定し、ミニディベートやシンポジウムを行った。読み取りをもとに自分の意見をもたせ、他の意見との練り合いの中でさらに考えを深めた。



###### (2) 学習意欲につながる「評価」との関わり 研究内容

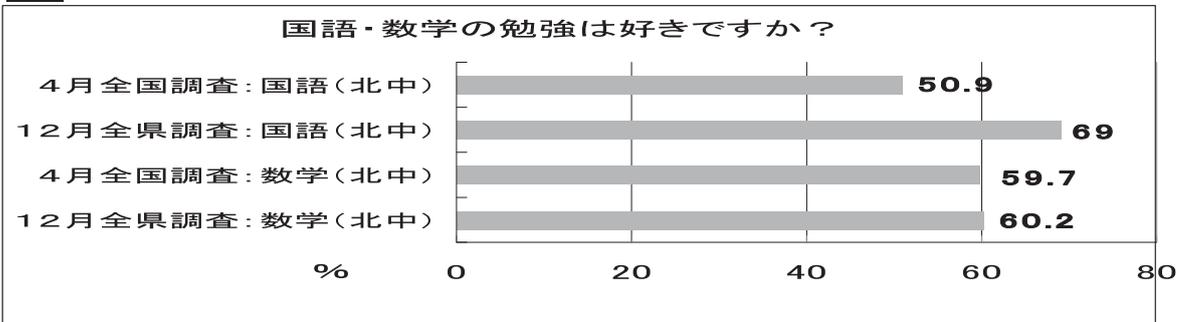
【国語：ミニディベートの授業風景】

**取組**：全国学力・学習状況調査の結果から「読み取る力」と「説明する力」の2点を共通項目として提示し、各教科で「生徒アンケート」に反映させて学期ごとに実態調査をする。

**成果**：「生徒アンケート」の結果を全体研修の場で検証したことで、教員一人一人が実感を持って次の学期の方向性を確認することができた。

**取組**：生活アンケートと定期テスト結果との相関関係を出し、「生徒指導だより」に載せる。

**成果**：日常生活の在り方と関連づけて、家庭に学力伸長のポイントを意識させることができた。



###### (3) 教科の枠を超えて授業力を高める「教員相互」の関わり 研究内容

**取組**：教科を越えた授業づくりの視点をもつ。

『生徒の目が輝く授業』のために、生徒同士及び生徒と教師の『関わり』はどこで見られたか。

**取組**：多様な研修形態（「全体研修」「選択研修」「関係者研修」）をもつことで、他教科から学ぶ姿勢。

**取組**：校内の研修体制を日常化する。

- ・「LT (Learning Together) 授業…空き時間に授業参観することで他の教諭や他教科から学ぶ姿勢をもつ。(2学期は月ごとに1週間の強調週間を設けた。)

- ・「年に1回は、全員1回は研究授業を」=研究誌「北林」

**成果**：教科担当者だけの研究から、全職員で研究の視点を共通理解し、実践したことで、広い視野から授業づくりを意識できるようになってきた。(Ⅲ2の成果と同じ)



【授業後の感想用紙から】

###### (4) 「義務教育9年間」の学びと規律への関わり 研究内容

**取組**：3小学校の研究主任と協議し、全国学力学習状況調査の分析を踏まえ「共通実践事項」を決定する。(「学習規律7ヶ条」の共通実践)

**取組**：小学校の指導主事訪問に際し、単元構想時の指導案検討会の段階から参加し、中学校の学習を見据えた系統的な指導過程を一緒に構築する。【数学科の実践】

**取組**：各小学校の外国語活動に年間20時間程度英語科教諭が出向き、学区内の3小学校の実態に応じた形(T1またはT2として)で支援を行う。【英語科の実践】

**成果**：9年間のスパンで児童生徒の学びを考える契機となり、小・中連携教育の確実な歩みとすることができた。

中学校でのつまずきを、小学校の先生方にも理解してもらえる場になった。

児童の学習環境を確認し、さらに各小学校の児童理解につながることができた。

#### V 成果の普及に関する今後の取組

(1) 研究の概要をホームページに載せることで、県内外の各学校に研究の取組及び成果を発信する。

(2) 「湯雄ステップアップ委員会 (湯沢雄勝地区の学力向上委員会)」に成果を発信し、市内各校で共有化してもらうとともに、校内では得られない客観的で専門的な意見を交換することで、さらに研究成果の向上を図る。

研究主題

意欲的に学び、確かな学力を身に付けることができる子どもの育成  
～国語科の「読む力」、算数科の「数学的に考える力」を育てる指導を通して～

羽後町立西馬音内小学校 校長 菊地 保子

I 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計	教員数
学級数	2	2	2	1	2	2	1	12	18
児童数	54	42	47	40	53	53	5	294	
学校のホームページアドレス									http://www.yutopia.or.jp/~baon/

II 研究の重点

- イ) 児童生徒相互の学びの探究
- ウ) 分かる授業の探究

III 自校の課題と取組による成果

1 自校の課題

全国学力・学習状況調査の結果からみた課題  
 〈国語〉物語を読んで思ったことや考えたことを、理由を明確にして書く  
 B問題 設問番号2(二)…正答率50.9%(全県90.3%)  
 〈算数〉事実や方法、理由等を説明する  
 B問題 設問番号5(2)…正答率47.2%(全県30.7%)  
 設問番号6(2)…正答率43.4%(全県27.7%)  
 自校は上記数値のとおり、読み取ったことや考えたことを条件に応じて書いたり、事実や方法、理由等を明確に説明することなど、知識や技能を活用する力について課題がある。

2 成果

既習の知識や技能を活用して自分の考えをもち、ノートに分かりやすくまとめ、ペアやグループや全体で発言し関わらせていく指導過程を工夫する。この授業実践によって、考えを組み立てることに自信をもてる、相手に分かってもらえる、解決に近付けるなど相互の学びが実現し、主体的、意欲的に授業に参加することができた。

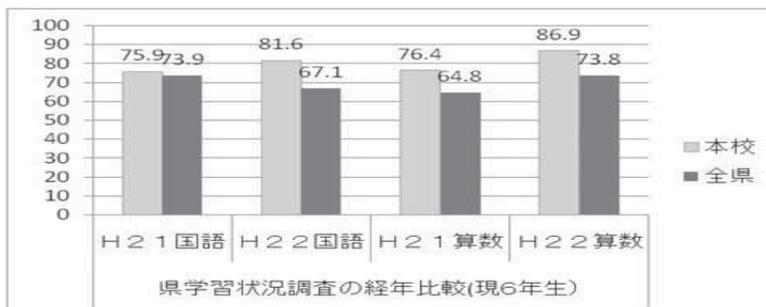
この成果は、全国学力・学習状況調査の質問紙の一部について12月に再調査した結果からも見取ることができる。

また、今年度の秋田県学習状況調査において、全国学力・学習状況調査B問題の出題の主旨を生かした問題では、国語の6年(18と算数の4年(20の問題で理解が不十分だったものの、その他の問題については学年、教科を問わず正しく読み取ることや、読み取ったことを筋道を立てて分かりやすく説明することなどが「十分満足」及び「おおむね満足」できる状況であり、自校の課題についても改善されてきている。

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた割合(%)

項目		H22.4	H22.12
国語の授業について	国語の勉強は好きだ	60.4	86.8
	内容はよく分かる	88.7	98.1
	目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている	92.5	100.0
	意見などを発表するとき、うまく伝えるように話の組み立てをくふうしている	71.7	86.8
	自分の考えを書くと、考えの理由が分かるように気をつけて書いている	81.1	94.3
	文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる	86.8	94.3
算数の授業について	算数の勉強は好きだ	90.3	94.3
	内容はよく分かる	86.8	96.2
	新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたい	92.5	100.0
	問題の解き方が分からないときは、あきらめずいろいろな方法を考える	90.6	94.3
	学習したことをふだんの生活の中で活用できないか考える	92.4	84.9
	問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える	90.6	96.2
公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている	90.6	100.0	
問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている	88.7	96.2	

学習についてのアンケート(全国学力・学習状況調査の質問紙との比較)



#### IV 成果に寄与したと考えられる取組

##### 1 具体的な研究内容

###### (1) 児童生徒相互の学びの探究

###### ① 読み取ったことや考えたことを、分かりやすくまとめる手立ての工夫

- ・国語科では、目的意識をもたせるために単元のゴールを明確にし、目的に応じて書く活動を意図的に組み込み、条件に応じて書くための作文スキルの習熟を図る。
- ・算数科では、自分の考えを絵や図・式や言葉でまとめる。その際は、「算数用語」や筋道を立てて説明する言葉（「めざせ説明上手」シート）を使うことで記述内容の質を高める。

###### ② 伝え合い、重ね合い、学び合う場の工夫

- ・ペア・グループ・全体など、ねらいに応じて効果的に学び合える学習形態を工夫する。
- ・途中までの考えを取り上げて全体で練り合ったり、自他の考えの共通点や相違点に着目したりして思考を深める。また、グループでの学び合いでは、「話し合いの進め方」表を活用したりする。

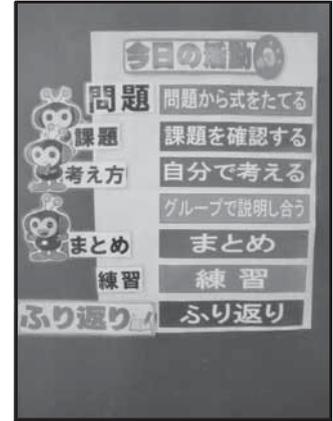
###### (2) 分かる授業の探究

###### ① 明確なねらいをもって、正しく読み取らせるための手立てを工夫する。

- ・「読みのスキル」の活用のしかたを工夫する。

###### ② 問題解決的な授業構成を工夫する。

- ・問題解決的な学びの型を共通実践する。
- ・思考の流れが分かるノートづくりに取り組む。



1 単位時間の学習の流れが分かるシート。左のカードは全校で統一したもので、板書の際に移動して使う。

##### 2 成果と検証

###### (1) 児童生徒相互の学びの探究

###### ① 学び合いのための準備の段階

国語では、読み取ったことを自分の言葉に置きかえて整理することによって、自分なりの考えをもつことができるようになってきている。また、キーワードや字数を指定することで、条件に応じて書く力が付いてきている。

算数では、「算数用語」を意識して使えるようになってきている。また、「説明上手」シートを活用して、順序立てて説明したり、根拠と結論を意識して説明する力が付いてきている。算数単元評価問題の記述式問題の活用も、記述力を付ける成果につながっている。

###### ② 本質的な学び合いが生まれる場

ペア・グループ・全体で考えを出し合わせ関わらせていくことによって、主体的、意欲的に授業に参加することができるようになってきている。また、相互に様々な見方や考え方に触れることで、発見する学び合いの授業が多く実践されるようになってきている。

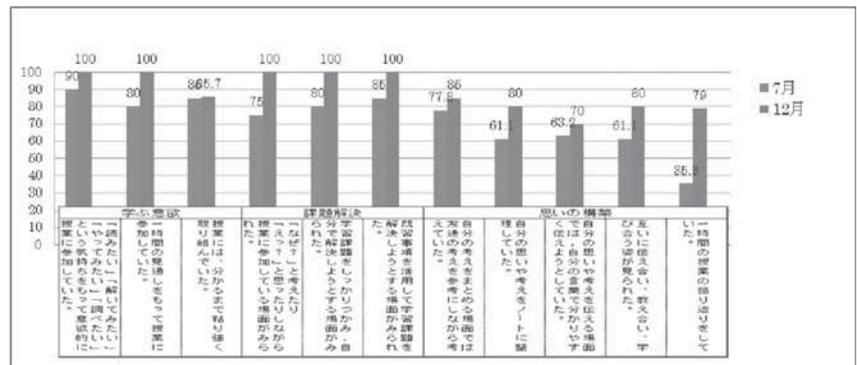
###### (2) 分かる授業の探究

###### ① 必要に応じて「読みのスキル」を活用した読み取りができるようになってきている。また、高学年では、スキルを自分の読書活動に生かすことができるようになってきている。

###### ② 「問題」「課題」「考え方」…などのカードを活用した板書構成により、「読んで、考えて、書いて、伝える」学習の流れが定着し、見通しをもって学習に取り組むことができるようになってきている。また、流れに沿ったノートの使い方が身に付き、思考力や表現力が育ってきている。

###### (3) 学年主任会の実施

月に1回程度の割合で学年主任会を開き、共通実践事項について話し合い、確認する場とした。この調査研究を全校体制で進めるという意識をもって取り組むことができ、成果につながっている。



教師の評価（「学ぶ意欲」「課題解決」「思いの構築」を「子どもの姿」で評価）

#### V 成果の普及に関する今後の取組

- (1) 学校報やPTAなどで、本校の取組や成果等について地域の方や保護者に知らせる。
- (2) 地区研究会等で紹介し、他校と情報交換する機会をもち、さらに改善点を明らかにして研究を推進していく。
- (3) 県外からの視察等を受け入れ、本校の取組を紹介する。